明野村文化財調査報告5

# 千野木Ⅰ・Ⅱ遺跡
# 池の下遺跡
# 踊石Ⅱ遺跡
# 中村道祖神遺跡

Chinogi-Ⅰ・Ⅱ Site
Ikenoshita Site
Odoriishi-Ⅱ Site
Nakamuradosozin Site

1990

山梨県明野村教育委員会

# 千野木Ⅰ・Ⅱ遺跡
# 池の下遺跡
# 踊石Ⅱ遺跡
# 中村道祖神遺跡

Chinogi-Ⅰ・Ⅱ Site

Ikenoshita Site

Odoriishi-Ⅱ Site

Nakamuradosozin Site

# 例　言

1．　本書は、県営圃場整備事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．　調査の対象となった遺跡、調査期間、調査面積は、以下のとおりである。

千野木Ⅰ遺跡（山梨県北巨摩郡明野村上手4001）

1989年6月7日～6月26日　600㎡

千野木Ⅱ遺跡（山梨県北巨摩郡明野村上手3806）

1989年6月14日～6月26日　325㎡

池の下遺跡（山梨県北巨摩郡明野村浅尾3171）

1989年6月27日～8月8日　878㎡

踊石Ⅱ遺跡（山梨県北巨摩郡明野村浅尾1567）

1989年7月28日～8月22日　478㎡

中村道祖神遺跡（山梨県北巨摩郡明野村浅尾178）

1989年7月14日～12月8日　4,783㎡

3．　本書は、本編を大森隆志、付編を会田信行氏が執筆した。編集は、大森が行なった。ただし、陶磁器に関しては、田尾誠敏氏（東海大学）の観察結果を大森がまとめたものである。

4．　石器石材の鑑定は、柴田徹氏（東京都立青山高校教諭）に、また、中村道祖神遺跡の鉱物分析は、会田信行氏（千葉県立成田園芸高校教諭）にお願いした。

5．　本文挿図中の土層説明の色調は、『新版標準土色帖』（1967年　小山正忠・竹原秀雄）によった。

6．　発掘調査、報告書作成にあたって次の各位には、とくに御指導、御教示を賜った。記して謝意を表する次第である。

長沢宏昌　新津　健　八巻與志夫　前田　潮　吉岡弘樹　江崎　武
萩原三雄　伊藤公明　白石太一郎　禿　仁志　設楽博己　保坂康夫
田尾誠敏　中山誠二　外山秀一　（敬称略）

7．　本調査に関する資料の一切は、明野村教育委員会に保管されている。

8．　調査にあたった組織は以下のとおりである。

調査主体者　長田博徳　明野村教育委員会教育長
調査担当者　大森隆志　明野村教育委員会主事・文化財調査員
調査補助員　辻　貴久　山梨大学学生
斎藤弘也　山梨大学学生
小宮山隆　筑波大学学生

事　務　局　明野村教育委員会

調査参加者

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 三塚てつ子 | 清水恵三子 | 深沢あさ子 | 篠原啓子 | 宮川　寛 | 篠原源一 | 長田節子 |
| 清水小春 | 阿部恵子 | 入戸野たかじ | 入戸野つるじ | 三井啓介 | 皆川和歌子 | 鈴木晶子 |
| 三井とも子 | 入戸野宏 | 水上治良 | 水上きく子 | 深沢のぶ子 | 清水美智子 | 皆川一子 |
| 入戸野とめ子 | 西沢　葵 | 篠原勝也 | 古屋信浩 | 駒井博樹 | 清水利英 | 遠藤光男 |
| 小林　学 | 長田俊治 | 入戸野きぬ代 | 入戸野フサコ | 入戸野みず子 | 篠原さかえ | 水森広徳 |
| 輿水辰子 | 清水さゆり | 清水真奈美 | 坂本富美子 | | | |

# 本　文　目　次

例　言
第１章　遺跡の立地と周辺の遺跡 …… 1
第２章　千野木Ⅰ・千野木Ⅱ遺跡の調査
調査の概要 …… 8
第３章　池の下遺跡の調査
調査の概要 ……13
第４章　踊石Ⅱ遺跡の調査
第１節　縄文時代の遺物 ……21
第２節　中世の遺物 ……21
第３節　江戸時代の遺構と遺物 ……21
第１項　江戸時代の遺構 ……21
第２項　江戸時代の遺物 ……23
第４節　時期不明の遺構 ……23
第５章　中村道祖神遺跡の調査
第１節　層序 ……28
第２節　縄文時代の遺物 ……28
第１項　土器 ……28
第２項　石器 ……28
第３節　弥生時代の遺構と遺物 ……29
第４節　平安時代の遺構と遺物 ……29
第５節　中世の遺構と遺物 ……36
第１項　地下式坑 ……36
第２項　土壙墓 ……48
第３項　土坑 ……75
第４項　埋設土器 ……75
第５項　土器・土製品・陶磁器 ……75
第６項　石器・石製品 ……79
第７項　古銭 ……80
第６節　時期不明の遺構 ……80
第７節　まとめ ……99

参考文献 ……100
付編　中村道祖神遺跡の砂粒組成・重鉱物組成 ……102

# 挿　図　目　次

Fig. 1　遺跡の位置 ……3
Fig. 2　遺跡の位置 ……4
Fig. 3　千野木Ⅰ遺跡・千野木Ⅱ遺跡 調査範囲 ……7
Fig. 4　池の下遺跡調査範囲 ……11
Fig. 5　池の下遺跡遺構分布図 ……12
Fig. 6　1号住居址 ……14
Fig. 7　1号住居址カマド ……14
Fig. 8　1号住居址出土土器 ……15
Fig. 9　1号住居址出土石器 ……16
Fig. 10　1号焼土 ……16
Fig. 11　踊石Ⅱ遺跡調査範囲 ……19
Fig. 12　踊石Ⅱ遺跡遺構分布図 ……20
Fig. 13　出土遺物 ……22
Fig. 14　土壙墓 ……23
Fig. 15　古銭 ……23
Fig. 16　掘立柱建物跡 ……24
Fig. 17　中村道祖神遺跡調査範囲 ……27
Fig. 18　層序 ……28
Fig. 19　出土遺物（石器） ……31
Fig. 20　出土遺物（石器・石製品・土器） …32
Fig. 21　1・2・3号住居址 ……33
Fig. 22　1・2・3号住居址出土土器 …34
Fig. 23　3号住居址・93号土坑出土土器 …35
Fig. 24　地下式坑（91号・88号） ……49
Fig. 25　地下式坑（117号・3号） ……50
Fig. 26　地下式坑（87号・2号） ……51
Fig. 27　地下式坑（1号・4号） ……52
Fig. 28　地下式坑（6号・18号・107号） …53
Fig. 29　地下式坑（7号・9号） ……54
Fig. 30　地下式坑（5号・11号） ……55
Fig. 31　地下式坑（17号・26号） ……56
Fig. 32　地下式坑（39号・61号） ……57
Fig. 33　地下式坑（43号・45号） ……58
Fig. 34　地下式坑 （52号・44号・106号・65号） ……59
Fig. 35　地下式坑 （52号・44号・106号・65号） ……60
Fig. 36　地下式坑（36号・60号） ……61
Fig. 37　地下式坑（35号・46号） ……62
Fig. 38　地下式坑（169号・64号） ……63
Fig. 39　地下式坑（69号・171号） ……64
Fig. 40　地下式坑（148号・166号） ……65
Fig. 41　地下式坑（147号・155号） ……66
Fig. 42　地下式坑（168号・149号） ……67
Fig. 43　地下式坑（153号・150号） ……68
Fig. 44　地下式坑（154号・138号） ……69
Fig. 45　地下式坑（152号・156号） ……70
Fig. 46　土壙墓（1） ……73
Fig. 47　土壙墓（2） ……74
Fig. 48　埋設土器 ……75
Fig. 49　中世の土器・陶磁器 ……77

Fig. 50　中世の土器 ……78
Fig. 51　古銭（1） ……83
Fig. 52　古銭（2） ……84
Fig. 53　古銭（3） ……85
Fig. 54　土坑（1） ……89
Fig. 55　土坑（2） ……90
Fig. 56　土坑（3） ……91
Fig. 57　土坑（4） ……92
Fig. 58　土坑（5） ……93
Fig. 59　土坑（6） ……94
Fig. 60　土坑（7） ……95
Fig. 61　土坑（8） ……96
Fig. 62　土坑（9） ……97
Fig. 63　土坑（10） ……98
Fig. 64　地下式坑の埋まりかた模式図 …100
Fig. 65　地下式坑・土壙墓主軸方向 …101
Fig. 66　分析試料の砂粒組成と重鉱物組成 …105
Fig. 67　分析試料採取位置 ……106
Fig. 68　中村道祖神遺跡と白山Ⅰ遺跡の対比 ……106
Fig. 69　遺構分布図 ……別添図

## 付　表　目　次

Tab. 1　古銭（1） ……81
Tab. 2　古銭（2） ……82
Tab. 3　土坑表（1） ……86
Tab. 4　土坑表（2） ……87
Tab. 5　土坑表（3） ……88

## 写　真　図　版　目　次

PL. 1　遺跡の位置
PL. 2　千野木Ⅰ・Ⅱ遺跡調査風景・出土遺物
PL. 3　遺跡の位置
PL. 4　遺跡遠景・池の下遺跡調査風景
PL. 5　1号住居址・遺物出土状況
PL. 6　1号住居址出土土器・1号焼土
PL. 7　1号住居址出土遺物
PL. 8　掘立柱建物跡
PL. 9　1・2号土壙墓
PL. 10　踊石Ⅱ遺跡出土遺物
PL. 11　1号住居址・2号住居址
PL. 12　3号住居址・1号埋設土器
PL. 13　93号土坑
　　1・2・3号住居址出土遺物
PL. 14　3号住居址出土遺物・1号埋設土器
PL. 15　1・2・3号土坑
PL. 16　4・5・6・18号土坑
PL. 17　7・9・11号土坑

PL. 18　17・26・35号土坑
PL. 19　36・39・43号土坑
PL. 20　44・52・65・106号土坑
PL. 21　46号土坑
PL. 22　45・60・61号土坑
PL. 23　64・69・87・88号土坑
PL. 24　91・107・117・138号土坑
PL. 25　147・148・155・166号土坑
PL. 26　149・150号土坑
PL. 27　152・153・154・156号土坑
PL. 28　168・169・171号土坑
PL. 29　8・25・113号土坑
PL. 30　29・41・53号土坑
PL. 31　59・66・68・139号土坑
PL. 32　70・109・131号土坑
PL. 33　48・93・135号土坑
PL. 34　地下式坑出土土器
PL. 35　地下式坑・土壙墓・土坑出土遺物
PL. 36　古銭
PL. 37　石器・石製品
PL. 38　石製品・土製品・深掘りセクション
PL. 39　遺跡全景

# 第１章　遺跡の立地と周辺の遺跡

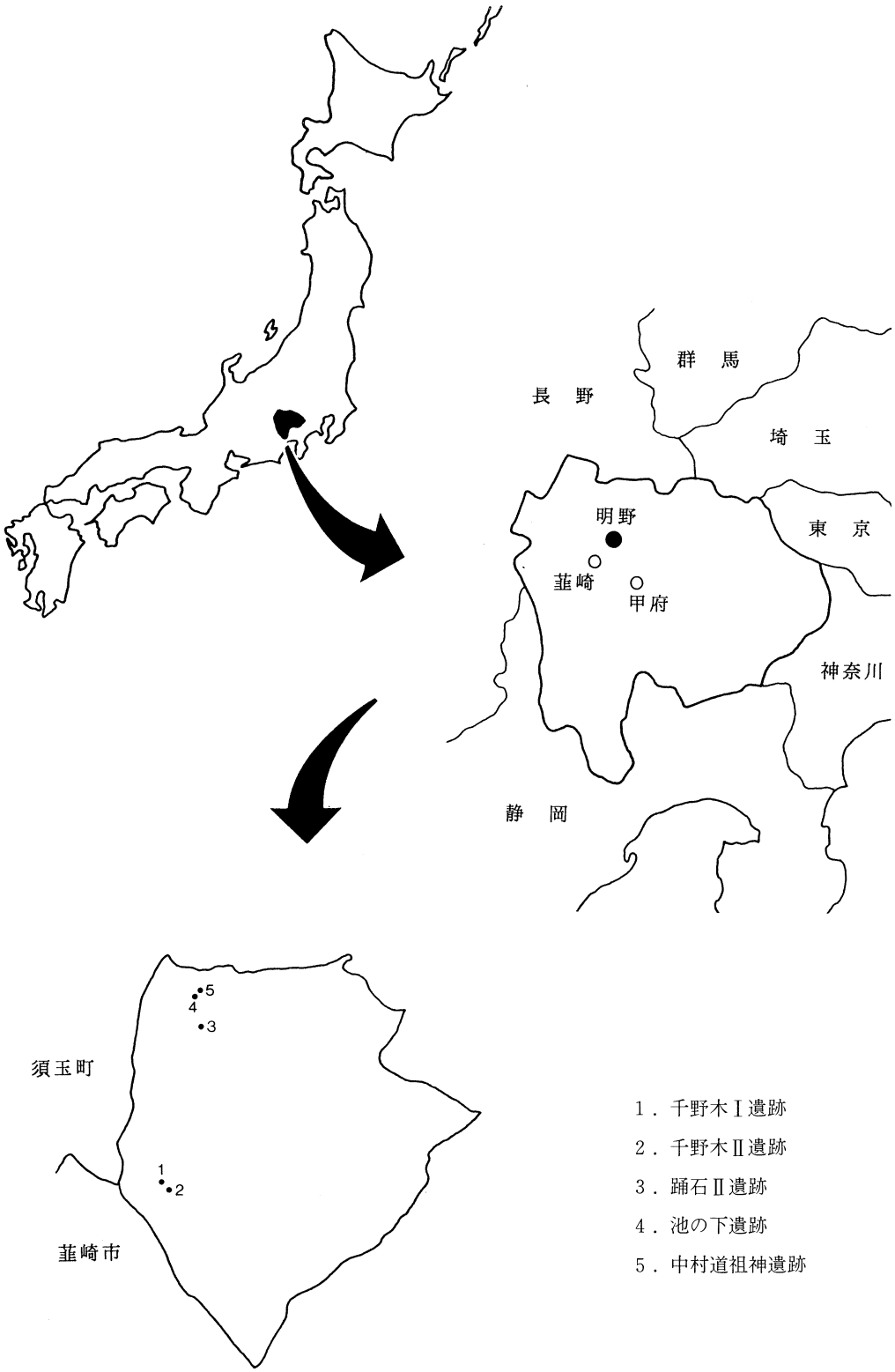

群　馬
長　野
埼　玉
明野
東　京
韮崎
甲府
神奈川
静　岡
須玉町
韮崎市
5
4
3
1
2
1．千野木Ⅰ遺跡
2．千野木Ⅱ遺跡
3．踊石Ⅱ遺跡
4．池の下遺跡
5．中村道祖神遺跡

Fig. 1　遺跡の位置

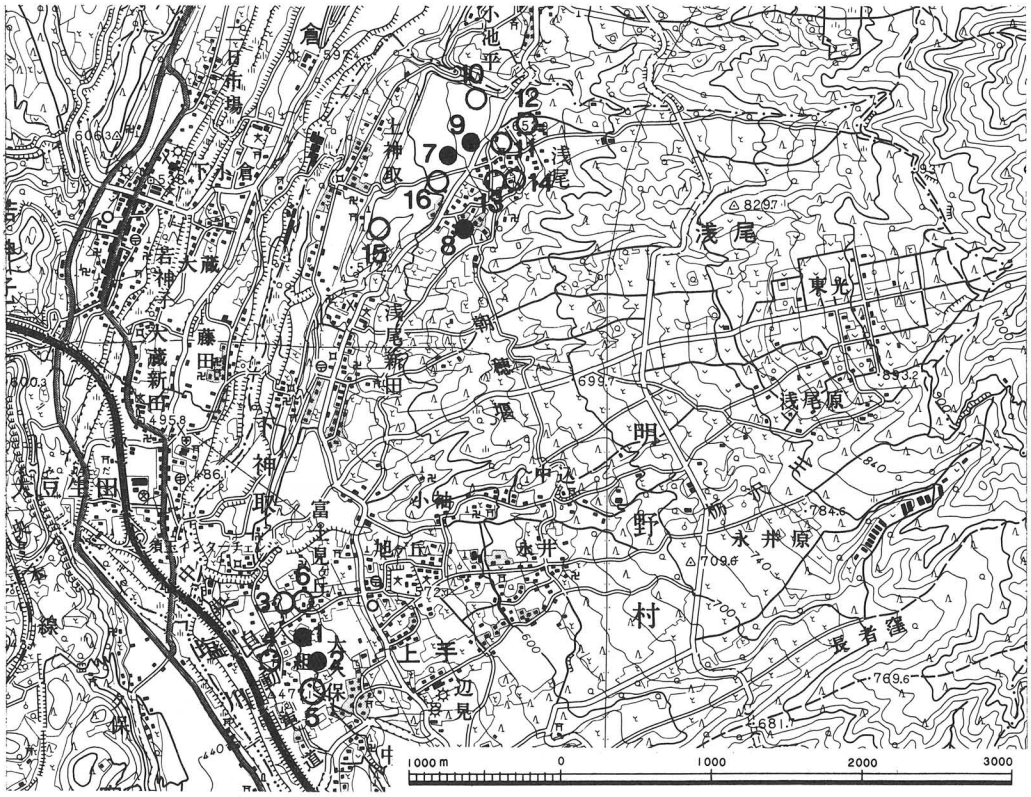
**千野木Ⅰ・Ⅱ遺跡**

茅ヶ岳西麓には塩川沿いに3段の明瞭な河岸段丘があるが、当該遺跡は塩川左岸、下位段丘面上の南西向き緩斜面に位置する。遺跡の標高は約505mで、塩川からの比高は65mある。周辺には、村之内遺跡（縄文中期後葉）、下反保遺跡（縄文）、屋敷添遺跡（縄文中期・平安）、三井氏屋敷跡（中世）などの遺跡がある。

**踊石Ⅱ・池の下・中村道祖神遺跡**

踊石Ⅱ遺跡は、塩川沿いの河岸段丘の上位段丘面上の北西向き緩斜面に位置し、また、池の下・中村道祖神遺跡は、河岸段丘の中位段丘面（小池平面）上に位置する。微視的に見れば池の下遺跡は南西向き緩斜面上にあり、中村道祖神遺跡は、南西向き緩斜面上にある、微高地の南向き緩斜面上に位置する。

これら3遺跡の周辺には、北原遺跡（平安）、吉良窪遺跡（縄文）、宮後遺跡（平安・中世）、薬師堂遺跡（縄文中期・平安）、白山Ⅰ遺跡（縄文・平安）、竹内遺跡、俵石遺跡（縄文）がある。しかし中世の集落遺跡は今のところ確認されていないので、中村道祖神遺跡の多くの地下式坑をつくった人々の生活については不明である。




1.千野木Ⅰ　2.千野木Ⅱ　3.村之内　4.下反保　5.屋敷添　6.三井氏屋敷跡　7.池の下　8.踊石Ⅱ
9.中村道祖神　10.北原　11.宮後　12.吉良窪　13.竹内　14.俵石　15.白山Ⅰ　16.薬師堂

Fig. 2　遺跡の位置

# 第２章　千野木Ⅰ・千野木Ⅱ遺跡の調査

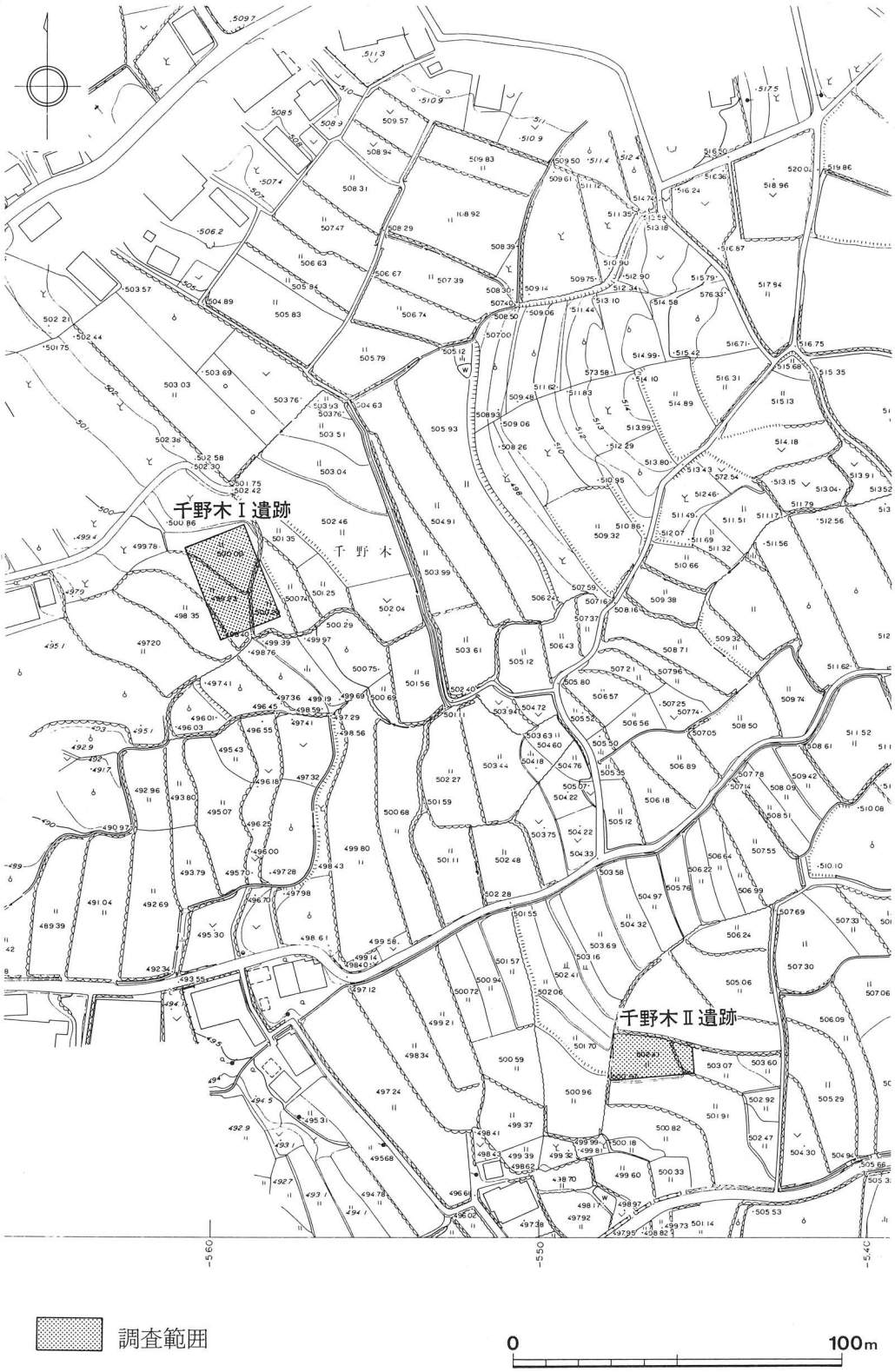



Fig. 3　千野木Ⅰ遺跡・千野木Ⅱ遺跡調査範囲（1/2000）

# 調査の概要

**千野木Ⅰ遺跡**

約600㎡を調査対象とした結果、縄文時代の土器、石器が出土した。そのうち主なものは、写真図版PL.2に示した。以下、簡単な説明を加えよう（番号は、写真図版の番号と一致する）。

1～3：いづれも縄文時代中期中葉の土器。3には、押引文が施文されている。4：打製石斧。重さ63g。石質、砂岩。5～10：黒曜石製の剝片。

**千野木Ⅱ遺跡**

約330㎡を調査対象とした結果、縄文時代の土器、石器が出土した。そのうち主なものは、写真図版PL.2に示した（土器は、小破片なので割愛した）。

11：黒曜石製の剝片。12：黒曜石製の石鏃。重さ1g。

# 第３章　池の下遺跡の調査

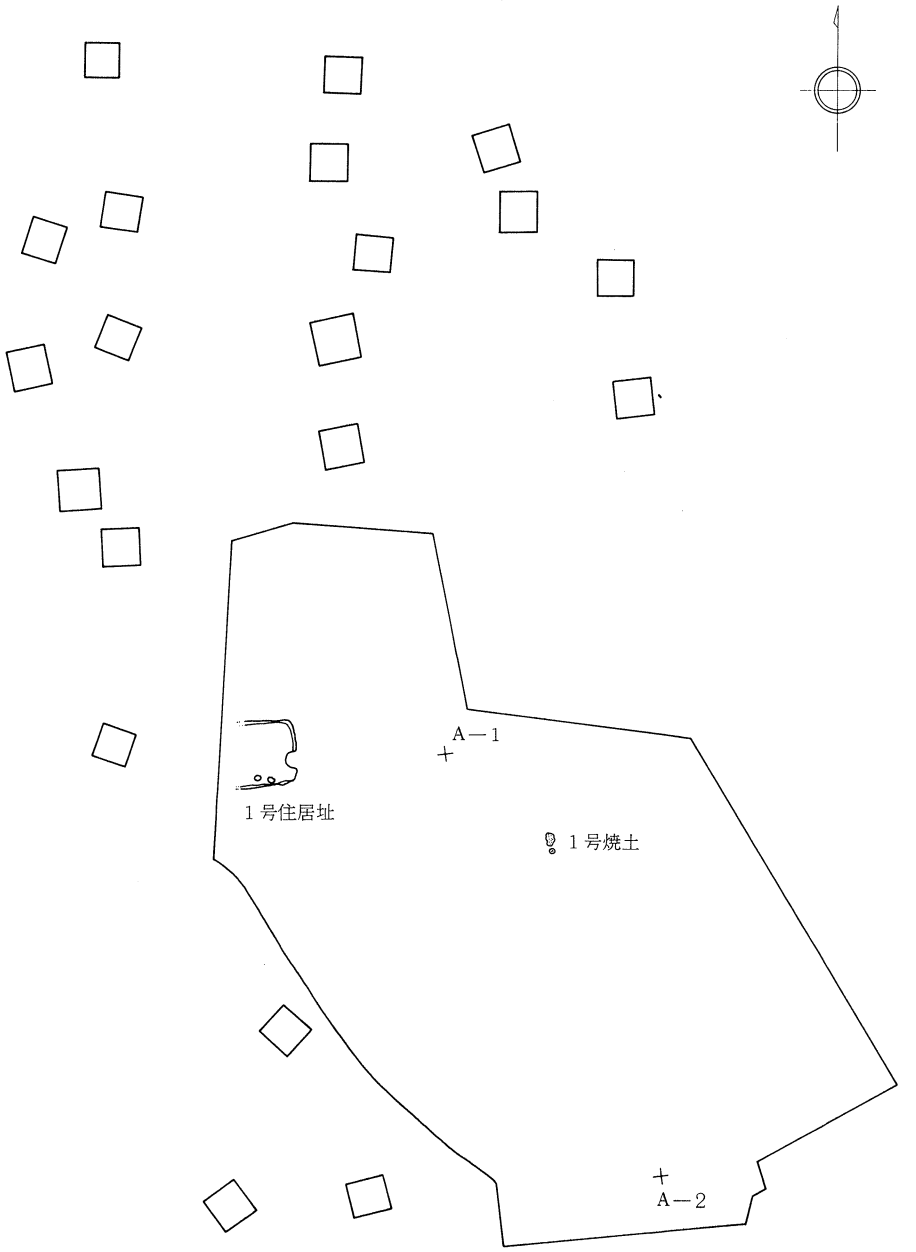
調査範囲

(中村道祖神遺跡)

| | X | Y |
|---|---|---|
| A－1 | －22940.987 | －4520.969 |
| A－2 | －22962.921 | －4508.953 |

0　100m

Fig. 4　池の下遺跡調査範囲（1/2000）（XとYは第Ⅷ系の座標値）




| | X | Y |
|---|---|---|
| A－1 | －22940.987 | －4520.969 |
| A－2 | －22962.921 | －4508.953 |

0　20m

Fig. 5　池の下遺跡遺構分布図（S＝1/400）（XとYは第Ⅷ系の座標値）

# 調査の概要

池の下遺跡からは、平安時代の住居址・土器、焼土が発見された。以下、これらについて説明する。尚、平安時代の土器の時期区分は、坂本・末木・堀内(1983)を参考にした(P.30参照)。

**1号住居址**(Fig. 6・7, PL. 5)

**形状・規模**　住居址西側は、道路によって削平され失われているが、方形プランを呈していたと思われる。現状の規模は、東西約3.2m、南北約3.5m。

**竈**　東壁の南寄りに石組の竈を有する。

**床面**　特に固くしまっているところはなかった。

**その他の施設**　南側壁面付近に小さな落ち込みが2ヵ所ある。Aからは、土師器の坏(Fig. 8－7)が出土した。

**出土遺物**

土器(Fig. 8, PL. 6・7)

**1～3**：土師器甕。**1**. 竈内出土。外面は縦ハケメ、内面横ハケメ。口縁部は、肥厚している。**2**. 外面は縦ハケメ。口縁部は、肥厚している。**3**. 竈の北側から出土(PL. 6)。外面は縦ハケメ、内面横ハケメ。口縁部は、肥厚している。**4**. 須恵器の大型甕類の破片と思われるもの。**5**. 土師器皿。口縁部は肥厚し、玉縁となっている。坂本・末木・堀内編年のXI期～XII期にあたると思われる。**6**. 土師器皿。口縁部は肥厚し、玉縁となっている。器体部下半は斜めヘラケズリ。XI期～XII期。**7**. 土師器坏。器体部下半は斜めヘラケズリ。口縁部は肥厚し、玉縁となっている。底部は、全面ヘラケズリ。XI期に属すると思われる。

石器(Fig. 9, PL. 7)

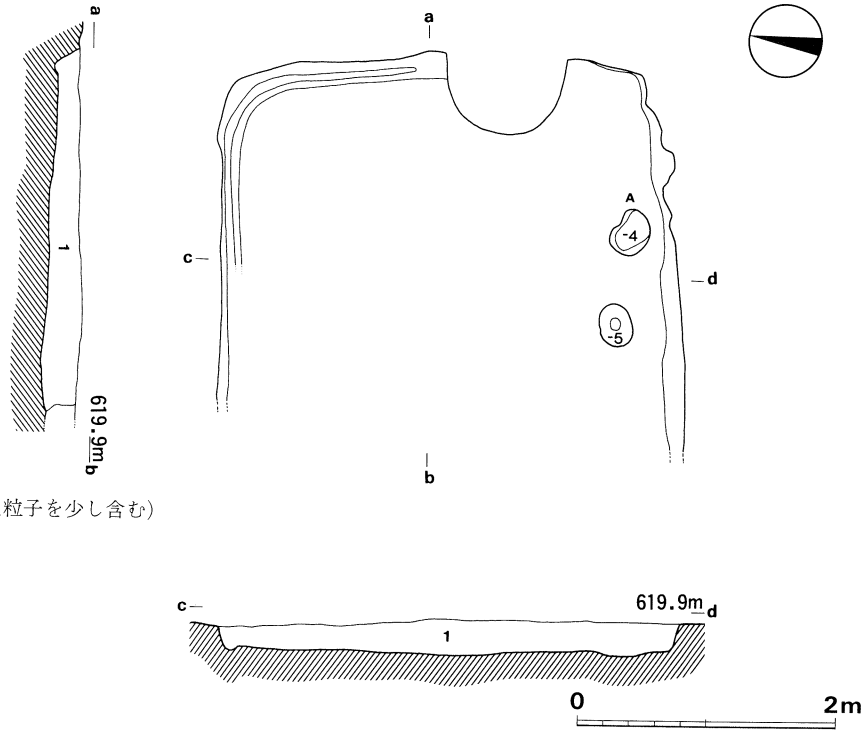
**1**. 打製石斧。重さ28g。石質、頁岩。撥形を呈する。**2**. 砥石。流紋岩。砥面は、4面にある。重さ203g。

上記の他に鉄製品が1点出土している(PL. 7－5)。

**時期**　出土土器からXI期～XII期に属すると思われる。

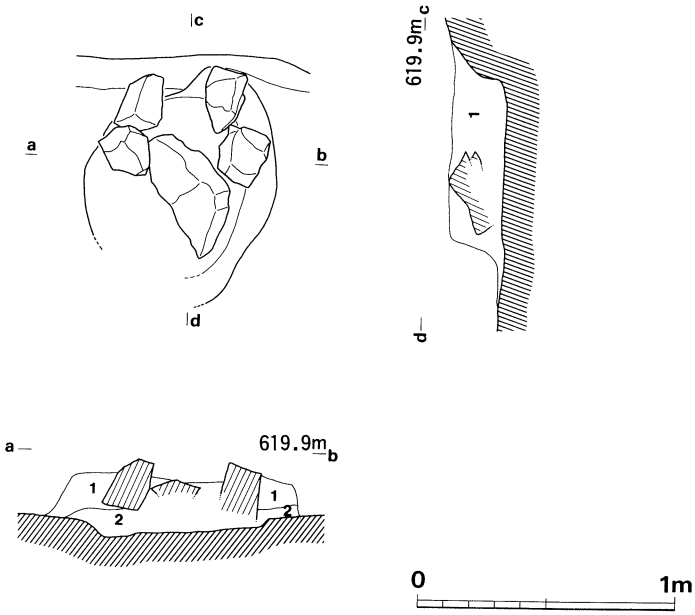
**1号焼土**(Fig.10, PL. 6)

アメーバー状の部分と、円形の部分とがある。ともに、約5㎝ロームが赤化していた。焼土内から土師器甕の破片(PL. 7－1～4)が出土した。もとは住居址であったものが削平され竈の焼土部分だけが残ったものかもしれない。




1暗褐色土(焼土粒子を少し含む)

Fig. 6　1号住居址（S＝1/60）




1暗褐色土(焼土粒子を少し含む)
2褐色土(焼土粒子を少し含む)

Fig. 7　1号住居址カマド（S＝1/30）（ピット内の数値は深さを表わす）

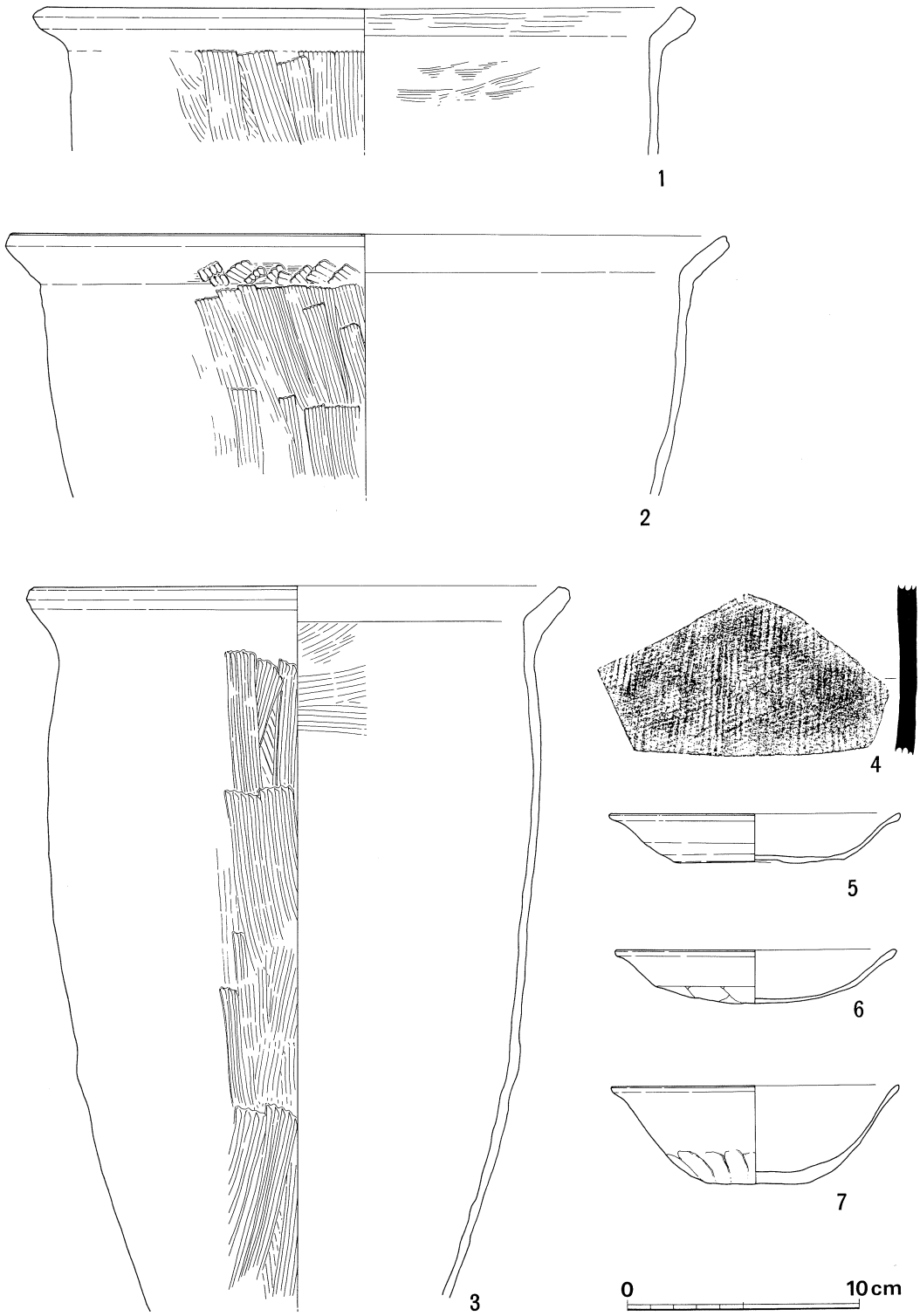



Fig. 8　1号住居址出土土器（S＝1/30）

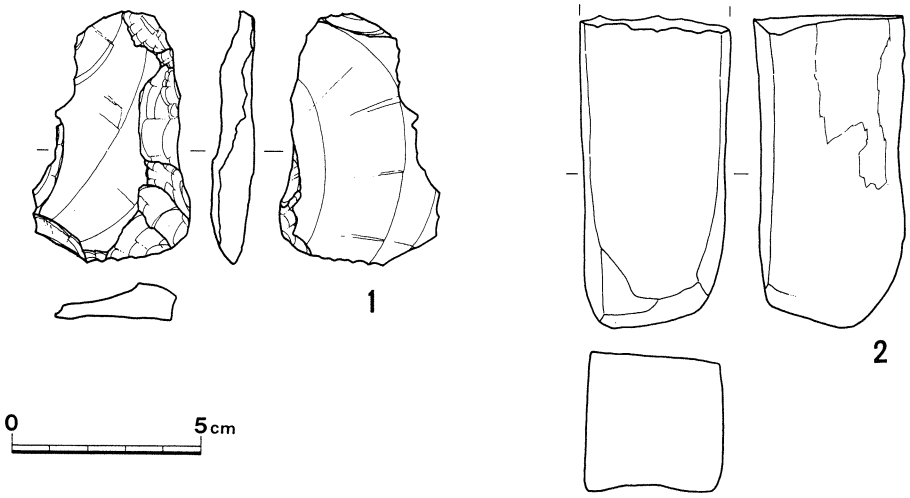



Fig. 9　1号住居址出土石器（S＝½）

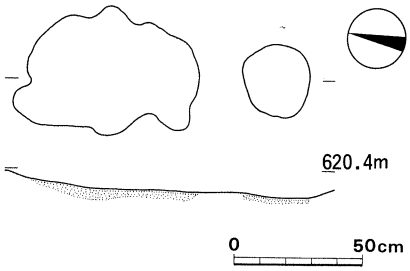



Fig. 10　1号焼土（S＝1/30）

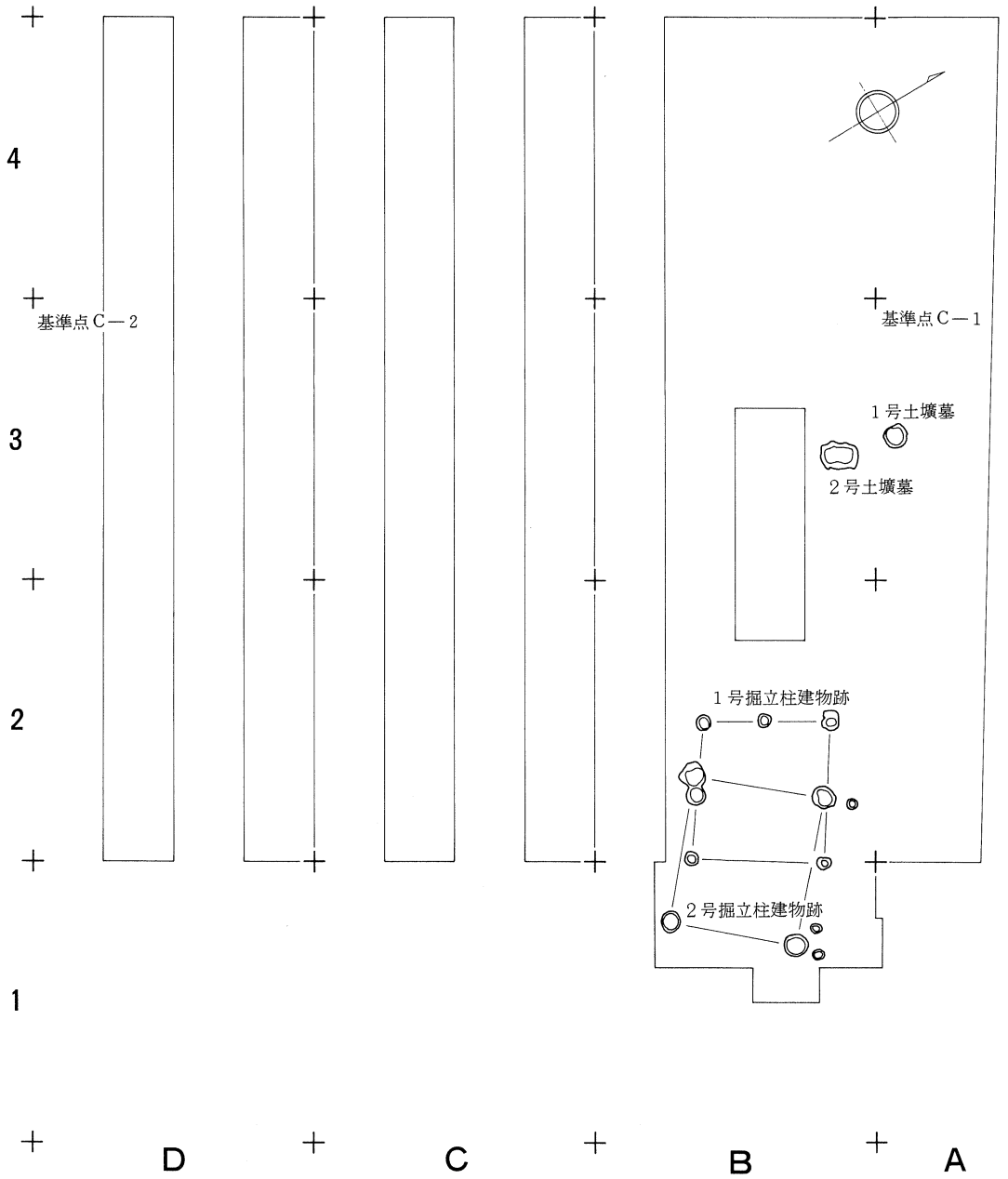
# 第４章　踊石Ⅱ遺跡の調査

調査範囲

| | X | Y |
|---|---|---|
| C－1 | －23451.210 | －4478.547 |
| C－2 | －23471.310 | －4491.525 |

0　100m

Fig. 11　踊石II遺跡調査範囲（1/2000）（XとYは第Ⅷ系の座標値）




| | X | Y |
|---|---|---|
| C－1 | －23451.210 | －4478.547 |
| C－2 | －23471.310 | －4491.525 |

0　10m

Fig. 12　踊石II遺跡遺構分布図（S＝1/200）（XとYは第VIII系の座標値）

## 第１節　縄文時代の遺物（Fig.13, PL.10）

縄文時代中期の土器及び石器が出土した。主な資料を、Fig.13に図示したので、それらの概要を以下に記す。

1：扇状把手に隆線を施している。中期中葉。2：斜縄文（摩耗著しく原体不明）を地文とし沈線を施す。中期後半。3：刺突文を地文とし２本の隆線を施す。中期後半。4：綾杉状沈線文、所謂「ハの字文」がみられる。中期末葉。5：斜縄文（原体は、ＲＬ）を地文とし沈線を施す。中期後半。6：口縁直下に１本の沈線を施し、以下は原体ＬＲとＲＬを縦位に回転させ、羽状縄文とする。中期後半。7：打製石斧。基部欠損。石質、頁岩。重さ224g。8：石鏃。石質、黒曜石。重さ0.9g。右側縁部を少し欠損する。9：石鏃。石質、黒曜石。重さ0.5g。先端部を少し欠損する。11：綾杉状沈線文、所謂「ハの字文」と２本の沈線がみられる。中期末葉。

## 第２節　中世の遺物（PL.10）

中世の遺物は写真図版PL.10（中段）に示してある。いづれも内耳土器の口縁部破片である。Ｂ－２グリッドから出土した。

## 第３節　江戸時代の遺構と遺物

### 第１項　江戸時代の遺構（Fig.14, PL.９）

土坑が２基発見された。これらからは、ともに古銭が出土したことによって土壙墓と判断した。

**１号土壙墓**

直径約65cmで、ほぼ円形を呈する。深さ約40cm。出土遺物は、寛永通寶１枚（Fig.15－３，PL.10下段－３）、□□通□とだけ読めるもの１枚。都合、古銭は２枚出土した。

**２号土壙墓**

長楕円形を呈する。長径約110cm。短径約70cm。深さ約30cm。出土遺物は、寛永通寶２枚（Fig.15－１・２，PL.10下段－１・２）、その他、古銭が、４枚出土したが接着していて判読不可能であった。他には、煙管と思われるもの、木片が出土した。

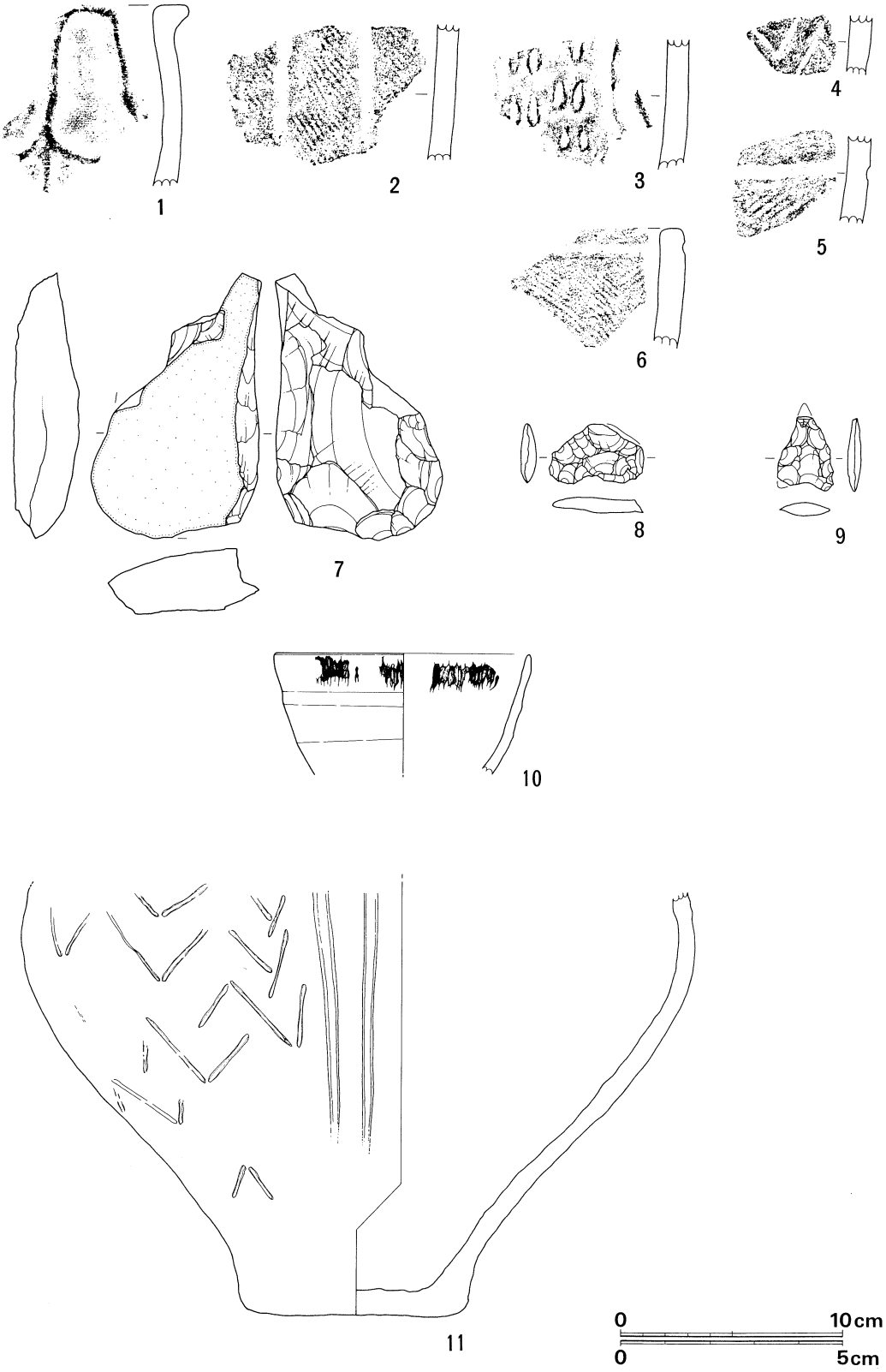



Fig. 13　出土遺物（1～7・10・11：S＝⅓，8・9：S＝⅔）

**第２項　江戸時代の遺物**（Fig.13－10, PL.10）

Fig.13－10；PL.10上段右下：オロ茶碗。18世紀のものと思われる。

**寛永通寶について**：確実に寛永通寶といえるものは１、２号土壙墓出土の３枚である。寛永通寶は、1626（寛永３）年から1869（明治２）年までの243年間鋳造され、その種類は数百に及ぶという。故に、鋳造年の特定は不可能であった。

## 第４節　時期不明の遺構（Fig.16, PL.８）

**１号掘立柱建物跡**

北東－南西方向に２ヶ所、北西－南東方向に２ヶ所柱穴を有する掘立柱建物跡である。各柱穴からは遺物は出土しなかった。掘立の規模は、北東－南西方向約380cm、北西－南東方向約420cm。

**２号掘立柱建物跡**

北東－南西方向に３ヶ所及び２ヶ所、北西－南東方向に３ヶ所柱穴を有する掘立柱建物跡である。各柱穴からは遺物は出土しなかった。掘立全体の規模は、北東－南西方向約370cm、北西－南東方向約390cm。

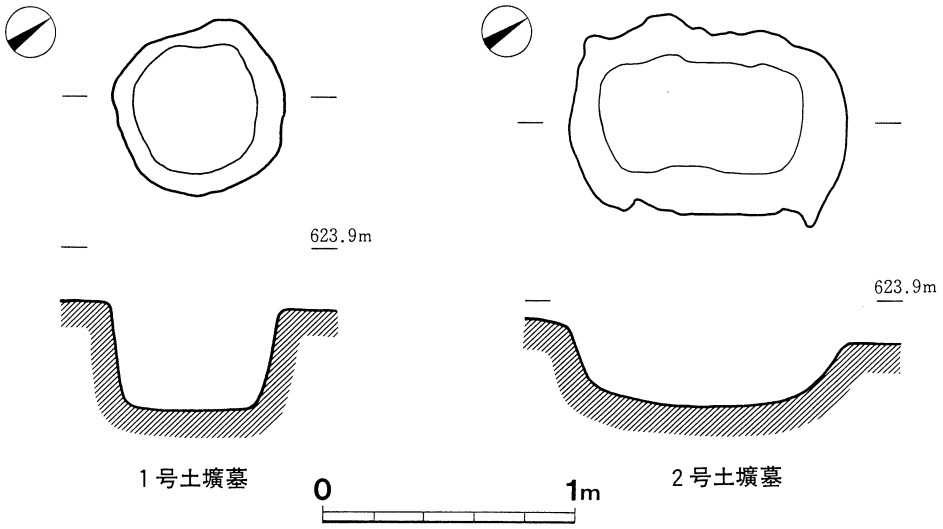



Fig. 14　土壙墓（S＝1/30）

Fig. 15　古銭（S＝1/1）（１・２：２号土壙墓、３：１号土壙墓）

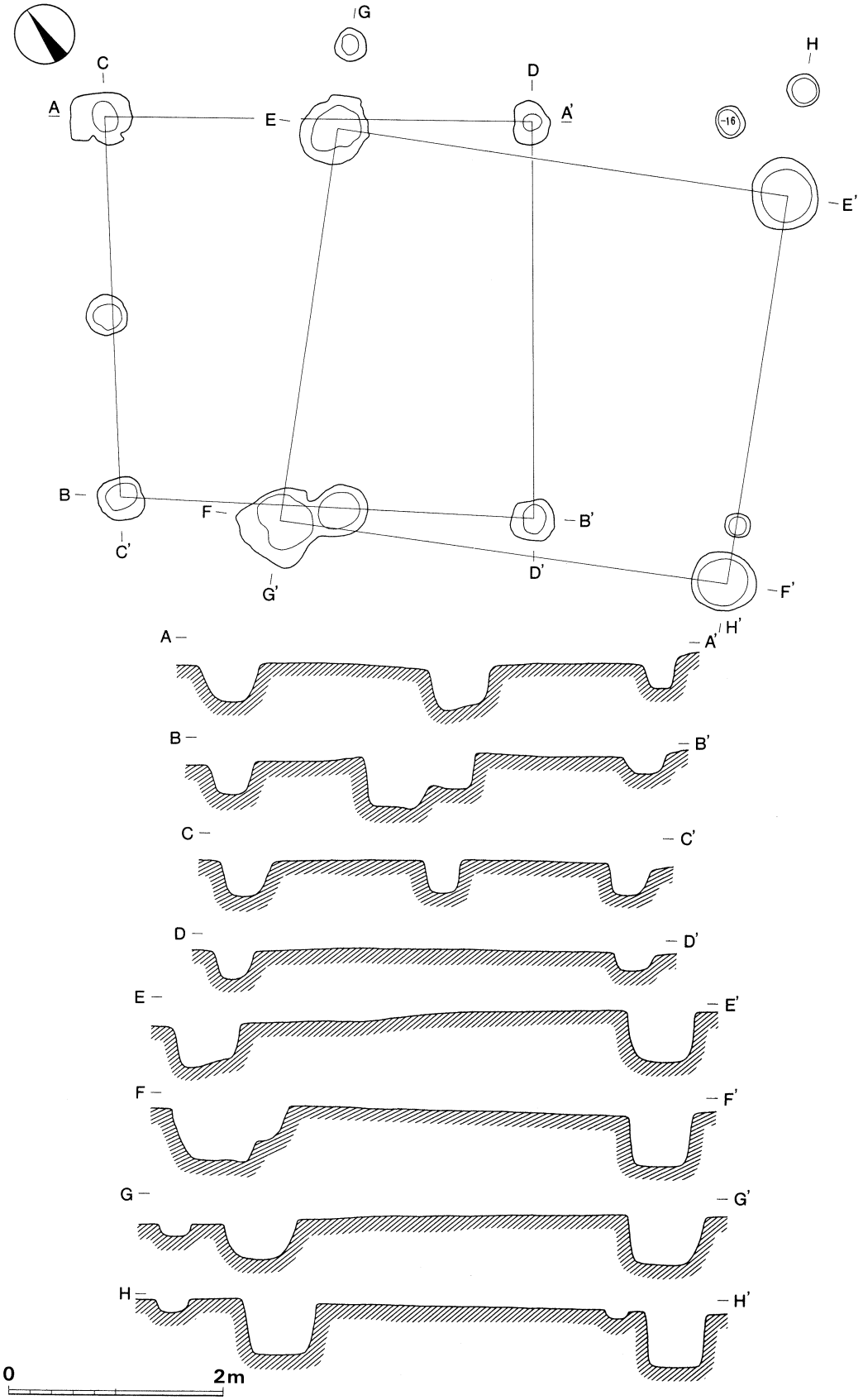
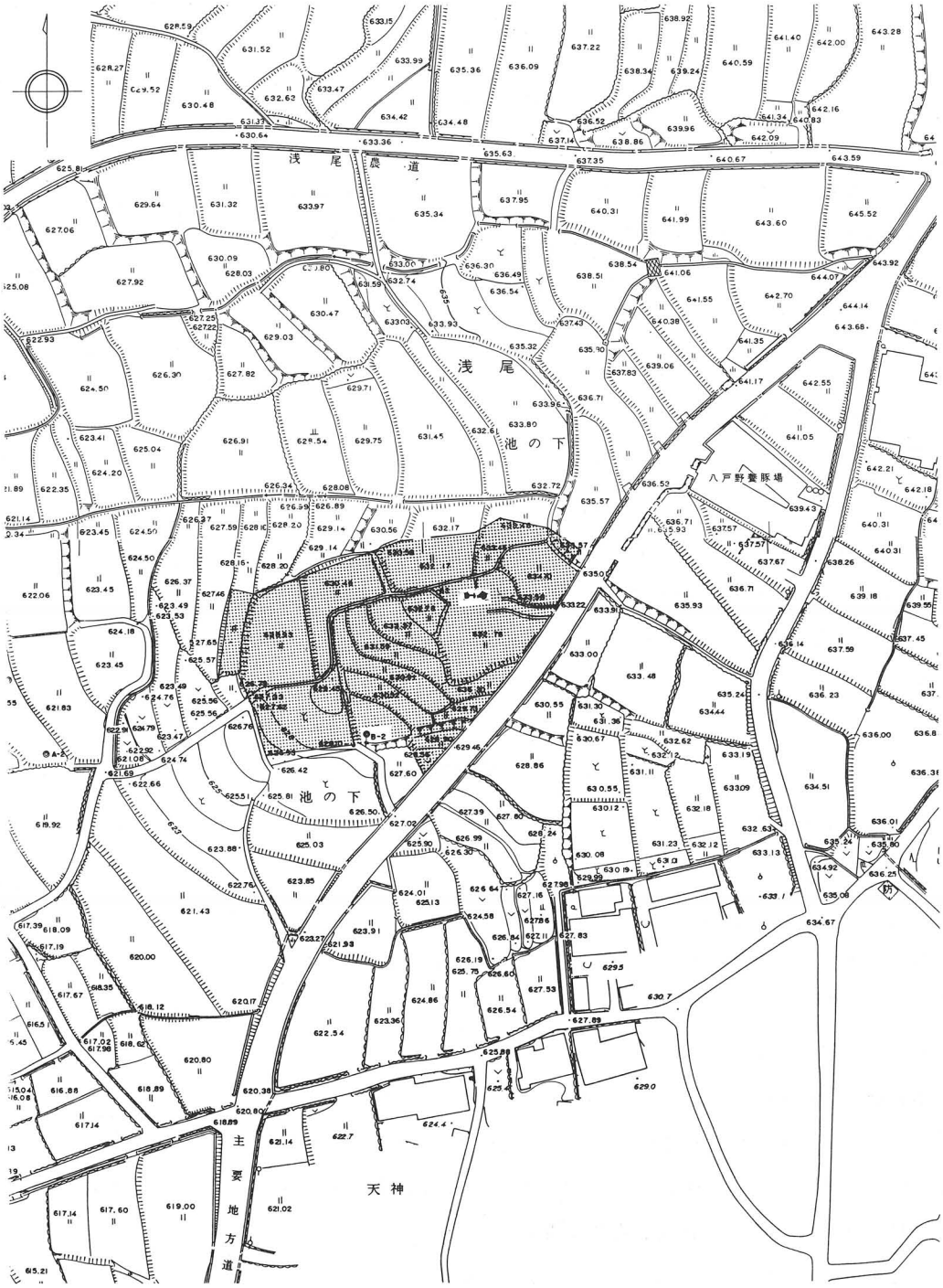



Fig. 16　掘立柱建物跡（S＝1/60）（水糸高：624.6 m）

# 第５章　中村道祖神遺跡の調査




調査範囲

| | X | Y |
|---|---|---|
| B－1 | －22916.861 | －4382.099 |
| B－2 | －22957.365 | －4416.555 |

0　100m

Fig. 17　中村道祖神遺跡調査範囲（1/2000）（XとYは第Ⅷ系の座標値）

## 第1節　層　序（Fig.18, PL.38）

土層の把握に際しては、4号土坑の西壁を利用した。約2m50cm下の礫層まで掘り下げて層の観察を行なった。以下の、記述にあたっては、発掘調査中の観察を主としながら、会田氏の鉱物分析の結果も参考にした。

Ⅰ層　7.5YR4/6：褐色ローム（Ⅱ・Ⅲ層よりもやわらかい）

Ⅱ層　10YR4/6：褐色ハードローム

Ⅲ層　10YR5/6：黄褐色ハードローム

Ⅳ層　7.5YR5/8：明褐色パミス。Pm－1A。

Ⅴ層　2.5Y7/1：灰白色粘土層。Pm－1Aが粘土化したもの。

Ⅵ-a層　Ⅵ-b層上部の鉄分が酸化したところ。

Ⅵ-b層　5Y5/1：灰色粘土層。

Ⅶ層　礫層

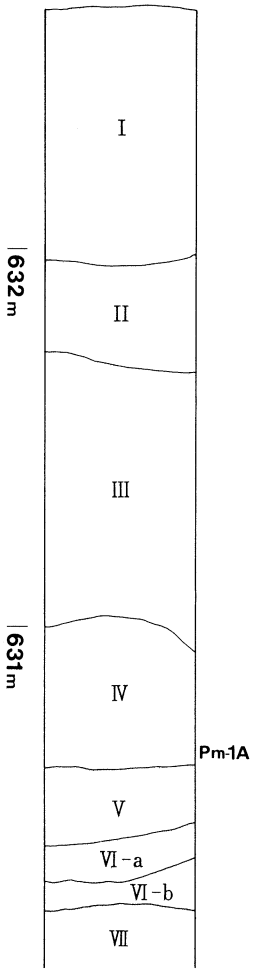



Fig. 18　層序（S＝1/20）

## 第2節　縄文時代の遺物

### 第1項　土器（Fig.20－21～23）

縄文土器は、中期のものが少量出土した。小破片や無文が主体であった。以下、比較的文様がはっきりした3点について説明する。

21：口唇部から平行に隆線を施す。また、中央に渦巻文がみられる。中期後半と思われる。22：蛇行沈線文がみられる。23：無文地に沈線を施す。中期末～後期初頭と思われる。

### 第2項　石器（Fig.19－1～9，PL.37－1～9）

1：石鏃。1号住居址の確認面にて出土。石質；黒曜石。重さ0.6g。

2：石鏃。表採。石質；黒曜石。重さ0.5g。石鏃は1、2の他に脚部の破片が1点ある。

3：打製石斧。103号土坑出土。石質；頁岩。重さ97g。

4：打製石斧。表採。石質；砂岩。重さ243g。撥形を呈する。

5：打製石斧。表採。石質；頁岩。重さ189g。短冊形を呈する。

6：打製石斧。表採。石質；ホルンフェルス。約1/2を欠損している。重さ95g。両側縁に剝離がみられるが表面と裏面は、風化が著しく剝離の状況は不明である。

7：磨石•凹石：43号土坑出土。石質；安山岩。重さ82g。全体によく磨られている。表面中央は、

敲打によって円形に約1㎜くぼむ。

8：磨石。表採。石質；安山岩。重さ293g。実測図の下部と裏面は欠損している。

9：磨製石斧。52号土坑出土。石質；頁岩。重さ57g。基部と刃部を欠損する。

## 第3節　弥生時代の遺構と遺物

弥生時代に関しては、土坑1基と、それに伴う土器1個体分が出土した。弥生時代の遺構・遺物の発見は、明野村においては今回が始めてである。以下、遺構・遺物の概略を記す。

**93号土坑**（Fig.58, PL.33）

調査区域の東端に位置する。平面形は、不整円形で直径約190㎝、深さ55㎝。遺物は弥生時代の土器1個体分が覆土から出土した（Fig.23－22, PL.13－2・33）。水神平系条痕文土器とされるものである（中山1985）。口縁部で少し外反する深鉢で、口唇部には山形小突起がある。器面には条痕文が施され、底部には木葉痕を有する。また、土器内面には、籾の圧痕がある（PL.13－2）。

## 第4節　平安時代の遺構と遺物

### 第1項　住居址と遺物

**1号住居址**（Fig.21, PL.11）

**概要**　覆土は削平によって大半が失われていた。Fig. 21の破線は、わずかに残っていた覆土の範囲を示す。その厚さは、竈周辺以外は、1㎝にも満たないものであった。竈は、火床部の若干のくぼみと焼土がわずかに残存していた。住居址には2つの小土坑が付随する。小ピットが5つあるが住居址に伴うものか否か不明である。また、25・113号土坑と重複する。

**遺物**（Fig.22－1・2, PL.13－1）1：土師器甕。外面は縦ハケメ、内面は横ハケメ。2：土師器坏。内部器体部に暗文あり。器体部下半に斜めヘラケズリ。IX～X期に属すると思われる

**時期**　出土遺物からIX～X期と思われる。

**2号住居址**（Fig.21, PL.11）

**概要**　1号住居址同様に覆土は削平され大半が失われていた。Fig.21の破線は、わずかに残っていた覆土の範囲を示す。竈は、火床部の若干のくぼみと焼土がわずかに残存していた。残存する覆土の周囲に小ピットがあるが住居址に伴うものか否か不明である。

**遺物**　出土遺物は、土師器坏1点だけである。Fig.22－3, PL.13－3：土師器坏。内黒土器。暗文なし。XI期に属すると思われる。

**時期**　出土遺物から判断するとXI期と思われる。

**3号住居址**（Fig.21, PL.12）

**概要**　削平によって遺構の大半が失われ竈の周囲だけが残存する。竈南側に浅いくぼみがある。

**遺物**（Fig.22・23, PL.13・14）

4（PL.14－4）：土師器甕。外面は縦ハケメ、内面は横ハケメ。5（PL.14－3）：土師器甕。外面は縦ハケメ、内面は横ハケメ。6：土師器坏。内部器体部に暗文がある。器体部下半に斜めヘラケズリあり。IX～X期と思われる。7（PL.13－5）：土師器坏。内部器体部に暗文がある。器体部下半に斜めヘラケズリあり。口径に対して底径は小さく、口径＞底径×2の領域にある。IX～X期と思われる。8（PL.14－6）：土師器坏。黒色土器(内外面ともに黒色)。内部器体部に暗文がある。器体部下半に斜めヘラケズリあり。以上のことよりX期に属すると考える。9：土師器坏。内部器体部に暗文がある。器体部下半には斜めのヘラケズリがある。IX～X期。10：土師器坏。器体部下半には斜めのヘラケズリがある。11：土師器皿。内外面ともにナデ調整がみられる。12(PL.14－7)：土師器皿。器体部下半は横位回転ヘラケズリ。器体部には若干のくびれがみられる。底部は回転ヘラケズリ。IX～X期のものと思われる。13(PL.14－1)：土師器甕。外面は縦方向のハケメ。内面は、口縁部が横ハケメ。器体部は、ナデ調整である。14(PL.14－5)：土師器甕。外面は縦ハケメ、内面はロクロ整形(横ハケメが若干残る)。15：土師器坏。内部器体部に暗文がある。器体部下半に斜めヘラケズリあり。IX～X期のものと思われる。16：土師器坏。内部器体部にかすかに暗文がみられる。器体部下半に斜めヘラケズリが観察できる。IX～X期に属すると思われる。17(PL.13－4)：土師器坏。内部器体部に暗文がみられる。器体部下半に斜めヘラケズリが施されている。口径に対して底径は小さく、口径＞底径×2の領域にある。時期は、IX～X期と思われる。18：土師器坏。内・外面ともにナデ調整。19(PL.13－6)：須恵器坏。底部は回転糸切り未調整。内・外面に十字形の墨書のようなものが書かれている。口径に対して底径は小さく、口径＞底径×2の範囲にある。IX期と思われる。20：土師器皿。内部器体部に同心円状の暗文がみられる。底部の大部分を欠損するので、暗文が、みこみ部にまで及ぶのか否かはわからない。器体部下半は横位回転ヘラケズリ。IX～X期。21(PL.14－2)：土師器甕。外面は縦ハケメ、内面は、横ハケメ。口縁部は、内・外面ともにナデ調整。

註：平安時代の土器については、坂本・末木・堀内（1983）の研究を参考にした。

| | | | |
|---|---|---|---|
| I 期： | 8世紀第1四半期 | VIII 期： | 9世紀第4四半期 |
| II 期： | 8世紀第2四半期 | IX 期： | 10世紀第1四半期 |
| III 期： | 8世紀第3四半期 | X 期： | 10世紀第2四半期 |
| IV 期： | 8世紀第4四半期 | XI 期： | 10世紀第3四半期 |
| V 期： | 8世紀第4四半期後半から | XII 期： | 10世紀第4四半期 |
| | 9世紀第1四半期前半 | XIII 期： | 11世紀前半 |
| VI 期： | 9世紀第2四半期 | XIV 期： | 11世紀後半 |
| VII 期： | 9世紀第3四半期 | XV 期： | 12世紀前半 |

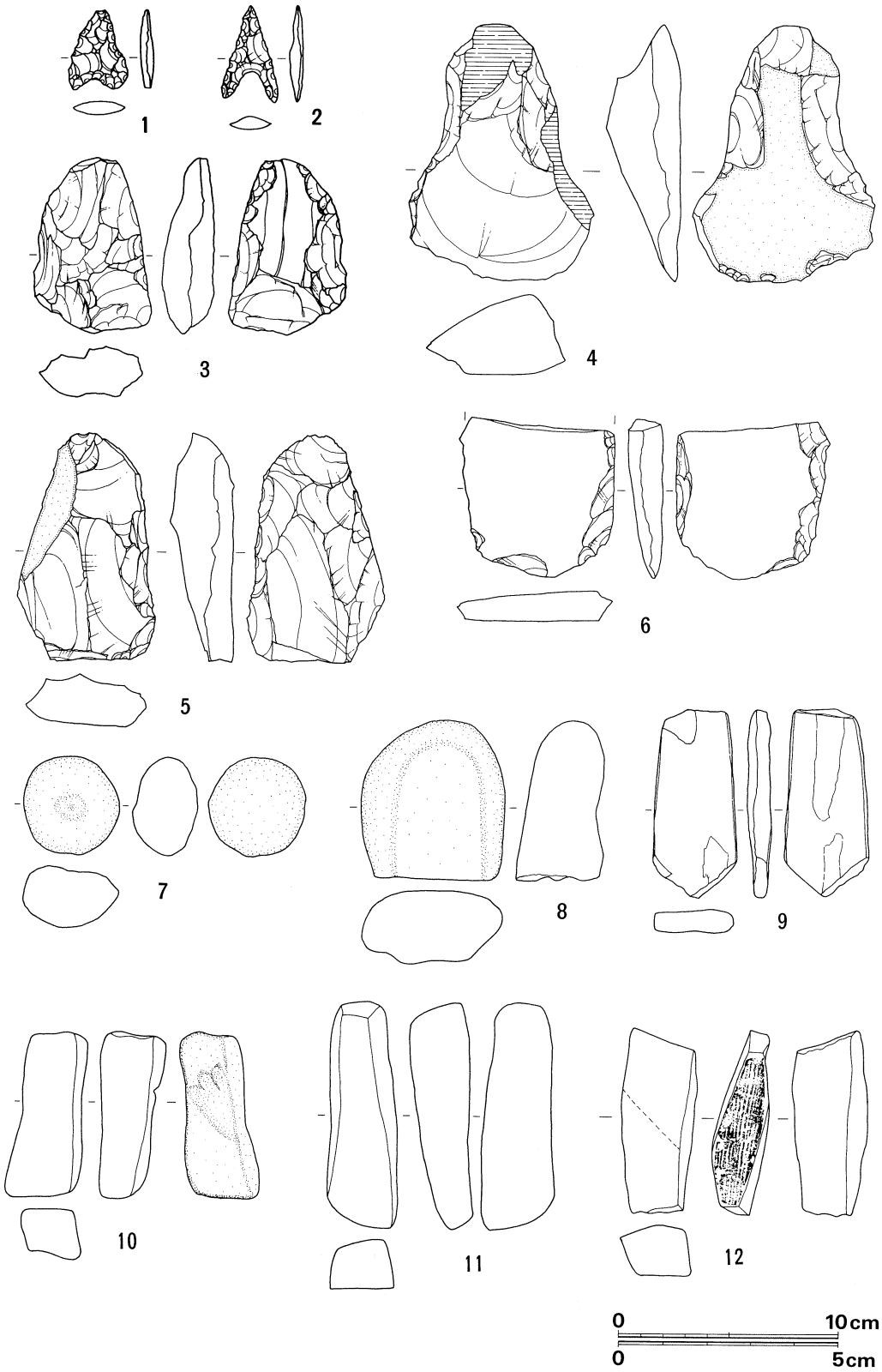



Fig. 19　出土遺物（石器）（1・2：⅔，3～12：⅓）

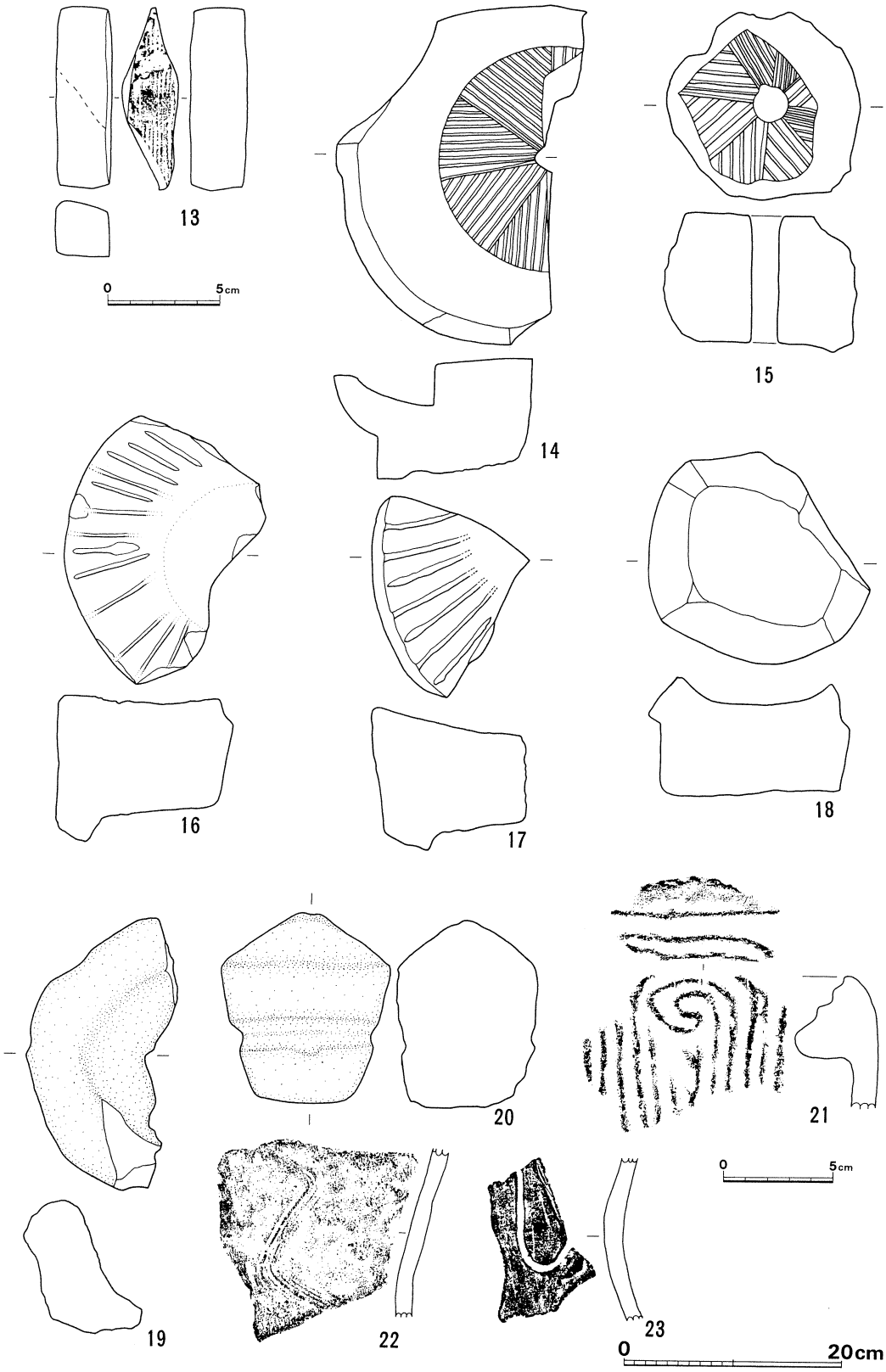



Fig. 20　出土遺物（石器・石製品・土器）（13・21～23：⅓，14～20：⅙）

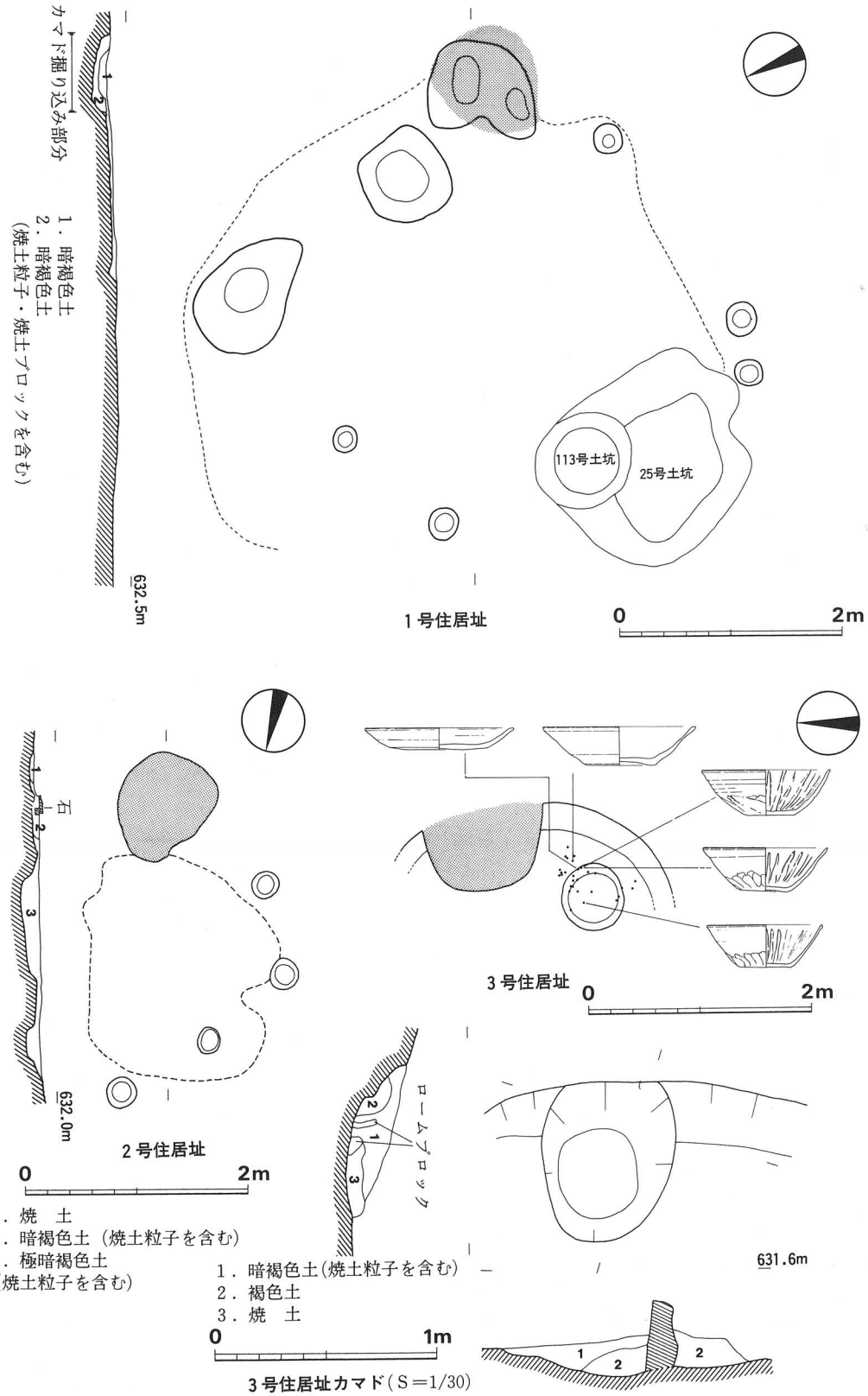



Fig. 21　1・2・3号住居址（S＝1/60）

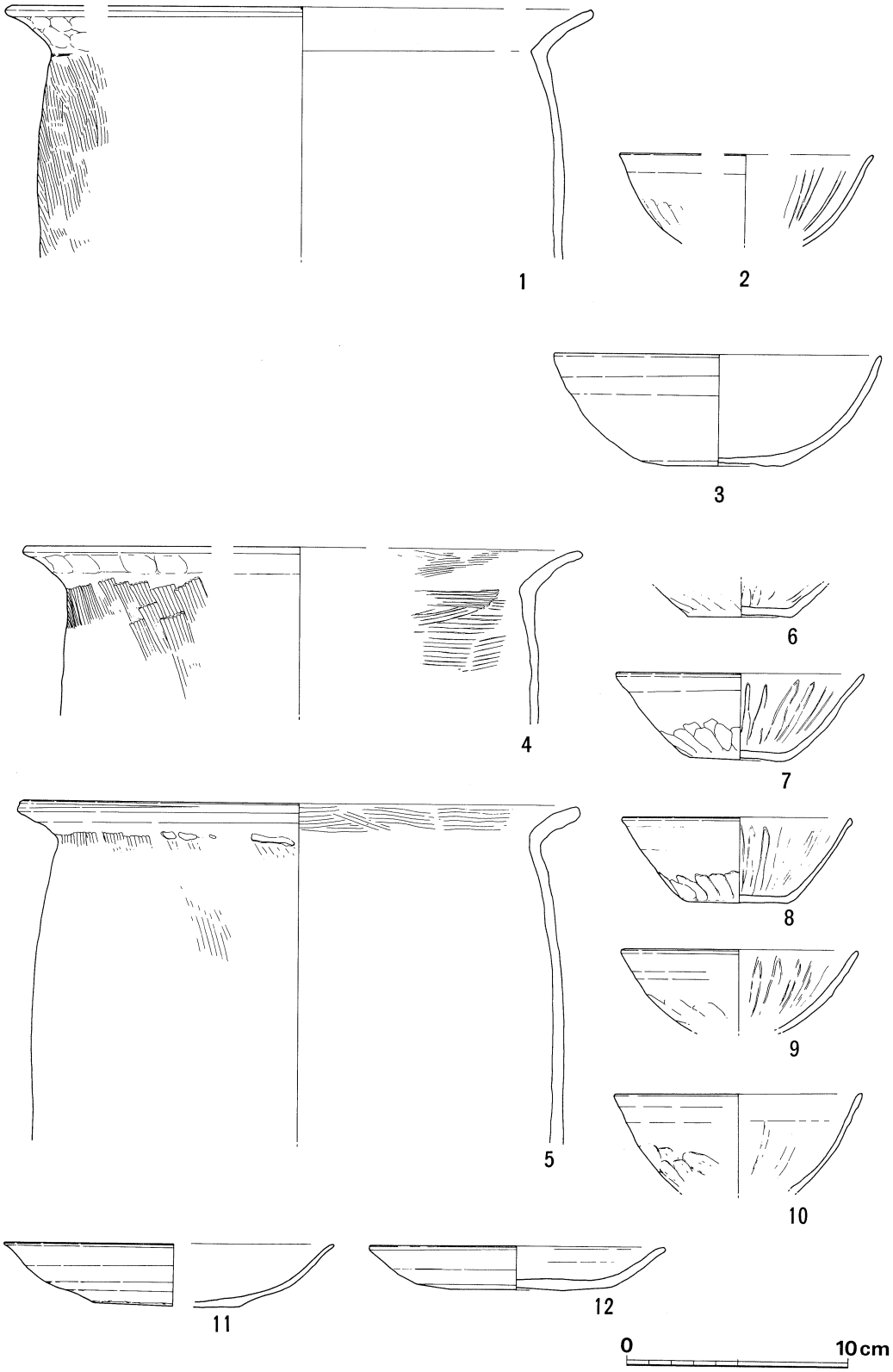



Fig. 22　1・2・3号住居址出土土器

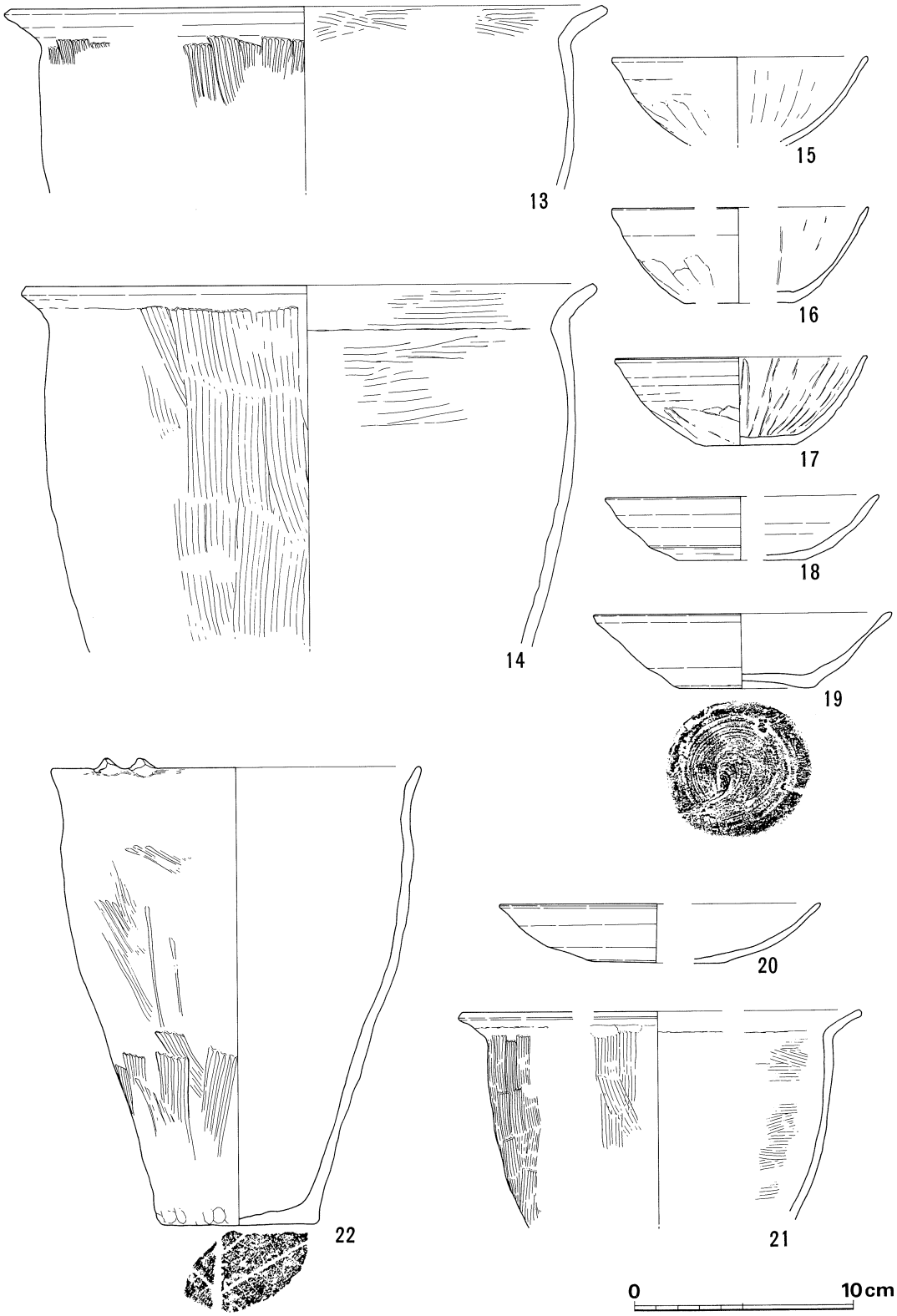



Fig. 23　3号住居址・93号土坑出土土器

# 第5節　中世の遺構と遺物

## 第1項　地下式坑

地下式坑は45基発見された。これらについて、調査区域の北に位置するものから概略を記す。

**91号土坑**（Fig.24, PL.24）

地下室天井が崩落した状態で発見された。最東端に位置する地下式坑である。

**主軸**：北－南

**地下室の状況**：地下室の平面形は長方形を呈する。長辺約240cm、短辺約160cm。深さは、中央付近で約130cm。坑床から地下室北側に向かってなだらかに傾斜している。高低差は、約30cm。

**竪坑**：地下室の短辺側に位置する。

**遺物**：土師器3点。

**88号土坑**（Fig.24, PL.23）

地下室天井が崩落した状態で発見された。87号土坑と南側で重複する。互いの先後関係は、不明である。

**主軸**：北北西－南南東

**地下室の状況**：地下室の平面形は長方形を呈する。長辺約380cm、短辺約150cm。深さは、中央付近で確認面から約200cm。床面はほぼ平坦である。

**竪坑**：87号土坑と重複しているので竪坑は、87号土坑地下室床に坑床の凹みをわずかに残すだけである。竪坑の位置は、地下室の短辺側である。

**遺物**：なし

**117号土坑**（Fig.25, PL.24）

地下室天井が崩落した状態で発見された。

**地下室の状況**：地下室の平面形はほぼ楕円形を呈する。長径約190cm、短径約160cm。中央部の深さは、約140cm。床面は、基本層序のⅦ層（礫層）上面であるため凹凸がある。床面が礫層まで達しているのは117号土坑と9号土坑だけである。

**竪坑**：しいていえば地下室の長辺側に位置する。テラス状の施設を有する。地下室床面とは、約20cmの差がある。

**遺物**：なし。

**3号土坑**（Fig.25, PL.15）

地下室天井が崩落した状態で発見された。

**主軸**：西－東

**地下室の状況**：地下室の平面形は不整な長方形を呈する。長辺の最長約300cm、短辺約140cm。深さは、中央付近で約200cm。床面は、北へ向かってわずかに傾斜する。

**竪坑**：地下室の長辺側に位置する。

**遺物**：土師質土器１点、内耳土器１点（Fig.50－20・PL.34－３）。

**87号土坑**（Fig.26, PL.23）

地下室天井が崩落した状態で発見された。２号土坑、88号土坑と重複するが、互いの先後関係は、不明である。

**主軸**：北西－南東

**地下室の状況**：地下室の平面形は長楕円形で、長径約400cm、短径約190cm。土坑確認面から床面までは、中央部で約140cmである。床面は平坦で坑床との段差はない。

**竪坑**：地下室の短辺側に位置する。

**遺物**：なし。

**２号土坑**（Fig.26, PL.15）

地下室天井が崩落した状態で発見された。東側で87号土坑と重複するが、互いの先後関係は、不明である。

**主軸**：北－南

**地下室の状況**：平面形は不整形を呈する。最長部約320cm、最短部約160cm。土坑確認面から床面までは、中央部で約200cmである。床面は、ほぼ平坦である。

**竪坑**：地下室の短辺側に位置する。

**遺物**：なし。

**１号土坑**（Fig.27, PL.15）

地下室天井が崩落した状態で発見された。107号土坑と重複するが、互いの先後関係は、不明。

**主軸**：西南西－東北東。

**地下室の状況**：地下室の平面形は長楕円形を呈する。長径約280cm、短径約200cm、深さは、中央付近で約90cm。床は、107号土坑との重複部分に向かって傾斜する。高低差は、約40cmある。

**竪坑**：107号土坑との重複で位置は不明。地下室の短辺側に位置していたと考えられる。

**遺物**：土師器２点。地下室の床面直上で広い範囲にわたって炭化物が発見された。人為的に敷いた植物質のものが炭化したものと考えられる。外山秀一氏（山梨文化財研究所）の同定による

と、ウシクサ属（ススキ・チガヤなど）が主体でイネが若干含まれている、ということである。

**4号土坑**（Fig.27, PL.16）

地下室天井が崩落した状態で発見された。

**主軸**：北北西－南南東

**地下室の状況**：地下室の平面形は長方形を呈する。長辺約360cm、短辺約170cm。中央付近での深さは、約200cm。床は平坦で、坑床との段差はない。

**竪坑**：地下室の短辺側に位置し、断面は、円筒形を呈する。

**遺物**：土器片が1点出土したが、所属時期等は不明。

**6号土坑**（Fig.28, PL.16）

地下室天井が崩落した状態で発見された。西側コーナーが9号土坑と重複し、南側で18号土坑と重複する。さらに、107号土坑とも重複する。それぞれとの新旧関係は不明だが、9号土坑との重複部分だけは、9号土坑の方がレベルが低い。

**主軸**：西北西－東南東

**地下室の状況**：地下室平面形は、長辺約340cm、短辺約160cmで不整長方形をしていたものと思われる。深さは中心近くで、160cm位である。

**竪坑**：明確に竪坑とわかるものは残っていないが、107号土坑か18号土坑との重複部にあったものと考えられる。

**遺物**：内耳土器8点。土師質土器14点（Fig.49－5・11）

**18号土坑**（Fig.28, PL.16）

地下室天井が崩落した状態で発見された。北側で6号土坑、東側で107号土坑と重複する。新旧関係は不明である。

**主軸**：不明。

**地下室の状況**：元来は、長方形をしていたものと思われる。長辺約180cm、短辺約160cm。深さは、中央部で約160cm。

**竪坑**：不明。6号土坑との重複部分にあったものと思われるが、調査時にはわからなかった。

**遺物**：なし。

**107号土坑**（Fig.28, PL.24）

1号土坑、6号土坑と重複するが、新旧関係は不明。ちょうど1号土坑竪坑部と6号土坑とをトンネル状に結ぶかっこうになっている。

**主軸**：西北西－東南東

**地下室の状況**：幅約120cm、長さ約360cmのトンネル状。床面から天井までは、約100cmある。横断面形はカマボコ状を呈する。

**竪坑**：不明

**遺物**：なし。

**7号土坑**（Fig.29, PL.17）

地下室天井が崩落した状態で発見された。

**主軸**：西北西－東南東

**地下室の状況**：長辺約310cm、短辺約150cm。中央部付近の深さ約100cmで平面形は、長方形を呈する。地下室床面はほぼ平坦であるが、坑床が床面よりも約15cm高くなっている。

**竪坑**：地下室の短辺側に位置する。

**遺物**：石臼破片1点。

**9号土坑**（Fig.29, PL.17）

東側にて6号土坑と重複する。地下室の天井は崩落していなっかったが、調査に安全を期するために、地表から2m×2mの竪坑を天井部に穿って地下室の調査を行なった。

**主軸**：西南西－東南東

**地下室の状況**：平面形は楕円形を呈する。長径約360cm、短径約240cm、床面はほぼ平坦であるが、部分的に基本層序のⅦ層（礫層）まで床が達しているので礫が出ているところもある。工具痕は側面部にみられるが天井部は剝落が著しく不明である。地下室横断面形はカマボコ状を呈する。地表面から天井までの厚さは約80cm。床面から天井までは約150cmある。

**竪坑**：2ヵ所ある。南側の竪坑にはテラス状の施設がある。テラスと地下室床面との高低差は約50cmある。北側の竪坑は5号土坑の竪坑と接し、118号土坑と重複する。竪坑が同時のものか、時間差があるものなのかは不明である。

**遺物**：土師質土器5点。時期不明の土器3点。

**5号土坑**（Fig.30, PL.16）

地下室が完全形のまま発見された。9号土坑竪坑と接し、118号土坑と重複する。

**主軸**：北西－南東

**地下室の状況**：地下室の平面形は長方形で、長辺約240cm、短辺約180cm。天井の高さは、高いところで約120cm、床面はほぼ平坦。竪坑は地下室の短辺部側に位置する。天井の厚さは約80cm。横断面は台形を呈する。地下室側面には、工具痕を鮮明にのこすが、天井部は、剝落が著しい。

**竪坑**：横断面は、ロート状。坑床まで約200cmある。

**遺物**：なし。

11号土坑（Fig.30, PL.17）

地下室天井が崩落した状態で発見された。

**主軸**：北－南

**地下室の状況**：平面形は不整円形を呈し、長径約200cm、短径約160cm。確認面から床までは約180cmある。

**竪坑**：テラス状の施設がある。地下室床面との高低差は約50cm。

**遺物**：内耳土器2点。時期不明土器1点。

17号土坑（Fig.31, PL.18）

地下室天井の崩落はなかったが、調査の安全を期するために予め天井部分を抜いて調査を行なった。

**主軸**：西南西－東北東

**地下室の状況**：平面形は不整形を呈し、最大長約320cm、最大幅約200cmである。深さは中央部付近で約200cm。

**竪坑**：地下室の短辺部に位置する。坑床は地下室床面よりも約30cm低い。

**遺物**：石臼1点（PL.38－3）。

26号土坑（Fig.31, PL.18）

地下室天井が崩落した状態で発見された。

**主軸**：北東－南西

**地下室の状況**：平面形は長方形を呈し、長辺約200cm、短辺約140cmで、深さは中央部付近で約210cm。地下室側面に工具痕が鮮明にのこる。地下室床面に小土坑がある。長辺約60cm、短辺約50cm、深さ約20cmの長方形を呈する。小土坑からの出土遺物はない。床面はほぼ平坦。

**竪坑**：地下室の短辺側に位置する。

**遺物**：なし。

39号土坑（Fig.32, PL.19）

地下室の第1室は天井崩落状態で、第2室は完形状態で発見された。

**主軸**：北東－南西

**地下室の状況**：第1室の平面形は不整楕円形で、長径約240cm、短径約190cm。中央部の深さは

地表から約200cmある。床面は第2室に向かってなだらかに傾斜する。第2室床面の平面形は楕円形で、長径約180cm、短径約160cm、床から天井までは約90cmである。地表から地下室天井までの厚さは約160cm。工具痕は側面・天井に明確に残っていた。横断面形は概ね半円形を呈する。床面はほぼ平坦。

**竪坑**：竪坑は第1室と第2室で共有する。それぞれの短辺部に位置する。

**遺物**：土師質土器1点。内耳土器1点。時期不明土器3点。

**61号土坑**（Fig.32, PL.22）

地下室天井が崩落した状態で発見された。

**主軸**：北北西－南南東

**地下室の状況**：地下室床面の平面形は長辺約240cm、短辺約180cmで長方形を呈する。中央部付近の深さは約200cm。床面は坑床から北に向かって若干傾斜する。

**竪坑**：地下室の短辺部に位置する。

**遺物**：内耳土器2点出土。また、人頭大の礫1点、ひで鉢1点（PL.38－1）が地下室床面（平面図Aの地点）から出土した。

**43号土坑**（Fig.33, PL.19）

地下室天井が崩落した状態で発見された。東側で44号土坑と若干、重複するが先後関係は不明。

**主軸**：北西－南東

**地下室の状況**：地下室平面形は不整形を呈する。最大長約330cm、最大幅約200cm。床面はほぼ平坦。中央部付近の深さは約180cm。

**竪坑**：地下室長辺の西側コーナー付近に位置する。

**遺物**：磨石・敲石1点（Fig.19－7, PL.37－7）。土師器1点。土師質土器2点（Fig.50－15, PL.35－2）。時期不明土器1点。

**45号土坑**（Fig.33, PL.22）

地下室天井が崩落した状態で発見された。

**主軸**：西北西－東南東

**地下室の状況**：地下室床面の平面形は不整形を呈する。最大長約240cm。最大幅約180cm。中央部付近の深さは約140cm。床面は概ね平坦。

**竪坑**：竪坑は地下室短辺部に位置する。

**遺物**：土師器2点。

**44号土坑**（Fig.34, PL.20）

地下室天井が崩落した状態で発見された。52号土坑・106号土坑・43号土坑と重複する。先後の関係は不明。

**主軸**：不明

**地下室の状況**：直径約210cmで不整円形を呈する。深さ約220cm。床面はほぼ平坦。

**竪坑**：地下室の西側に位置する。106号土坑の竪坑と重複する。

**遺物**：土師質土器１点。内耳土器１点。中世の土器１点。時期不明土器１点。

**52号土坑**（Fig.34, PL.20）

地下室天井が崩落した状態で発見された。44号土坑・106号土坑・65号土坑と重複するが、それらとの関係は不明。

**主軸**：西－東

**地下室の状況**：長方形を呈する。長辺約400cm、短辺約200cm。中央部での深さは約160cm。

**竪坑**：重複によって遺存していないが、地下室の短辺部に位置していたと考えられる。

**遺物**：磨製石斧１点（Fig.19－９, PL.37－９）。土師器１点。土師質土器９点（Fig.49－６・７）。内耳土器14点。多孔石１点（PL.37－14）。石臼３点。

**その他**：床面から１号土坑、147号土坑と同様な炭化植物の出土があったが、サンプルを採取する前に、大雨にみまわれ、土といっしょになってしまい採取できなかった。

**106号土坑**（Fig.34, PL.20）

地下室天井が崩落した状態で発見された。44号土坑・65号土坑・52号土坑と重複する。新旧関係は不明。

**主軸**：不明

**地下室の状況**：不整円形を呈する。長径約240cm、短径約200cmで、深さは約160cm。床はほぼ平坦。

**竪坑**：44号土坑の竪坑と重複。地下室の東側に位置する。

**遺物**：なし。

**65号土坑**（Fig.34, PL.20）

地下室天井が崩落した状態で発見された。52号土坑・106号土坑・102号土坑と重複する。新旧関係は不明。

**主軸**：不明

**地下室の状況**：調査時では、長辺約180cm、短辺約140cmで長方形を呈するが、地下室が他の土

坑と重複しているので詳細は、不明。深さは中央部で150cm。床面はほぼ平坦で坑床との段差はない。

**竪坑**：地下室の南側に位置する。

**遺物**：なし。

**36号土坑**（Fig.36, PL.19）

地下室天井が崩落した状態で発見された。

**主軸**：北－南

**地下室の状況**：長辺約260cm、短辺約140cmでほぼ長方形を呈する。

**竪坑**：地下室の短辺部に位置する。断面形は円筒形を呈する。

**遺物**：内耳土器1点。

**60号土坑**（Fig.36, PL.22）

ほぼ完全な形で遺存していた。

**主軸**：北北西－南南東

**地下室の状況**：地下室床面の平面形は方形を呈し、長辺260cm、短辺160cm。天井の横断面形はドーム状を呈する。床面はほぼ平である。側面（壁）には工具痕がある。天井は剝落が著しく、工具痕は観察できなかった。

**竪坑**：竪坑断面はロート状を呈する。地下室の南東コーナーに位置する。竪坑の地表近くに閉塞石（板状）がつまっていた。

**遺物**：なし。

**その他**：すぐ北側が46号土坑であるが重複はしていない。おそらく46号土坑と重複しないような配慮がなされたと思われる。そのために意図的に、竪坑が地下室のコーナーにくるような掘り方をしたと思われる。

**35号土坑**（Fig.37, PL.18）

地下室天井一部が崩落した状態で発見された。東側にて46号土坑と重複する。また、地下室の真上には、70号土坑（土壙墓）がある。

**主軸**：西南西－東北東

**地下室の状況**：台形を呈し、各辺の値はおよそ180cm×320cm×340cm×70cm。深さは最も深いところで約190cm。床面は東側に向かって高くなっており、高低差は約40cm。

**竪坑**：テラス状の施設を有する。地下室床面との比高は約20cm。地下室の短辺側に位置する。

**遺物**：縄文中期土器1点。土師質土器2点(Fig.49－12)。内耳土器3点(Fig.49－14・PL.35－

5・6，PL.34－1）。石臼2点。時期不明の土器1点。

**46号土坑**（Fig.37，PL.21）

地下室天井が崩落した状態で発見された。西側で35号土坑と重複する。

**主軸**：不明

**地下室の状況**：地下室平面形は半円状を呈する。深さは中央部で約120cm。床面は、ほぼ平坦である。

**竪坑**：2ヵ所ある（エレベーションポイントのAとD′のところ）。

**遺物**：土師質土器2点。内耳土器1点（Fig.50－19，PL.34－4）。中世の土器1点。古銭6点（治平元□1、□祐□□1＜エレベーションポイントD′の入口から出土＞景徳元□1、洪武通寳2、元豊通寳1）。以上のほかに、アワの様な炭化種子（現在鑑定中）が地下室内から出土した。

**169号土坑**（Fig.38，PL.28）

地下室天井が崩落した状態で発見された。

**主軸**：北西－南東

**地下室の状況**：平面形は不整長方形。長辺約220cm、短辺約200cm。深さは中央部で約180cm。床面は、竪坑坑床から東側にむかってゆるやかに傾斜する。高低差は約20cm。

**竪坑**：竪坑は地下室の短辺側に位置する。

**遺物**：なし。

**64号土坑**（Fig.38，PL.23）

地下室天井が崩落した状態で発見された。

**主軸**：西南西－東北東

**地下室の状況**：平面形は、概ね240cm×260cmで方形を呈する。地表面からの深さは中央部で約200cm。床面は地下室東側から竪坑坑床にむかってゆるやかに傾斜する。高低差は約20cm。

**竪坑**：地下室の西側に位置する。

**遺物**：縄文土器1点。内耳土器8点（PL.34－2）。土師質土器10点。石臼1点。

**69号土坑**（Fig.39，PL.23）

地下室天井が崩落した状態で発見された。

**主軸**：北北西－南南東

**地下室の状況**：床面の平面形は長方形で長辺約200cm、短辺約150cm。床面はほぼ平坦で、中央部の深さは約120cm。

**竪坑**：地下室の長辺側に位置する。テラス状の施設を有する。坑床と地下室床面との比高差は約20cm。

**遺物**：なし。

171号土坑（Fig.39, PL.28）

地下室天井が崩落した状態で発見された。

**主軸**：北－南

**地下室の状況**：床面の平面形は、概ね長方形を呈し、長辺約220cm、短辺約160cm。地表からの深さは、中央部で約180cm。床面は北に向かってゆるやかに傾斜する。高低差は、約20cmである。

**竪坑**：地下室の短辺側に位置する。

**遺物**：なし。

148号土坑（Fig.40, PL.25）

地下室天井が崩落した状態で発見された。

**主軸**：西南西－東北東

**地下室の状況**：平面形は長辺約260cm、短辺約220cmで長方形を呈する。床面はほぼ平坦。中央付近では地表から約120cmの深さがある。

**竪坑**：地下室の短辺側に位置する。

**遺物**：なし。

166号土坑（Fig.40, PL.25）

地下室天井が崩落した状態で発見された。東側で147号土坑と重複する。互いの新旧関係は不明。

**主軸**：不明

**地下室の状況**：地下室は不整形を呈し、地表からの深さは中央付近で約180cmある。

**竪坑**：地下室の南側に位置する。

**遺物**：なし。

147号土坑（Fig.41, PL.25）

地下室天井が崩落した状態で発見された。東側で155号土坑、西側で166号土坑と重複するが、先後関係は不明である。

**主軸**：不明。

**地下室の状況**：現存する大きさは、最大長約280cm、最大幅約200cm。深さは中心付近で約180cm。床面は平坦だが、155・166号土坑よりも高い位置にある。

**竪坑**：残存部にはない。

**遺物**：床面から１号土坑同様の炭化植物が出土した(図面のスクリーントーン部分)。山梨文化財研究所外山秀一氏の同定によると、ウシクサ属（ススキ、チガヤなど）が主体でシバ属が若干混じる、ということである。

**155号土坑**（Fig.41, PL.25）

地下室天井が崩落した状態で発見された。北側で147号土坑と重複するが先後関係は不明である。

**主軸**：北東－南西

**地下室の状況**：最大長約320cm、最大幅約260cmで不整長方形を呈す。深さは中央部付近で約180cm。床面はほぼ平坦。

**竪坑**：地下室の短辺側に位置する。断面形は円筒形を呈していた。

**遺物**：なし。

**168号土坑**（Fig.42, PL.28）

地下室天井が崩落した状態で発見された。

**主軸**：西南西－東北東

**地下室の状況**：南側は一部攪乱を受けているが元来は、長方形を呈していたと思われる。地下室の大きさは概ね、520cm×180cmで、地表からの深さは約180cm。床面は、竪坑坑床から北側へゆるやかに傾斜する。高低差は約20cm。

**竪坑**：地下室の長辺側に位置する。

**遺物**：なし。

**149号土坑**（Fig.42, PL.26）

地下室天井が崩落した状態で発見された。

**主軸**：西北西－東南東

**地下室の状況**：平面形は不整長方形を呈する。長辺約320cm、短辺約160cmで、地下室床面までは中央部で約160cmである。床面は、ほぼ平坦である。

**竪坑**：地下室の長辺側に位置する。

**遺物**：中国製の白磁皿１点(Fig.49－４，PL.35－４)が、地下室床面の17cm上の所から出土した。

**153号土坑**（Fig.43, PL.27）

地下室天井が崩落した状態で発見された。

**主軸**：北北西－南南東

**地下室の状況**：平面形は長方形を呈する。長辺約200cm、短辺約160cmで、深さは中央部付近で約220cmある。床面はほぼ平坦。

**竪坑**：長辺側にそれぞれ1ヵ所ずつ、計2ヵ所ある。いずれも坑床部にテラス状の施設を有する。地下室床面との比高差は、西側では約30cm、東側では約60cmある。2つの竪坑が同時のものか否かは、不明。

**遺物**：縄文土器1点。土師質土器2点。

**150号土坑**（Fig.43, PL.26）

地下室天井が崩落した状態で発見された。

**主軸**：北北西－南南東

**地下室の状況**：平面形は長方形を呈する。長辺約320cm、短辺約160cm。深さは中央部付近で約160cm。床面はほぼ平坦。

**竪坑**：地下室長辺側に1ヵ所ずつ、計2ヵ所有する。東の竪坑坑床にはテラス状の施設がある。地下室床面との比高差は約70cm。2つの竪坑が同時のものか否かは、不明。

**遺物**：土師質土器1点。時期不明土器1点。

**154号土坑**（Fig.44, PL.27）

地下室天井が崩落した状態で発見された。

**主軸**：北北西－南南東

**地下室の状況**：床面の平面形は概ね長方形を呈し、長辺約240cm、短辺約180cm。中央部付近の深さは約160cm。床面は南へ向かって傾斜する。南北の高低差は約40cm。

**竪坑**：地下室短辺側に位置する。

**遺物**：土師質土器1点。古銭が3点出土したが、名称は不明。

**138号土坑**（Fig.44, PL.24）

地下室天井が崩落した状態で発見された。

**主軸**：北北西－南南東

**地下室の状況**：床面の平面形は、ほぼ長方形を呈する。長辺約240cm、短辺約180cm。中央部付近の深さは約120cm。床面は北へ向かってわずかに傾斜する。南北の高低差は約20cm。

**竪坑**：地下室の長辺側に位置する。

**遺物**：なし。

**152号土坑**（Fig.45, PL.27）

地下室天井が崩落した状態で発見された。発見された地下式坑の中で最西端に位置する。

**主軸**：北北西－南南東

**地下室の状況**：床面の平面形は長方形を呈する。長辺約400cm、短辺約160cm。中央付近の深さは約120cm。床面はほぼ平坦。

**竪坑**：地下室の長辺側に位置する。坑床にはテラス状の施設を有する。地下室床面と約20cmの差を有する。

**遺物**：なし。

**156号土坑**（Fig.45, PL.27）

完全形で発見された。竪坑が158号土坑と重複する。

**主軸**：北－南

**地下室の状況**：平面形は長辺約230cm、短辺約180cmで長方形を呈する。床面から天井まで約80cm。天井の厚さは約150cm。天井は平坦で、地下室の横断面は長方形を呈する。床面は平坦で坑床と連なる。地下室の入口の高さは、床面から約70cmと非常に低い。

**竪坑**：断面形は円筒形。地下室短辺側に位置する。

**遺物**：土師質土器１点が竪坑から出土した。

### 第２項　土壙墓

100基以上の土坑が発見されたが、そのうち、古銭・骨が出土した14基を土壙墓と判断した。

**29号土坑**（Fig.46, PL.30）

主軸：北北西－南南東

形態：楕円形を呈する。長径76cm、短径58cm。深さ12cm。

出土遺物：土師器２点。古銭。

**113号土坑**（Fig.46, PL.29）

25号土坑と重複するが、先後関係は不明である。

形態：楕円形を呈する。長径93cm、短径83cm。深さ110cm。

出土遺物：古銭９点（永楽通寶２、大中通寶１、淳化元寶１、景定元寶１、元□□□１、不明３）。

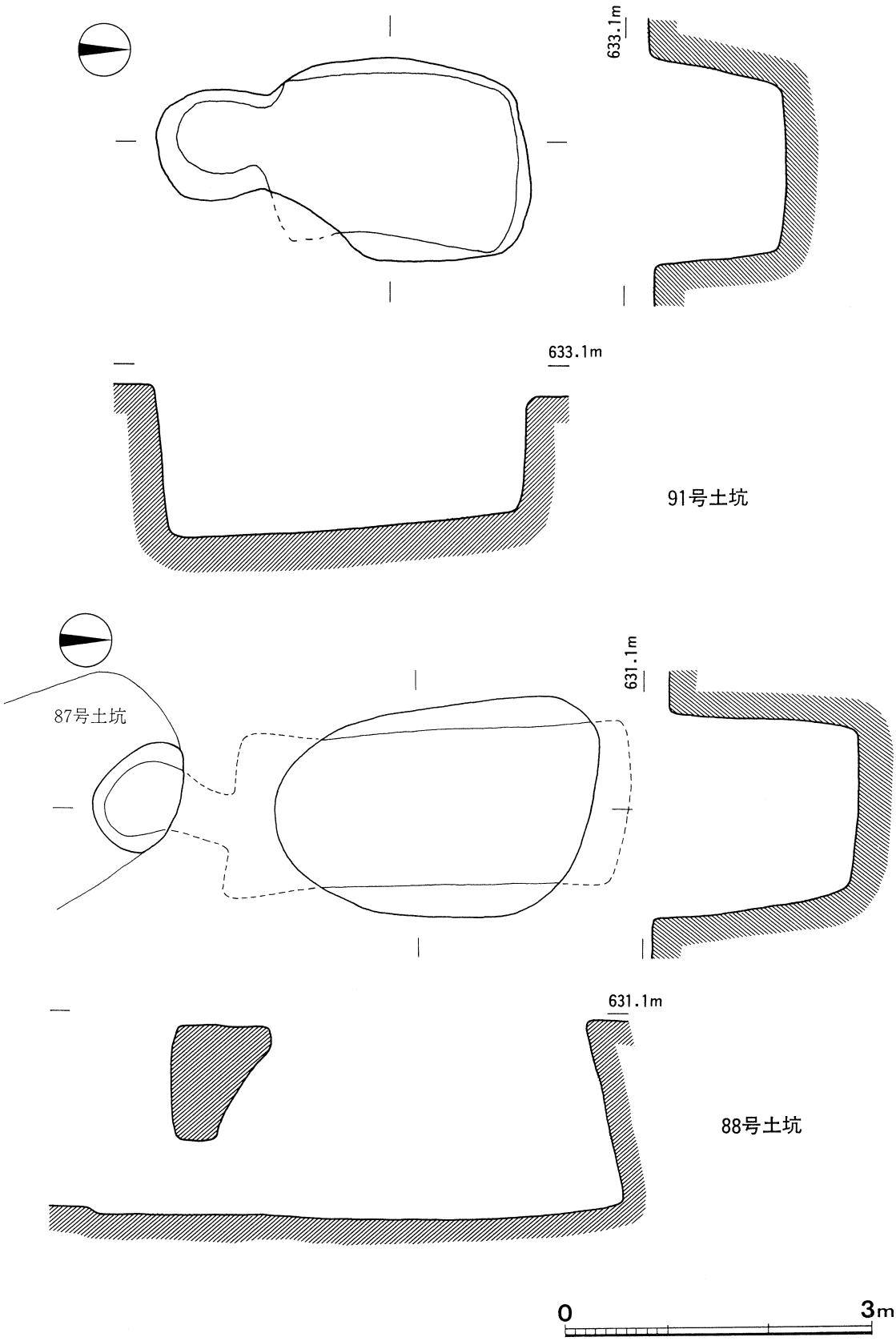



Fig. 24　地下式坑（91号・88号）S＝1/60

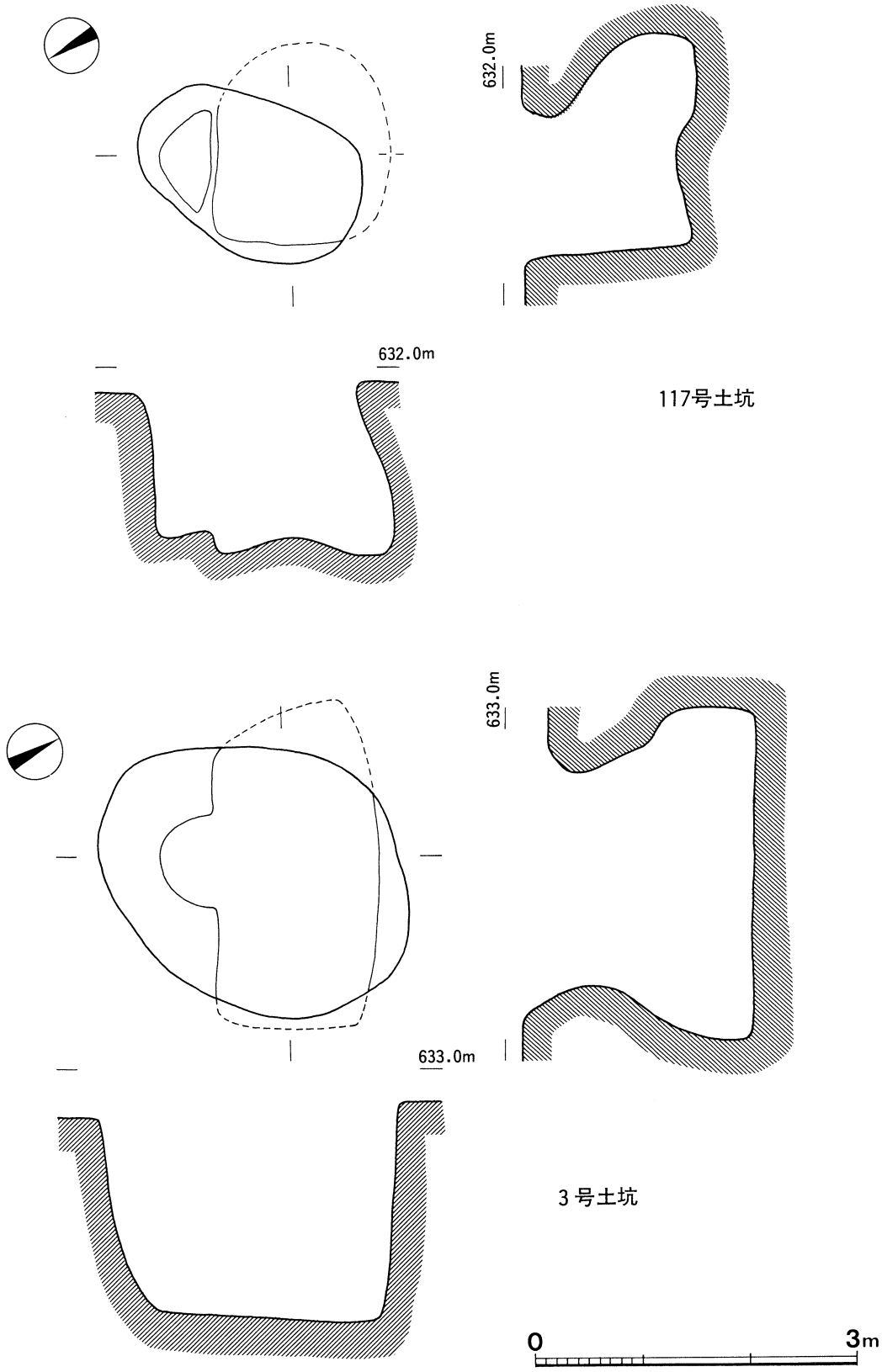



Fig. 25　地下式坑（117号・3号）S＝1/60

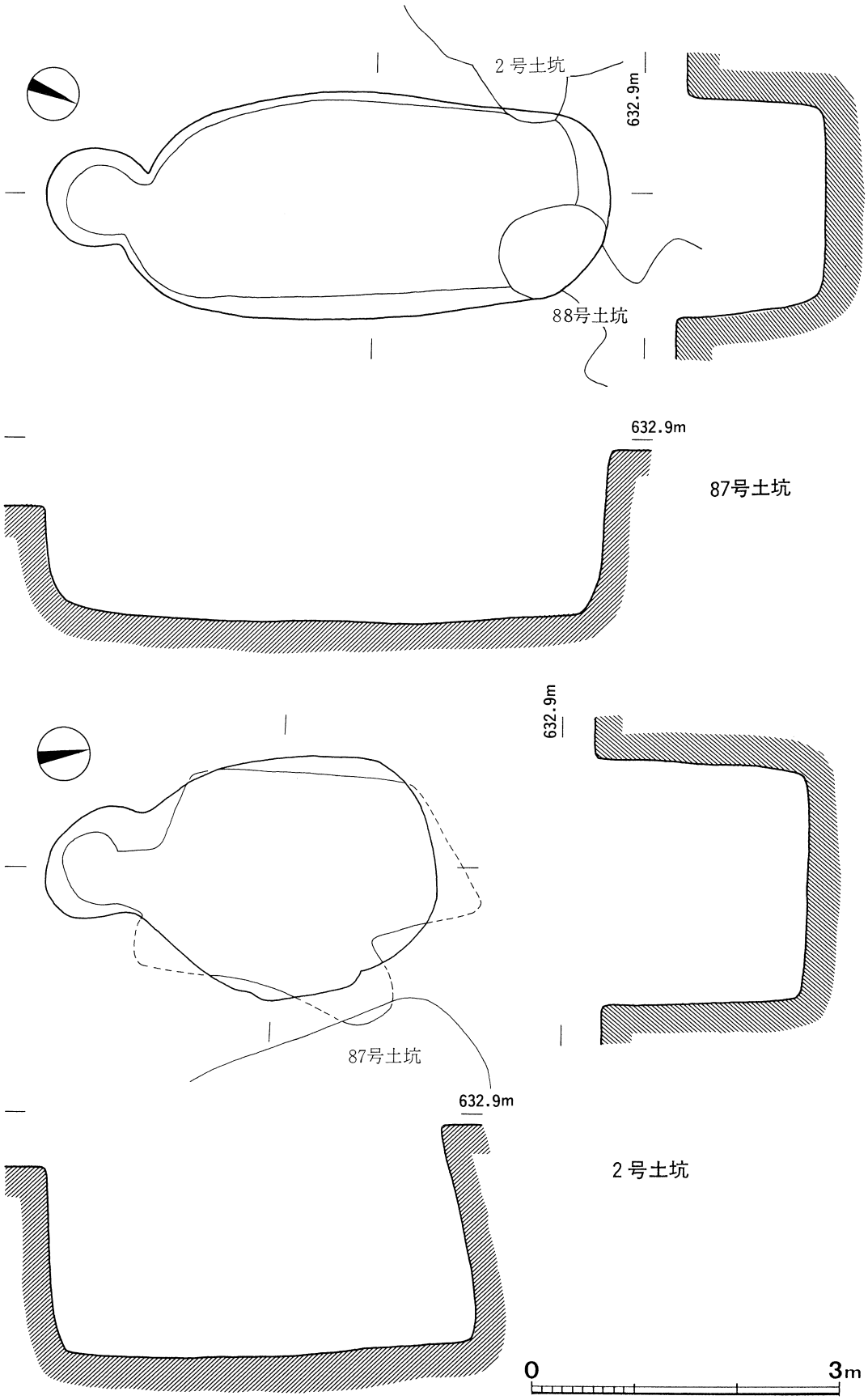



Fig. 26　地下式坑（87号・2号）S＝1/60

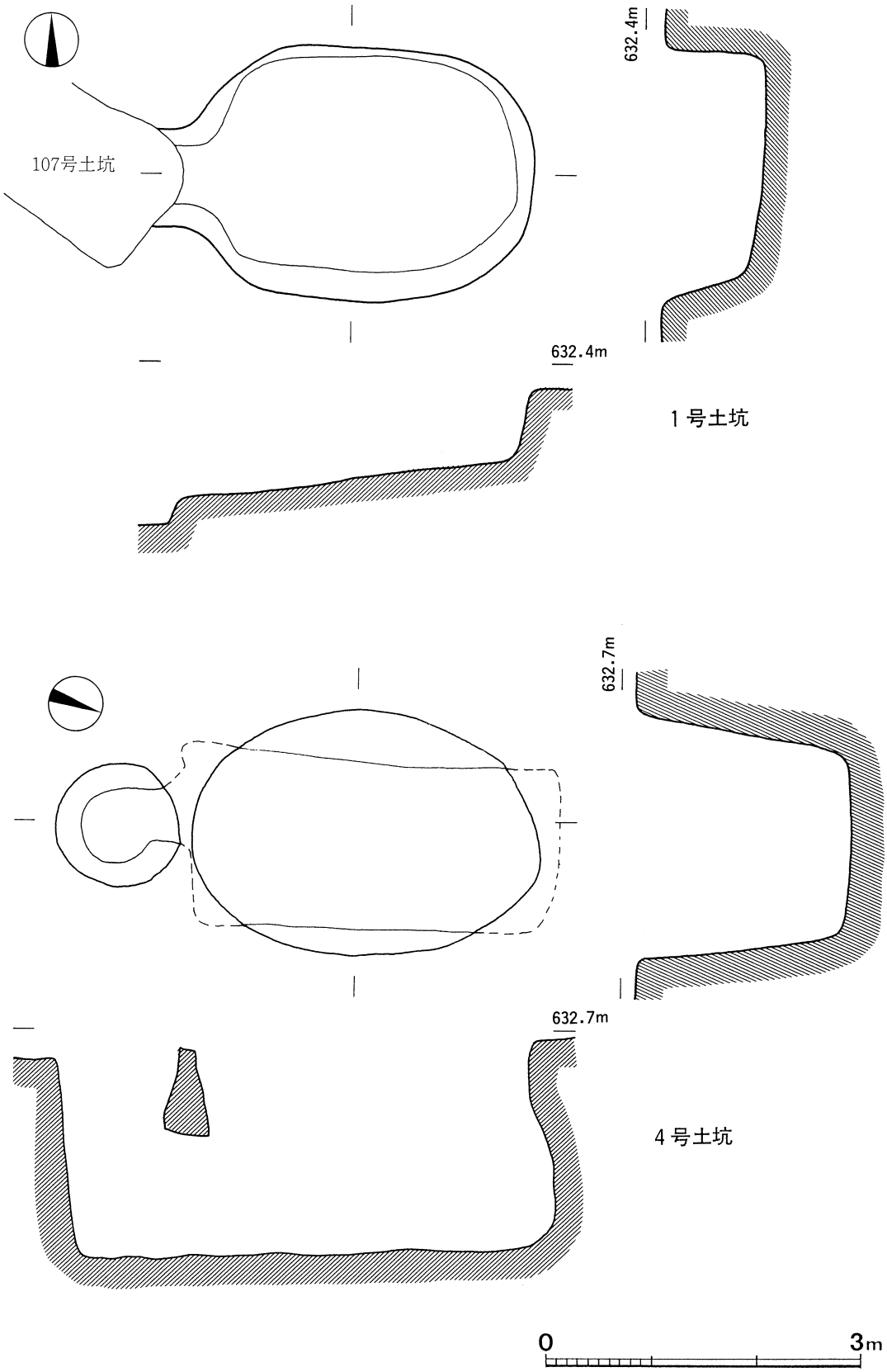



Fig. 27　地下式坑（1号・4号）S＝1/60

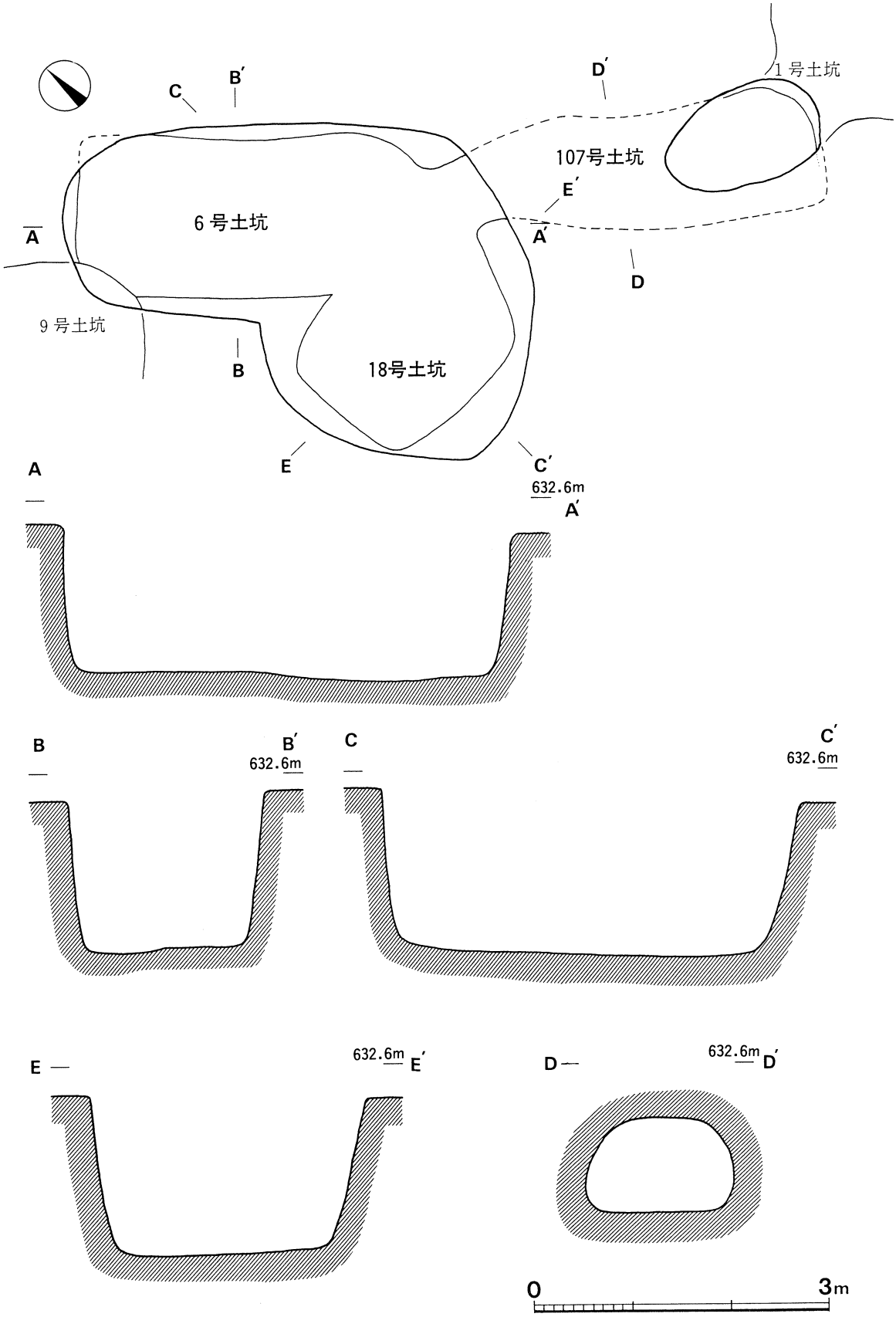



Fig. 28　地下式坑（6号・18号・107号）S＝1/60

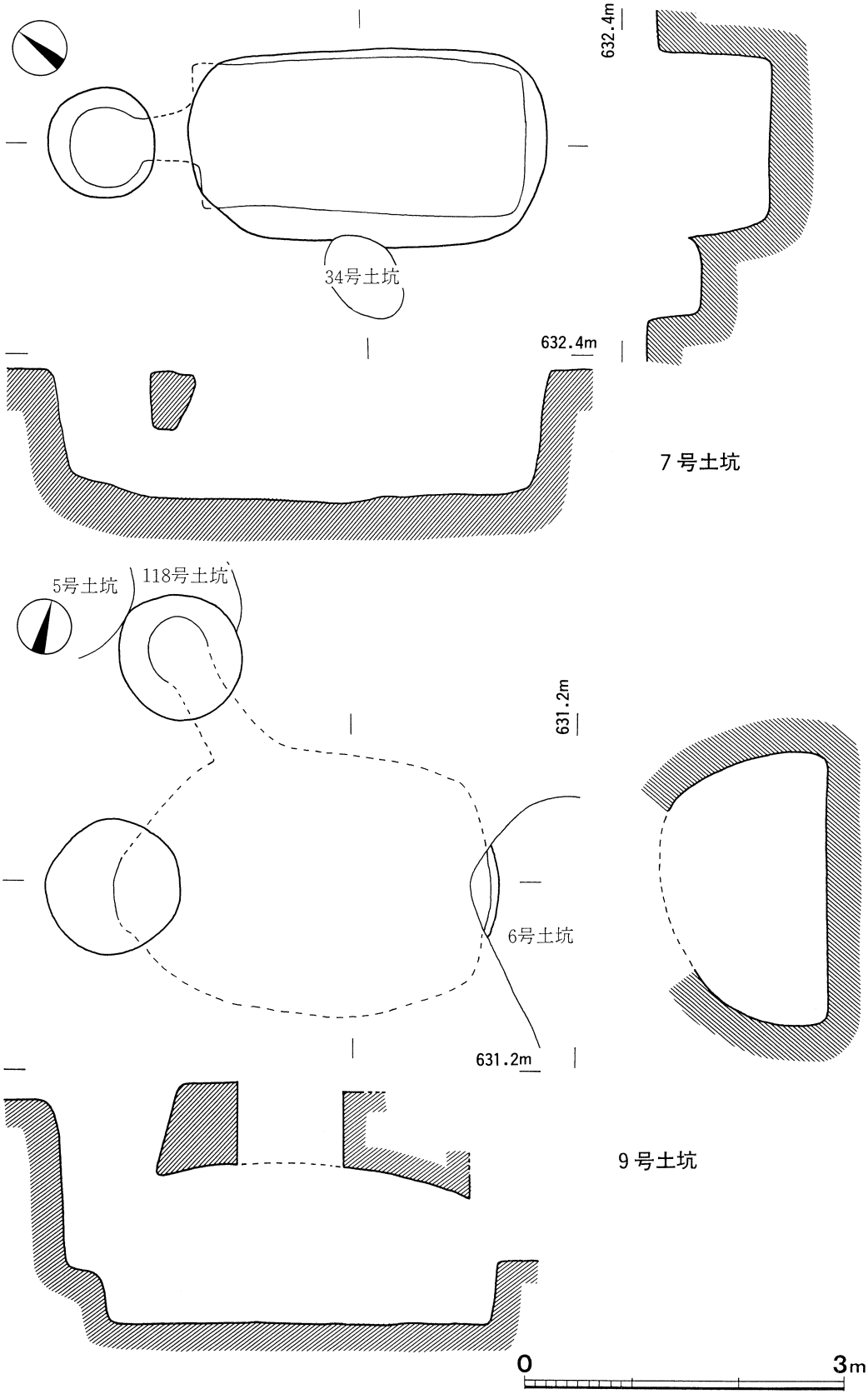



Fig. 29　地下式坑（7号・9号）S＝1/60

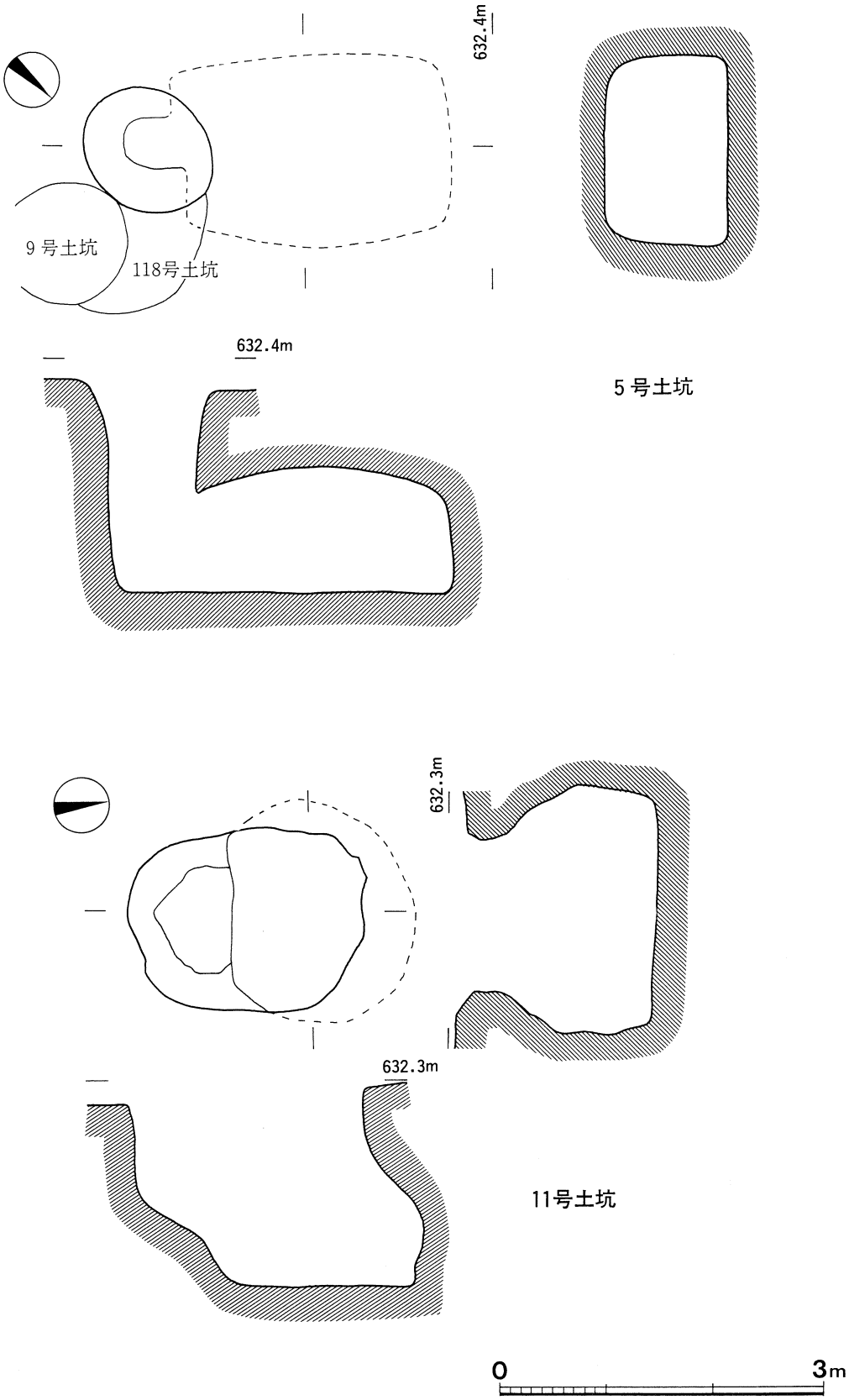



Fig. 30　地下式坑（5 号・11号）S＝1/60

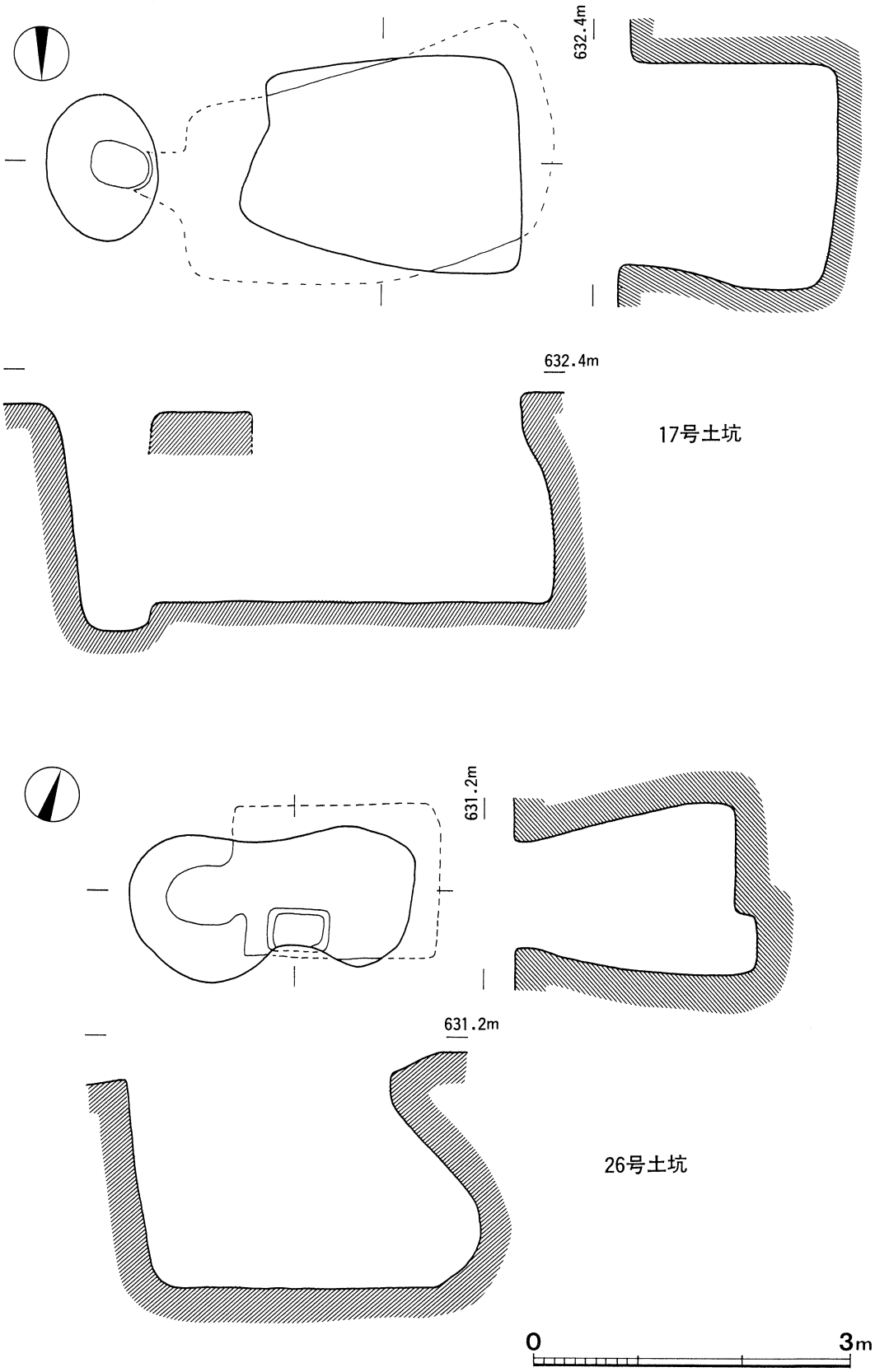



Fig. 31　地下式坑（17号・26号）S＝1/60

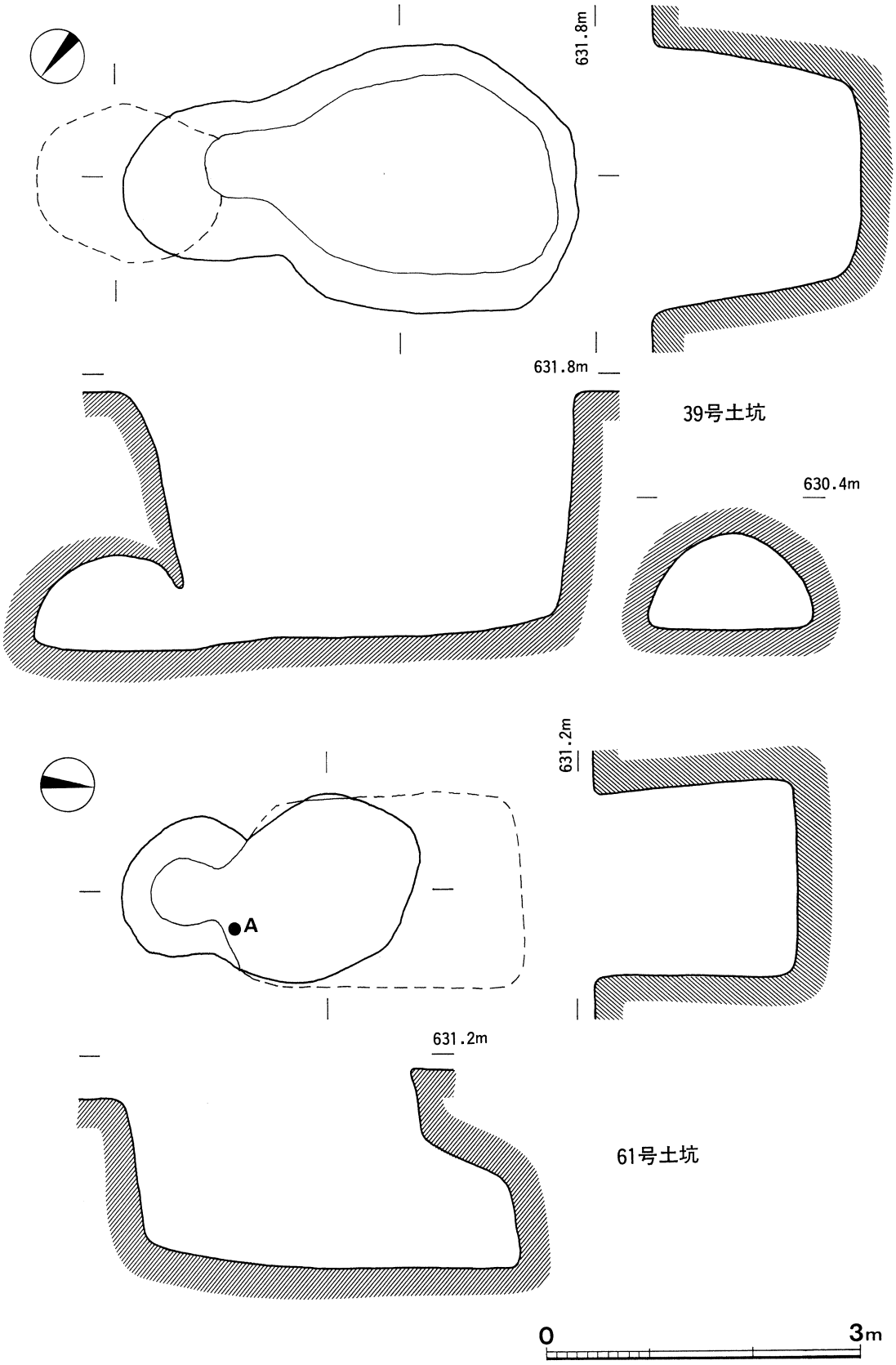
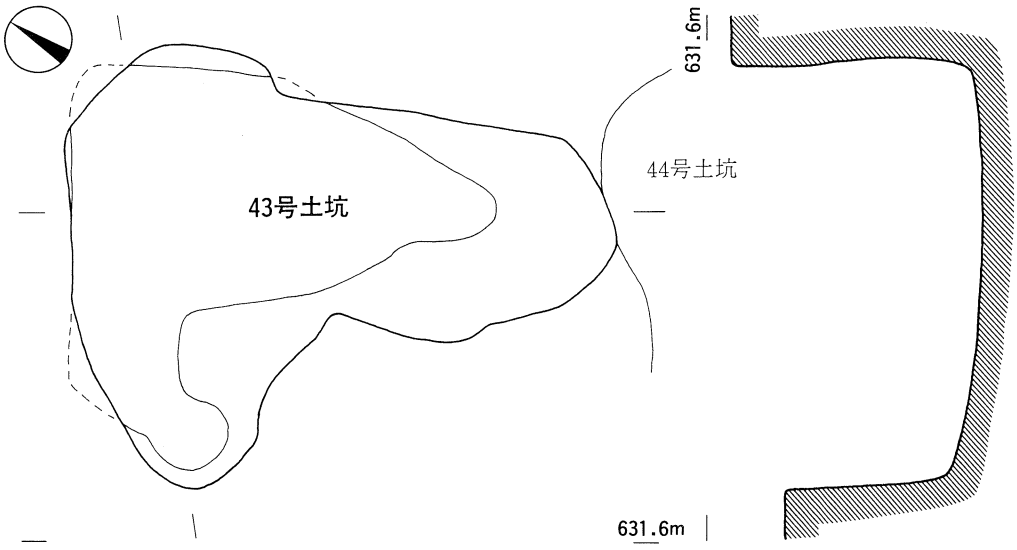
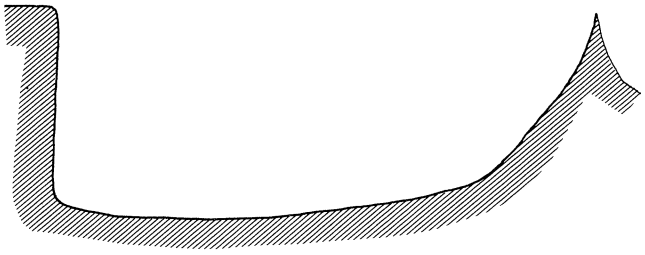



Fig. 32　地下式坑（39号・61号）S＝1/60



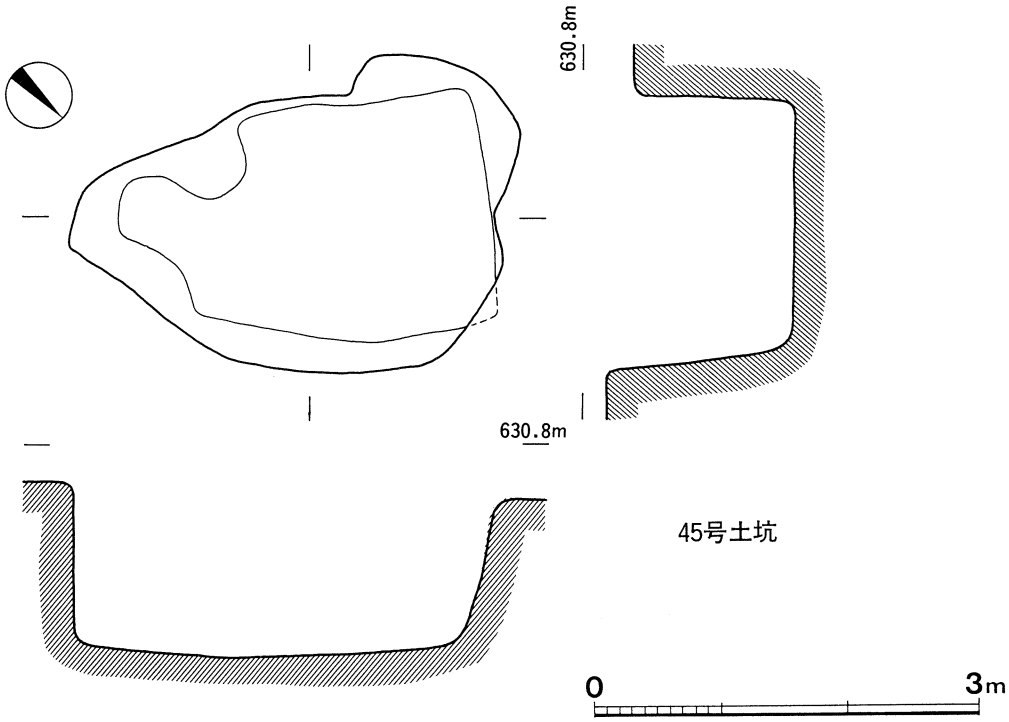



Fig. 33　地下式坑（43号・45号）S＝1/60

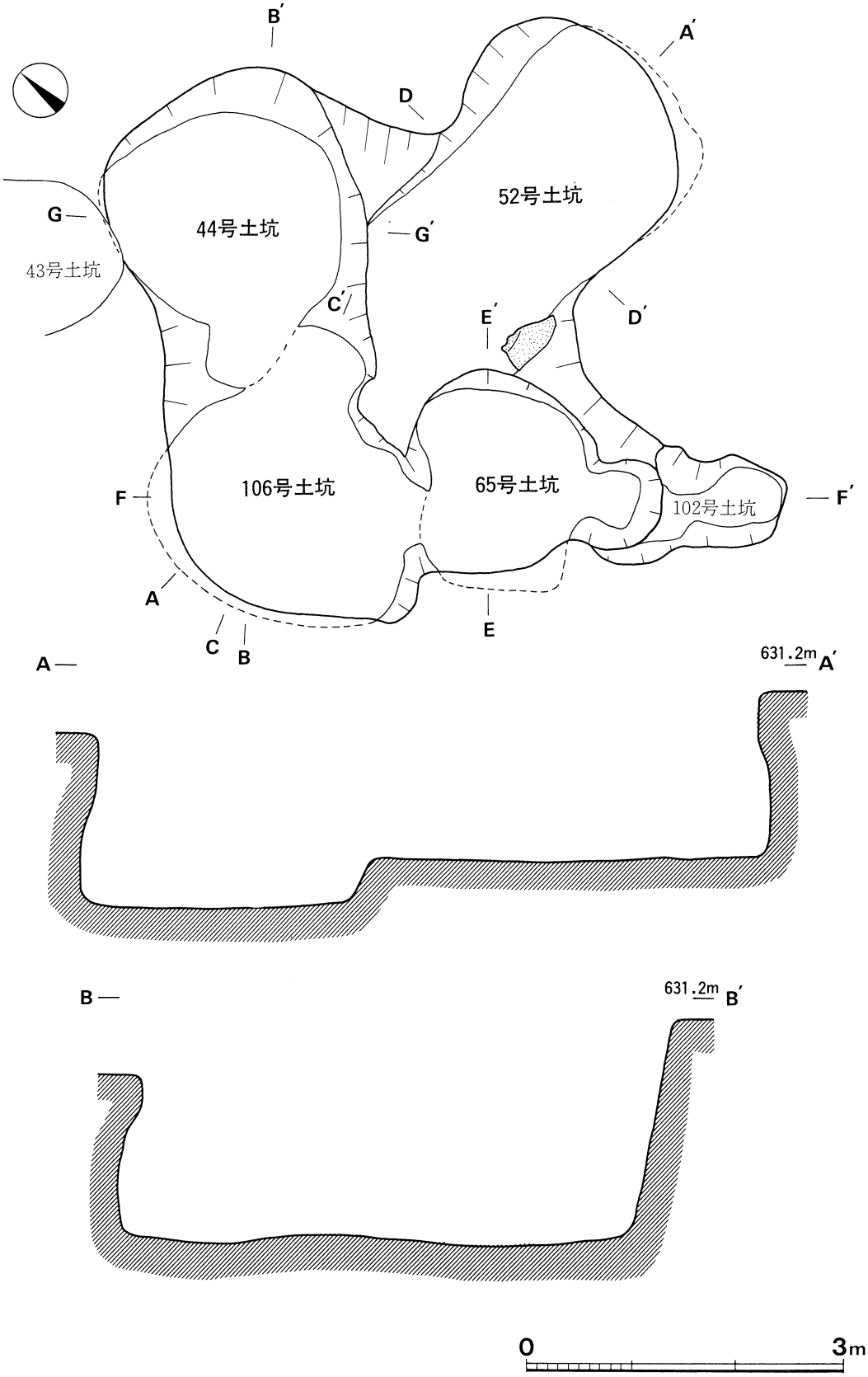



Fig. 34　地下式坑（52号・44号・106号・65号）S＝1/60

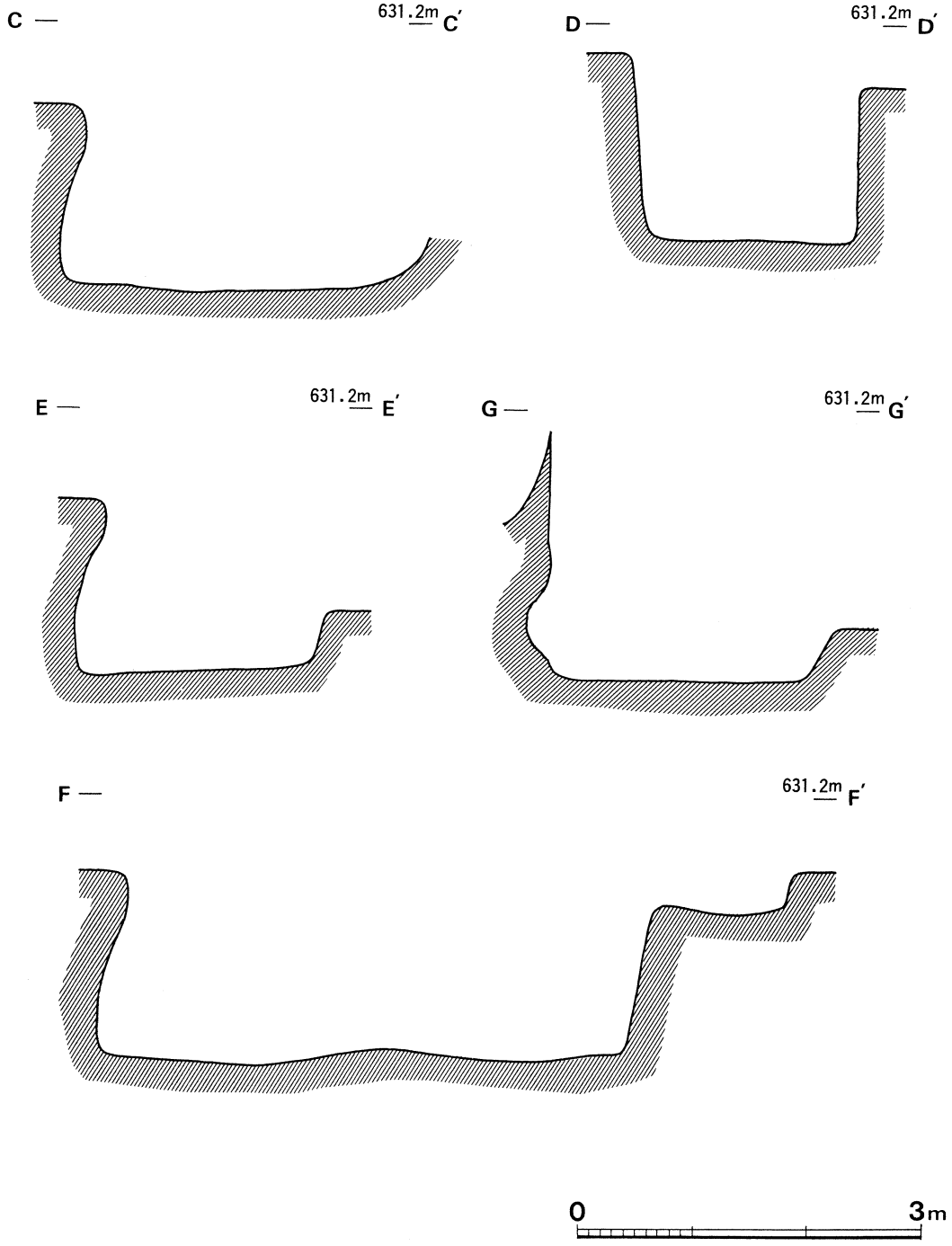



Fig. 35　地下式坑（52号・44号・106号・65号）S＝1/60

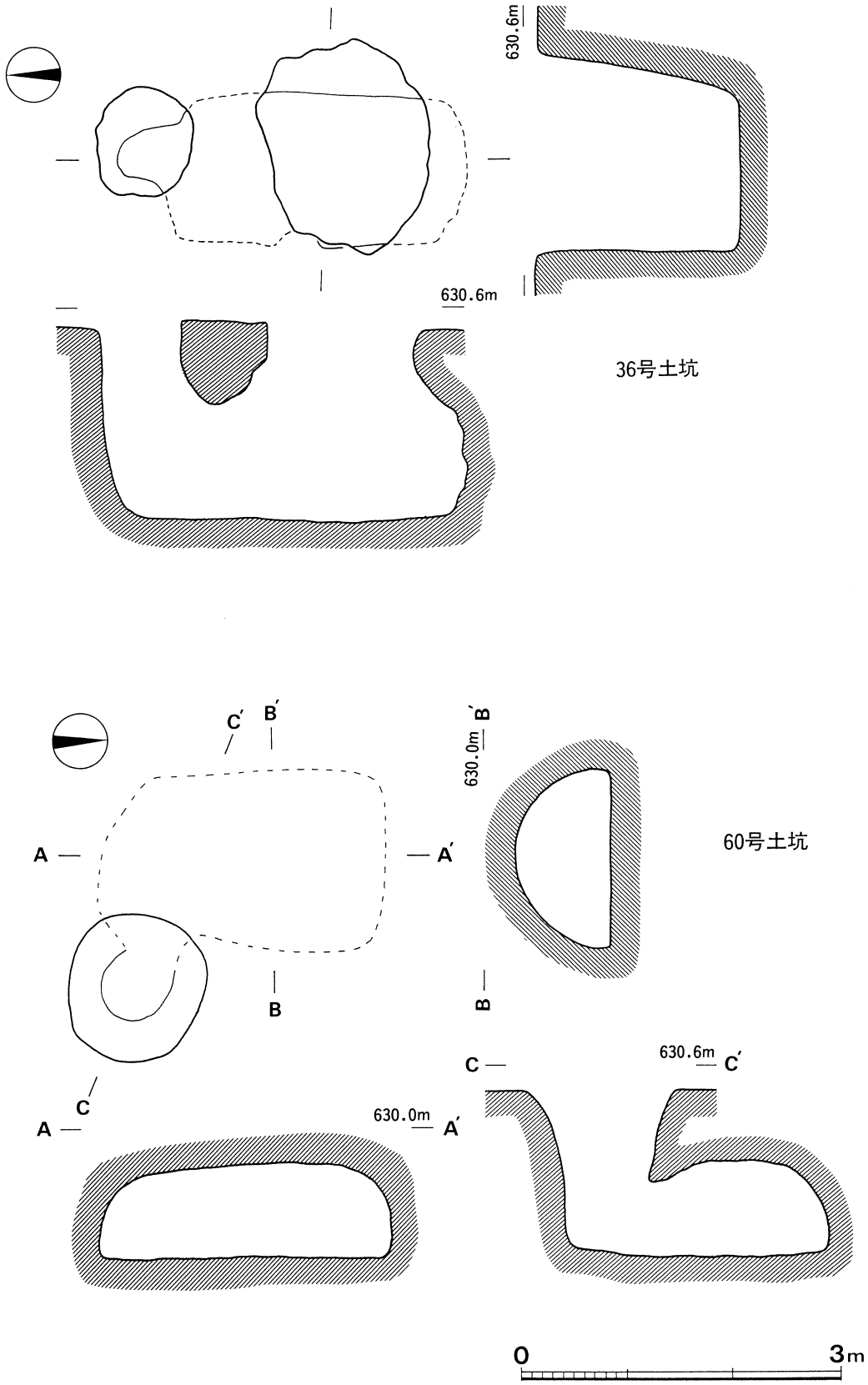



Fig. 36　地下式坑（36号・60号）S＝1/60

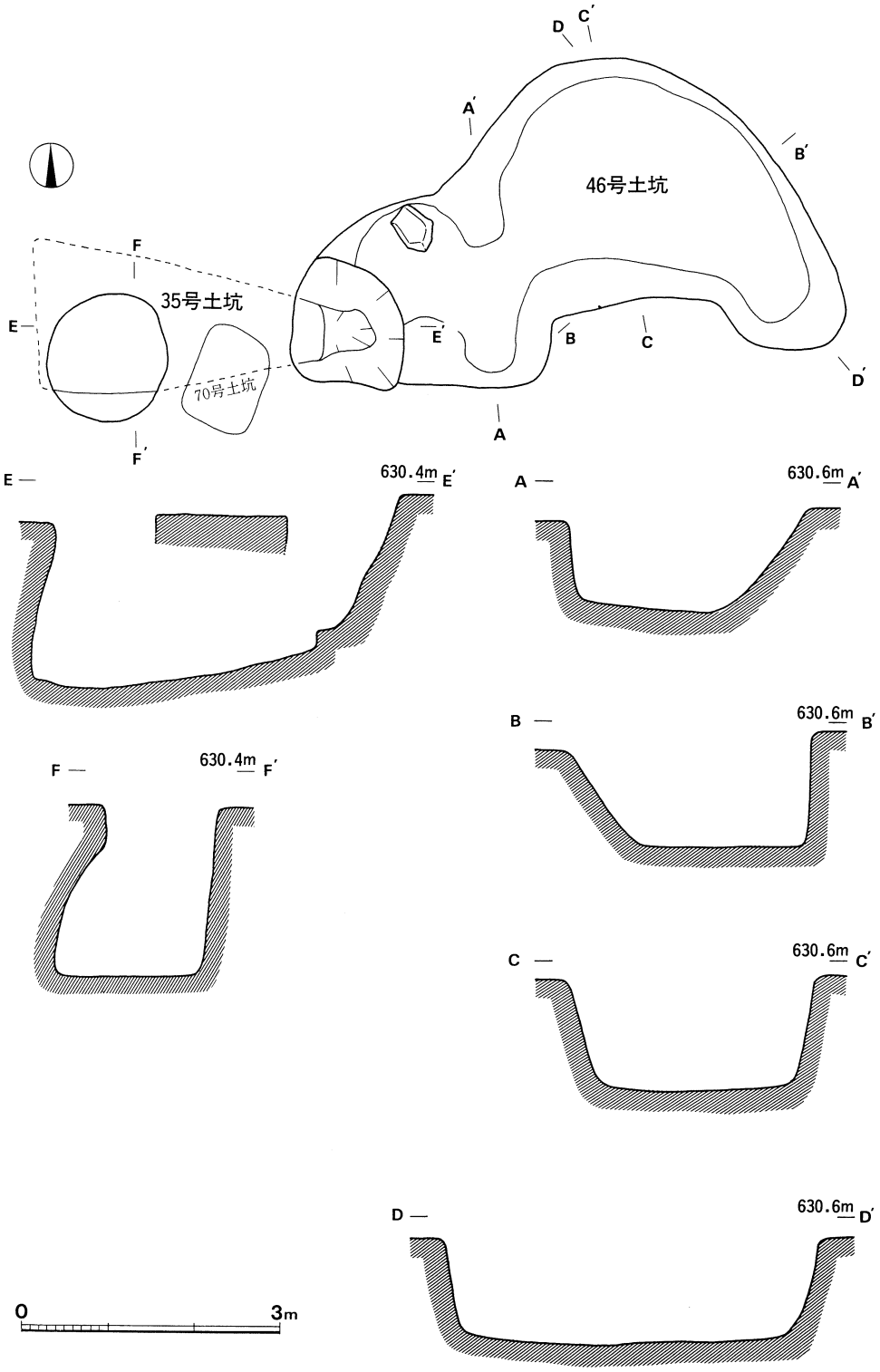



Fig. 37　地下式坑（35号・46号）S＝1/80

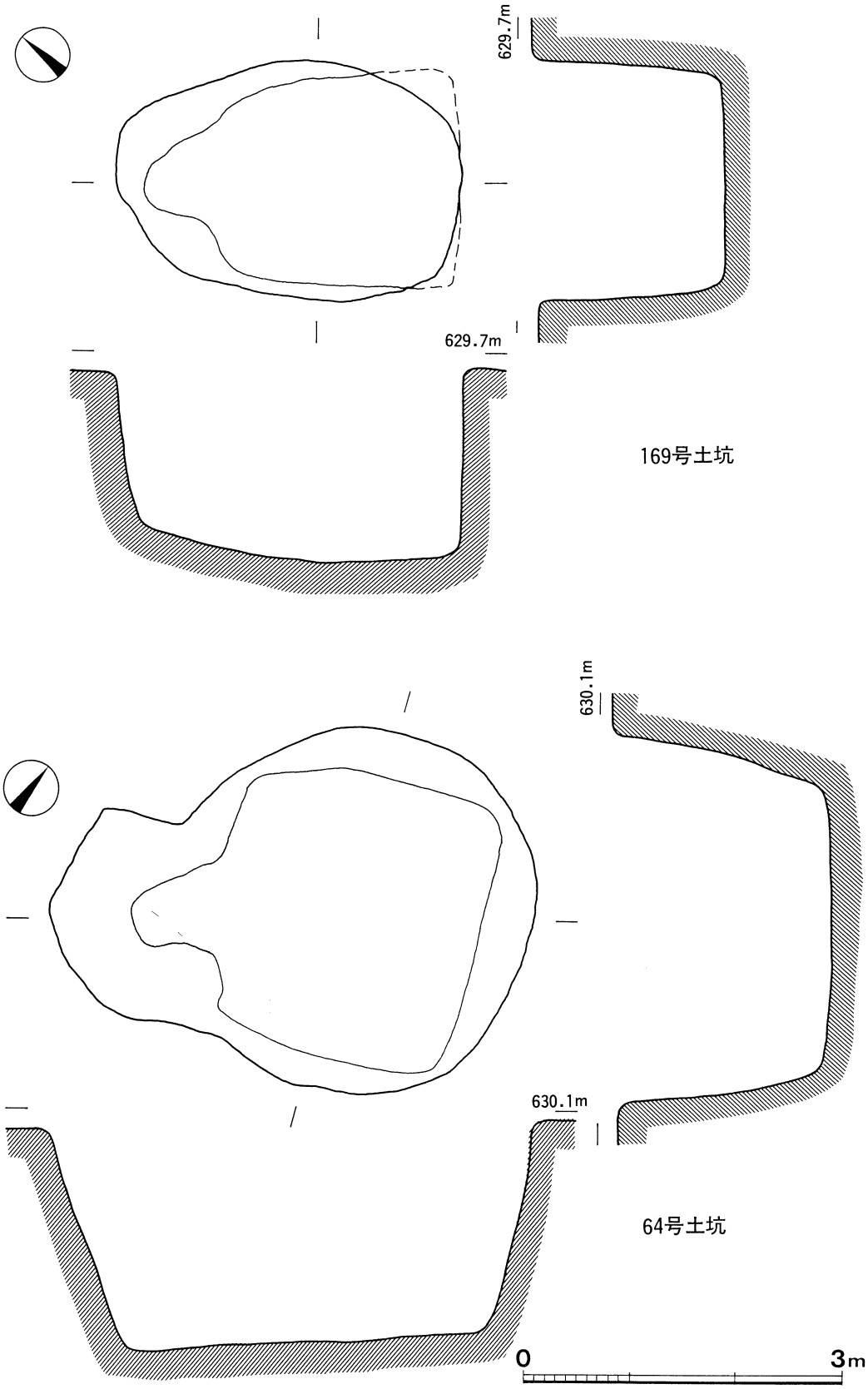



Fig. 38　地下式坑（169号・64号）S＝1/60

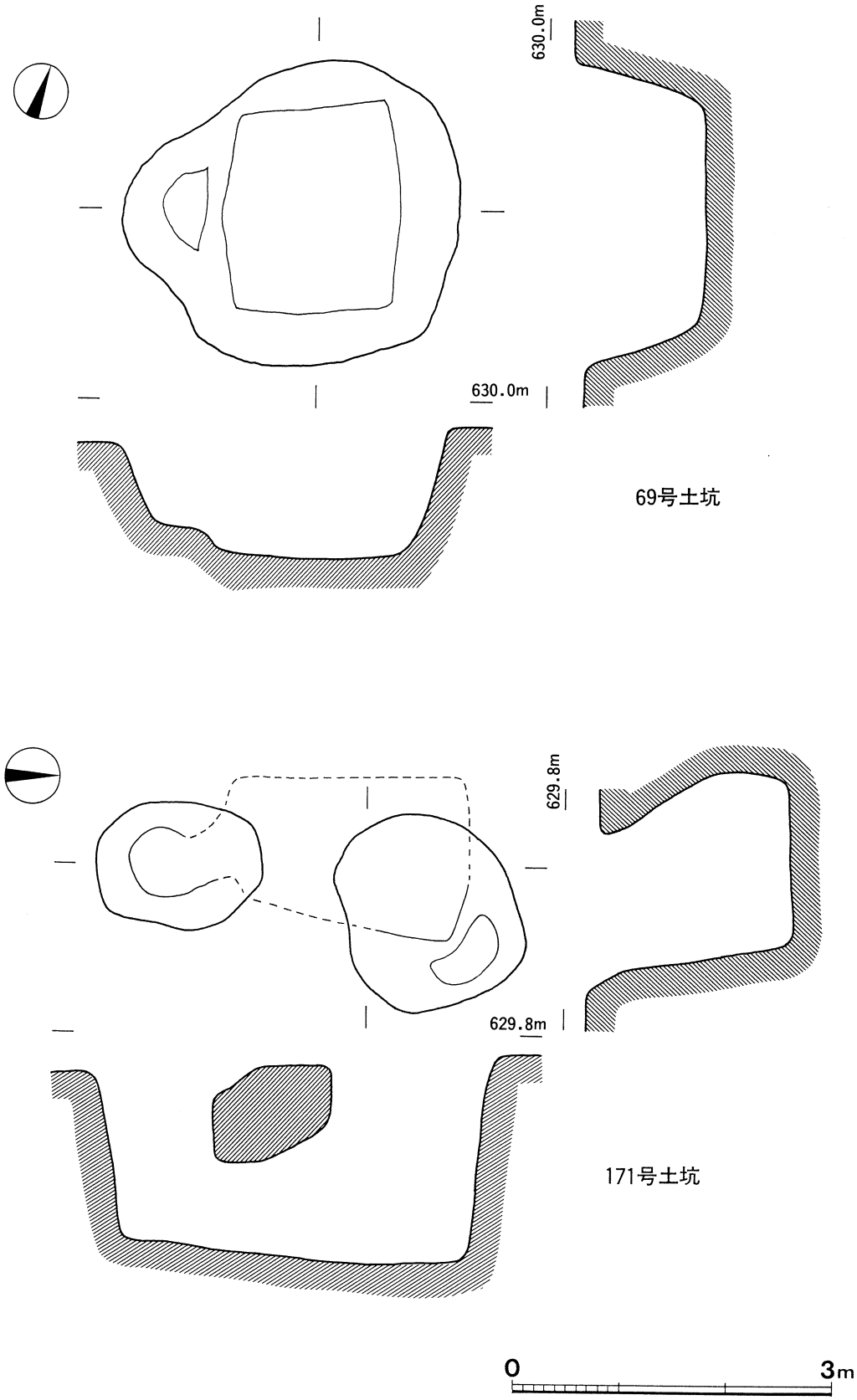



Fig. 39　地下式坑（69号・171号）S＝1/60

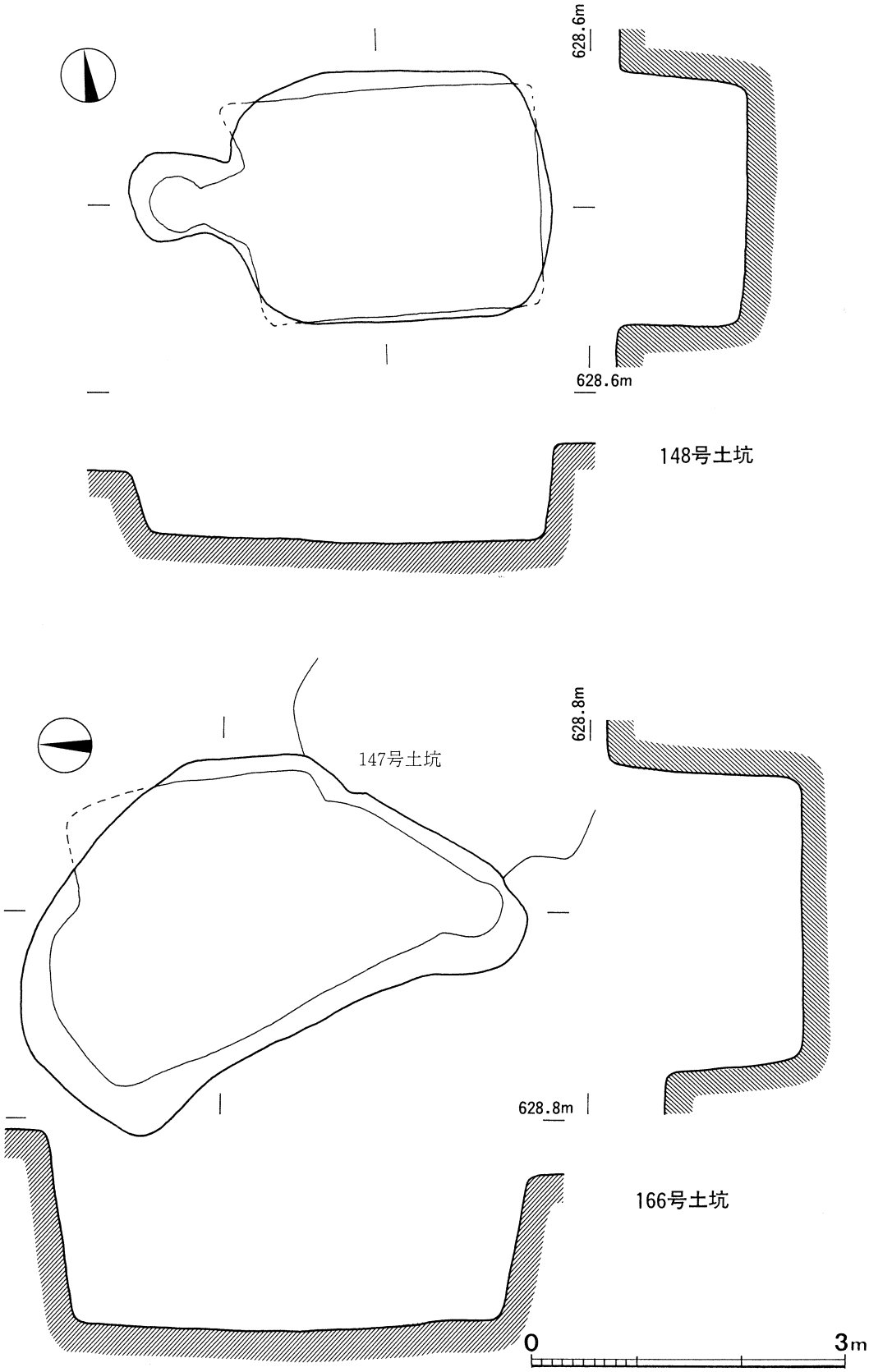



Fig. 40　地下式坑（148号・166号）S＝1/60

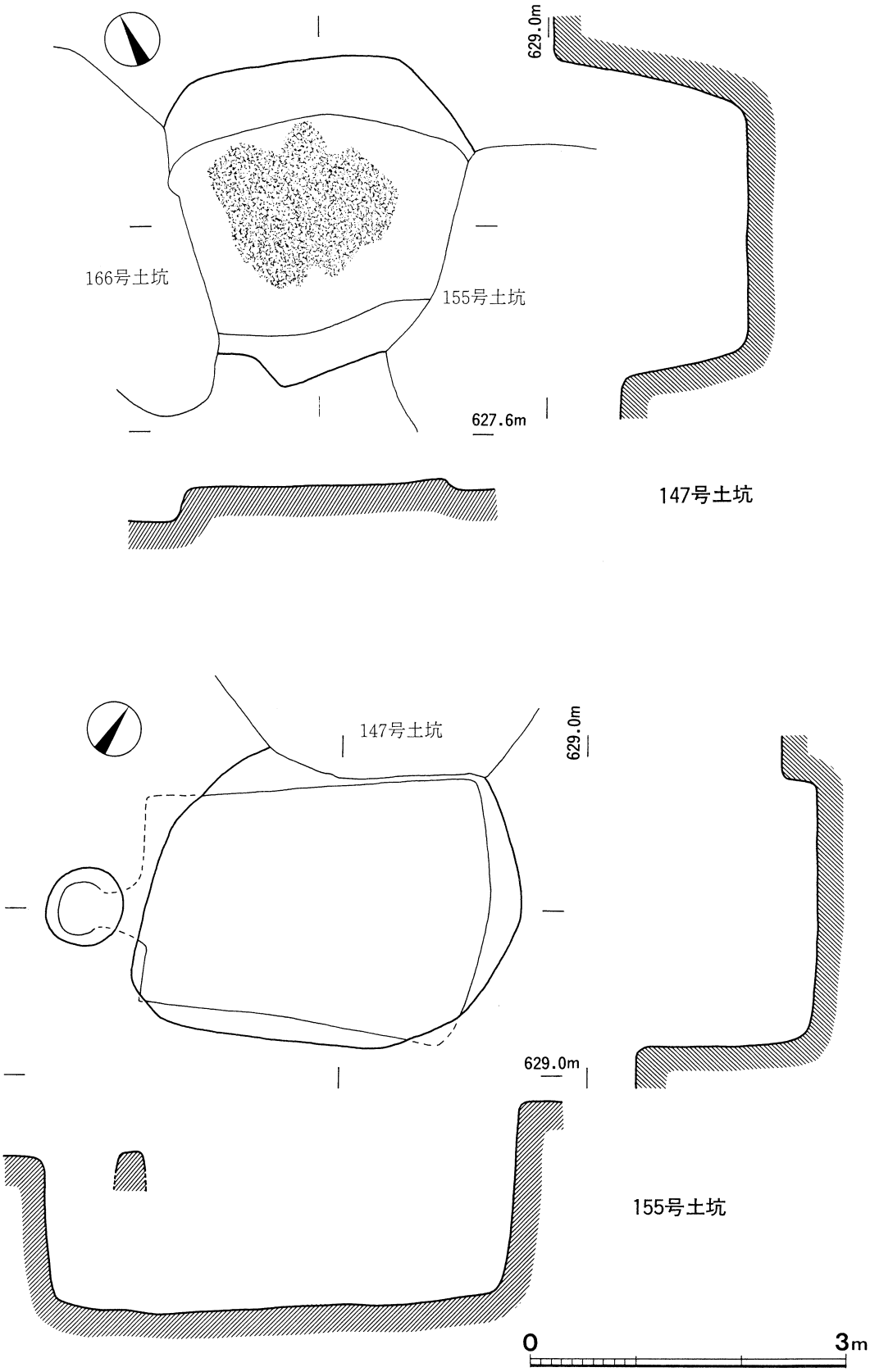



Fig. 41　地下式坑（147号・155号）S＝1/60

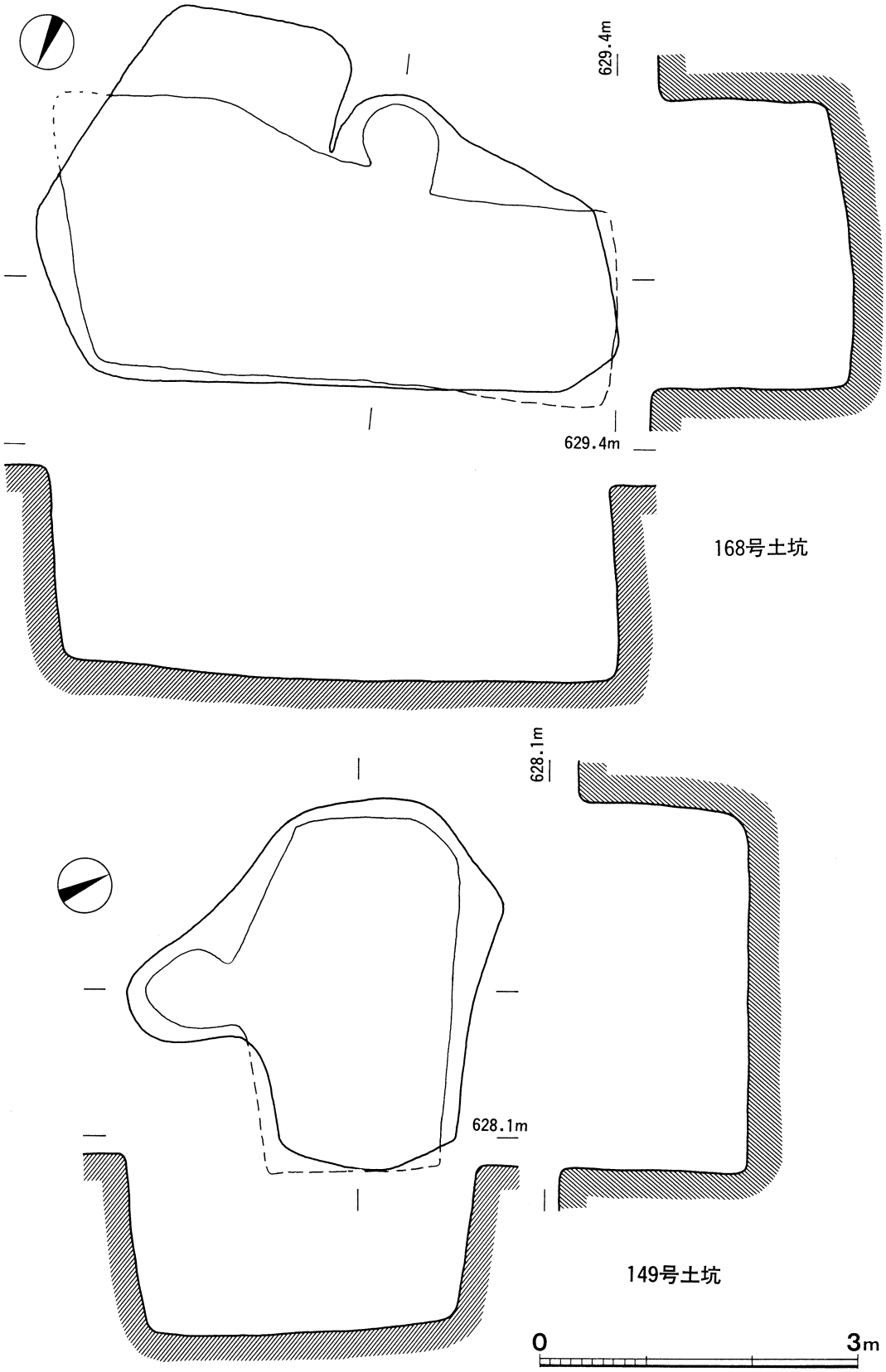



Fig. 42　地下式坑（168号・149号）S＝1/60

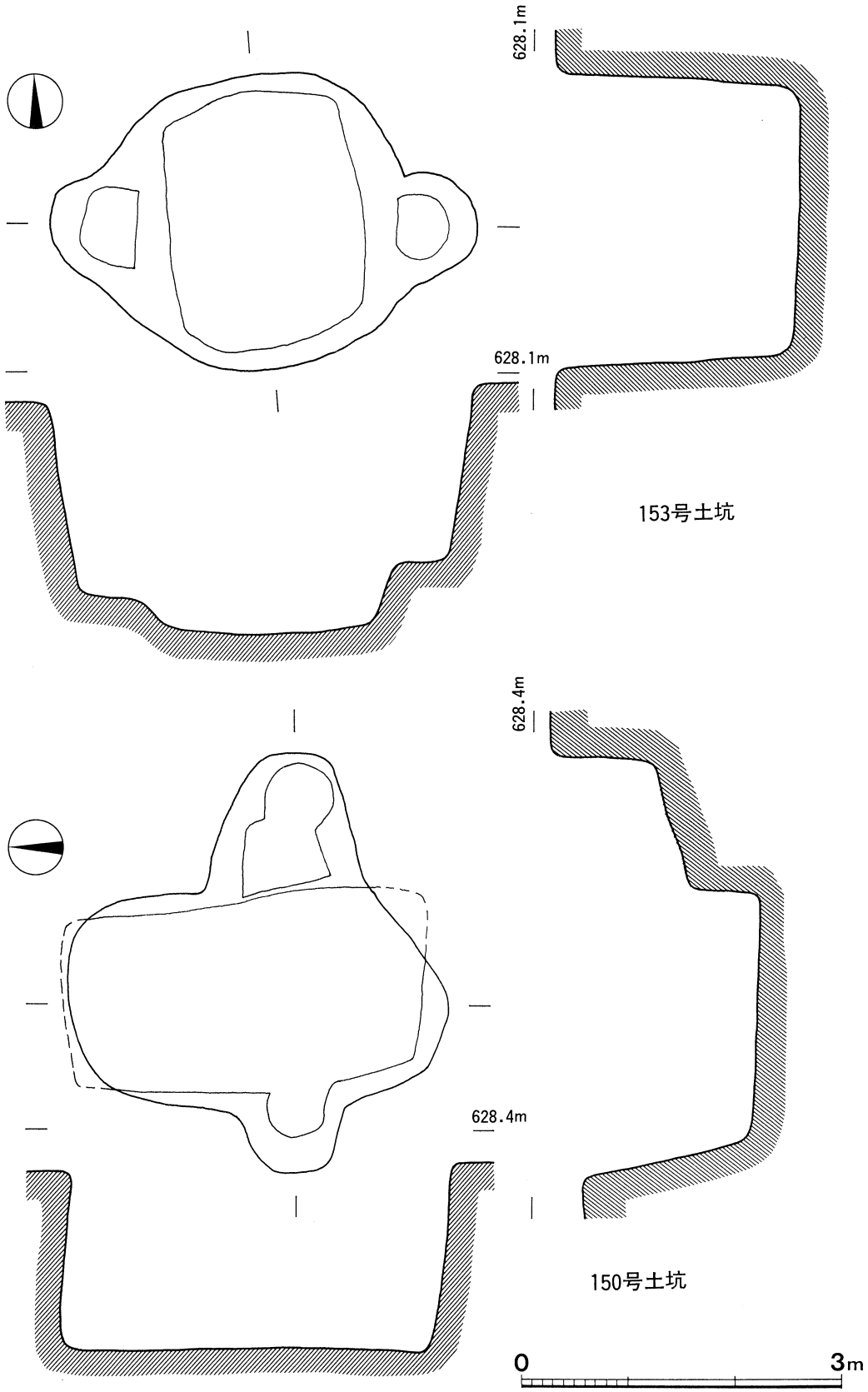



Fig. 43　地下式坑（153号・150号）S＝1/60

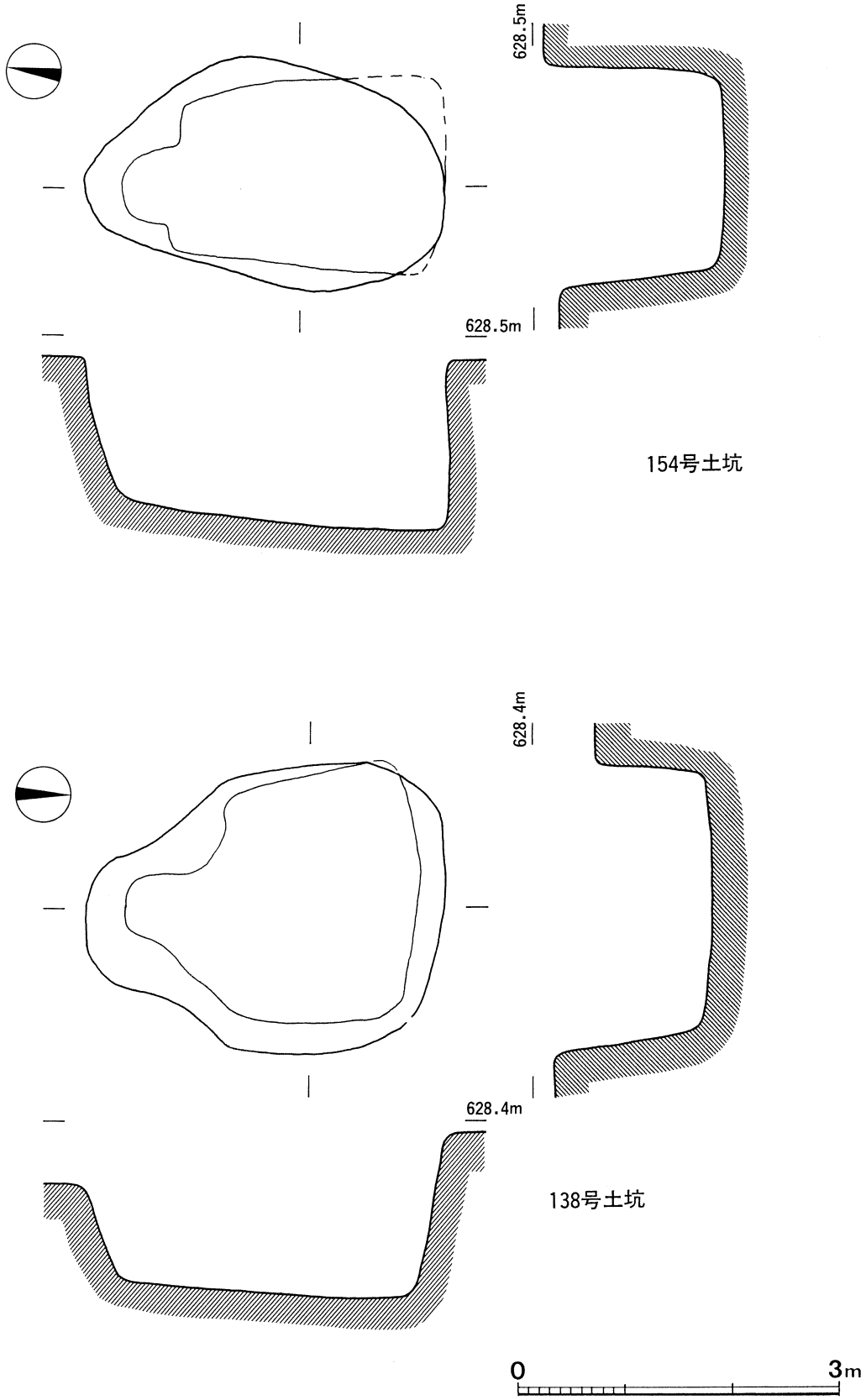



Fig. 44　地下式坑（154号・138号）S＝1/60

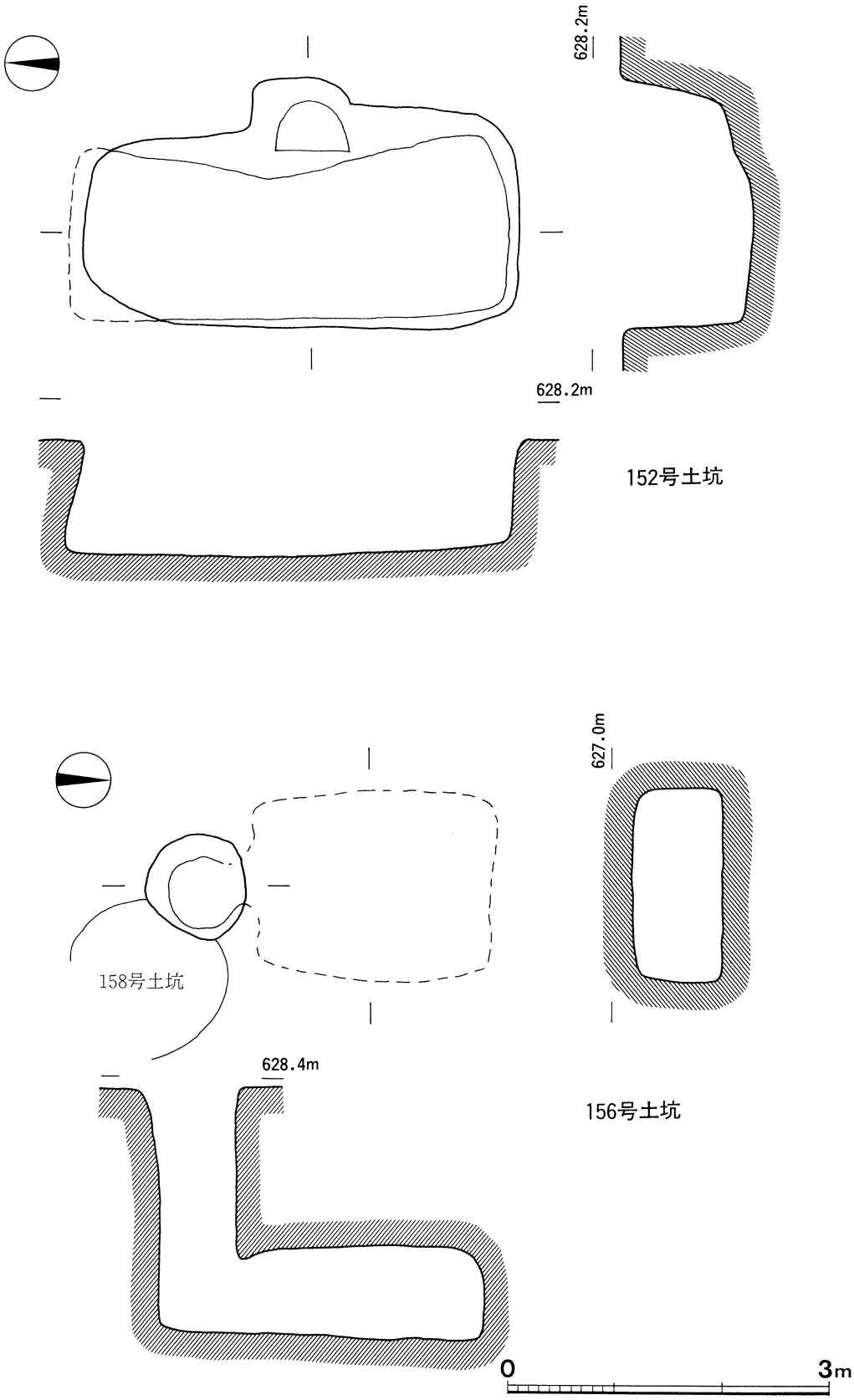



Fig. 45　地下式坑（152号・156号）S＝1/60

**25号土坑**（Fig.46, PL.29）

113号土坑と重複するが、先後関係は不明である。

主軸：不明

形態：不整形を呈する。深さ40cm。

出土遺物：古銭３点（皇宋通□１、不明２）。

**53号土坑**（Fig.46, PL.30）

主軸：北北西－南南東

形態：楕円形を呈する。長径66cm、短径45cm。深さ20cm。

出土遺物：古銭３点（熙□元□１、□宋通□１、□祐□□１）。

**131号土坑**（Fig.46, PL.32）

主軸：北－南

形態：不整長方形。長辺72cm、短辺50cm。深さ20cm。

出土遺物：古銭７点（永楽通寳１、開元通寳１、皇□□□１、政□□□１、元祐通寳１、元豊通寳２）。

**８号土坑**（Fig.46, PL.29）

形態：円形。直径80cm。深さ45cm。

出土遺物：土師質土器２点（Fig.49－２，PL.35－３）。時期不明の土器２点。古銭５点（元□通寳１、紹聖元寳１、□楽□□１、祥符元寳１、開元通寳１）。

**68号土坑**（Fig.46, PL.31）

主軸：北－南

形態：不整長方形を呈する。長辺195cm、短辺70cm。深さ40cm。

出土遺物：黒曜石１点。骨が微弱な状態で発見された。ほとんど粉の様な状態になっていた。古銭３点（元□□□１、不明２）。

**41号土坑**（Fig.46, PL.30）

主軸：北－南

形態：長方形を呈する。長辺125cm、短辺80cm。深さ45cm。

出土遺物：土師器１点。時期不明の土器２点。古銭６点（元禧通寳１、□平元□１、□宋通□１、天聖元寳１、熙寧元□１、不明１）。

**66号土坑**（Fig.47, PL.31）

主軸：北－南

形態：長方形を呈する。長辺120cm、短辺80cm。深さ36cm。

出土遺物：土師器７点。土師質土器２点。時期不明の土器９点。古銭６点（元豊通寶１、洪武通寶１、皇宋通□１、元祐通寶１、永楽通寶１、不明１）。

**135号土坑**（Fig.47, PL.33）

主軸：北－南

形態：長楕円形を呈する。長径148cm、短径78cm。深さ32cm。

出土遺物：古銭７点（元□□寶１、□平元□２、永楽通寶１、不明３）。

**139号土坑**（Fig.47, PL.31）

主軸：北北西－南南東

形態：不整楕円形を呈する。長径58cm、短径46cm。深さ13cm。底部に礫を２個配する。

出土遺物：古銭１（祥符元□）。

**59号土坑**（Fig.47, PL.31）

36号土坑の地下室の上に位置する。地下室天井崩落によって59号土坑も東側が一部失われている。

主軸：東北東－西南西

形態：元来は長方形を呈していたと思われる。残存値は長辺130cm、短辺80cm。深さ25cm。

出土遺物：古銭１点（熙寧元寶）。

**70号土坑**（Fig.47, PL.32）

35号土坑の地下室の上に位置する。

主軸：北－南

形態：不整長方形。長辺110cm、短辺80cm。深さ40cm。

出土遺物：骨。微弱な状態で発見された。ほとんど粉の様な状態になっていた。古銭６点（大観通□１、開元通寶１、□祐元□１、元豊通寶１、不明２）。

**109号土坑**（Fig.47, PL.32）

主軸：北東－南西

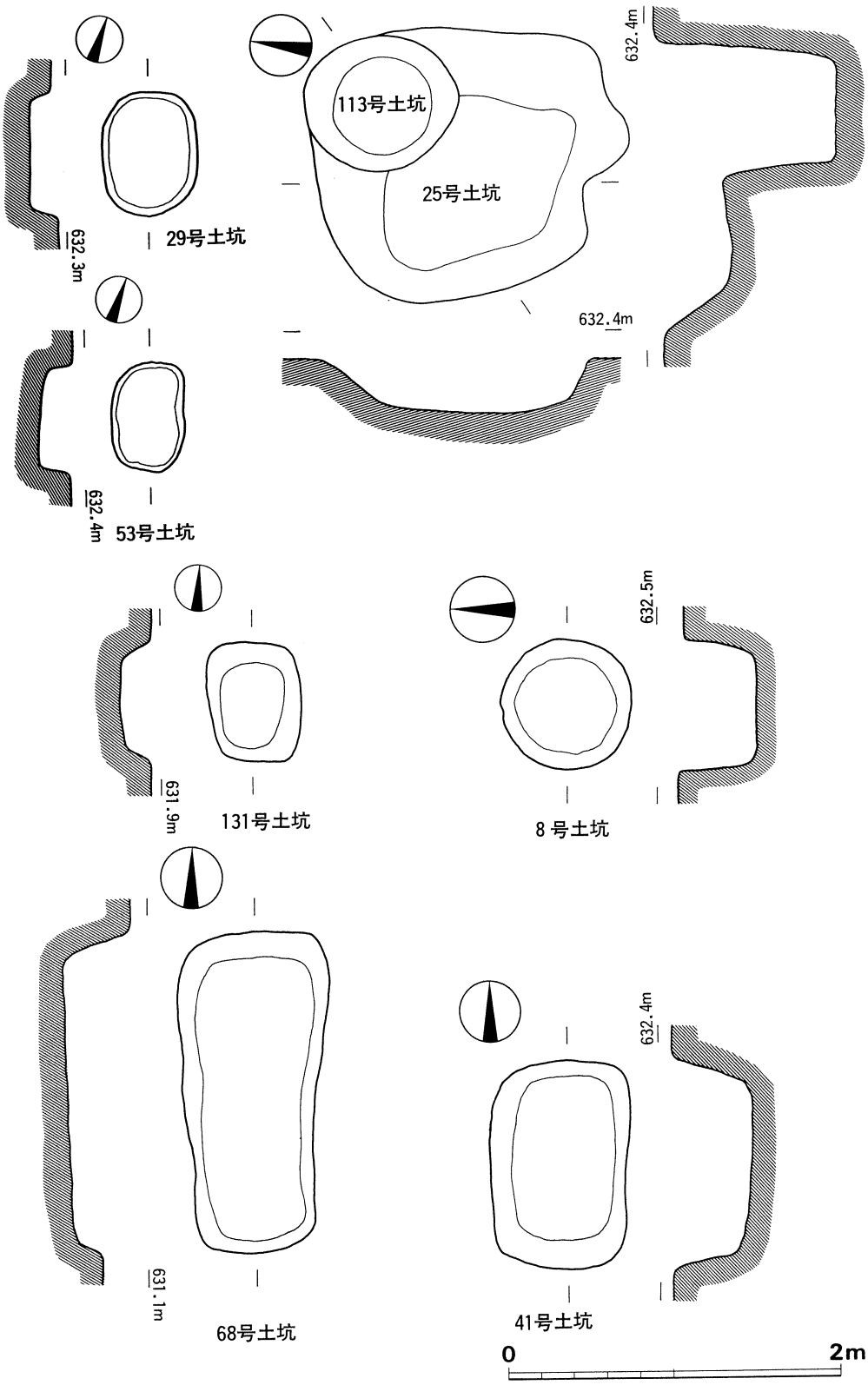

632.4m
113号土坑
25号土坑
632.4m
29号土坑
632.3m
632.4m
53号土坑
632.5m
631.9m
131号土坑
8 号土坑
632.4m
631.1m
68号土坑
41号土坑
0
2m

Fig. 46　土壙墓（1）

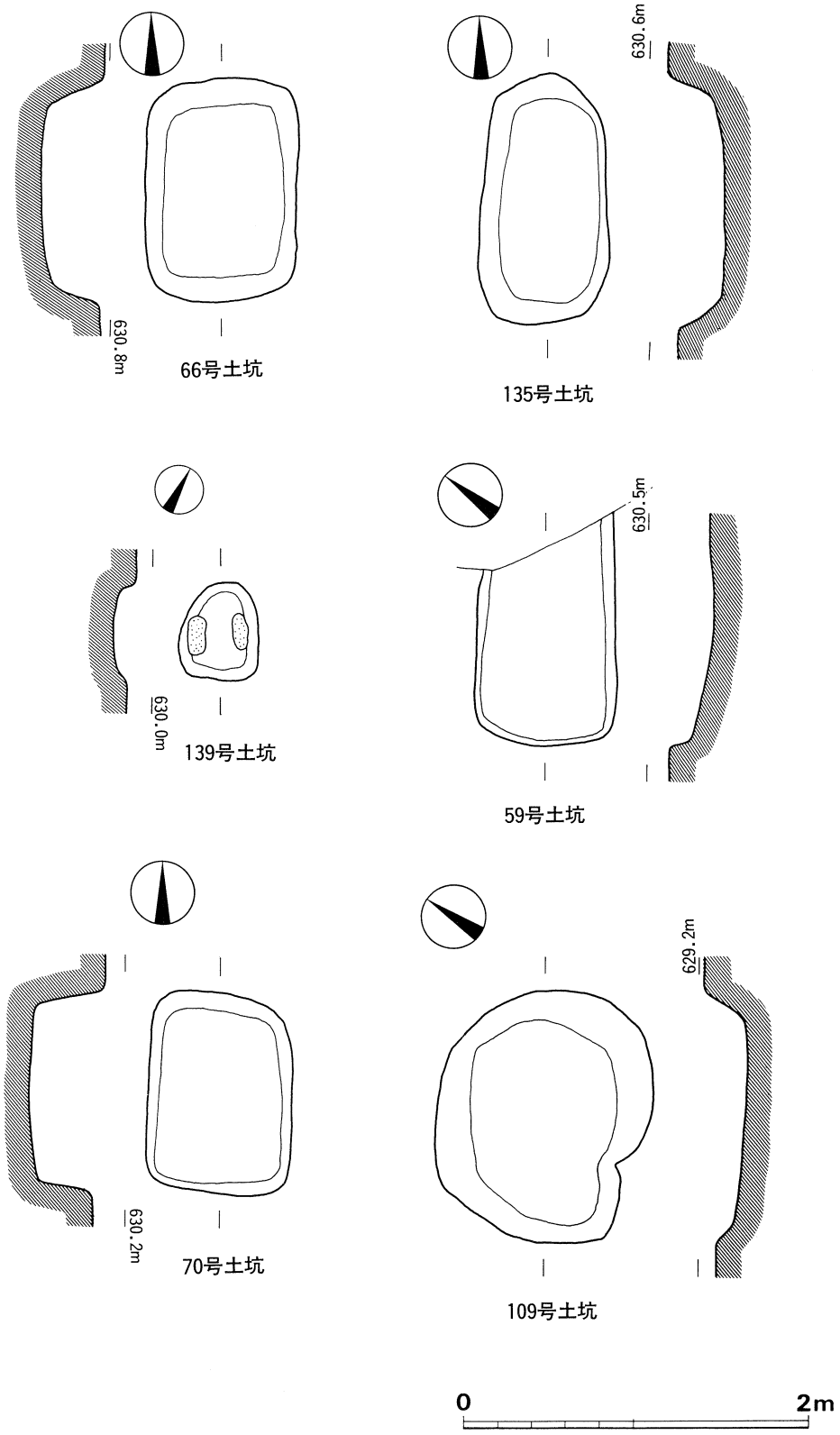

630.8m
66号土坑
630.6m
135号土坑
630.0m
139号土坑
630.5m
59号土坑
630.2m
70号土坑
629.2m
109号土坑
0
2m

Fig. 47　土壙墓（2）

形態：不整楕円形。長径148cm、短径125cm。深さ25cm。

出土遺物：古銭４点（元豊□□１、元□通寶１、景徳元寶１、永楽通寶１）。

### 第３項　土坑

中世の土坑と考えるものは、48号土坑と57号土坑である。その他多くの土坑（小さい柱穴状のものを含む）は時期を決定するにたる出土遺物に乏しい。

**48号土坑**（Fig.55, PL.33）

平面形は、ほぼ円形を呈する。直径は110cm。深さは47cm。遺物は、土師質土器の皿(Fig.50－16, PL.35－１）が１点出土した。

**57号土坑**（Fig.56）

平面形は、円形を呈する。直径は44cm。深さは55cm。遺物は、土師質土器（Fig.50－17）１点と木炭が出土した。

### 第４項　埋設土器（Fig.48・49－１，PL.12）

Ｄ－４グリッドを精査しているときに発見した。土器の胴部上半が、欠損した状態であった。割れ口が新しかったので、表土剝ぎの時に欠損したと思われる。確認面からの掘り込みは明確には判断できなかった。土器の内部には礫が入っていた。また、土器底部は当初からなかった。周囲を精査したが、埋設土器に伴う施設はなかったので単独のものと考える。

土器は中世の内耳土器で、残存する器高は11.4cm、胴部最大径は28.1cmである。残存部分が少なく、内耳土器の器形の特徴が把握できないので、正確な土器の年代等は不明である。

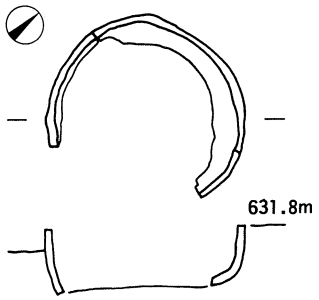


Fig. 48　埋設土器

### 第５項　土器・土製品・陶磁器

土師質土器、内耳土器、馬形土製品、中国製白磁、青磁などが出土した。以下、これらの概要を記す（Fig.49－２～14, Fig.50－15～20, PL.35・38)。

２：土師質土器小皿（PL.35－３)。８号土坑（土壙墓）出土。器面の内外面ともにナデ調整。

３：土師質土器小皿。表土層出土。器面の内外面ともにナデ調整。底部には、回転糸切痕がわずかに残る。底部はうすく、器体部の中央部で内外面ともにわずかに膨らむ。小淵沢町・笹尾墨跡の小皿と類似する。15世紀のものと思われる。

４：白磁皿（小形の高台付皿）（PL.35－４)。149号土坑（地下式坑）地下室の床から17cm浮いた状態で出土した。十分に焼成されず黄色味をおびている。高台は４個所あり、弧状にえぐりこ

みがはいっている。15世紀のものと思われる。

5：土師質土器小皿。6号土坑（地下式坑）出土。器面の内外面ともにナデ調整。底部には、回転糸切痕がある。また、底部は中央部にいくにつれて器厚が薄くなる。

6：土師質土器小皿。52号土坑（地下式坑）出土。内外面ともにナデ調整。底部には、回転糸切痕がある。

7：土師質土器小皿。52号土坑（地下式坑）出土。内外面はナデ調整。底部には、回転糸切痕がある。

8：土師質土器皿。表土層出土。内外面はナデ調整。底部には、回転糸切痕がある。

9：土師質土器皿。150号土坑（地下式坑）地下室床面直上から出土。内外面はナデ調整。底部は中央部にいくにつれて器厚が薄くなる。

10：土師質土器皿。60号土坑（地下式坑）出土。内外面はナデ調整。底部には、わずかに回転糸切痕がみえる。

11：土師質土器皿。6号土坑（地下式坑）出土。内外面はナデ調整。厚みのある土器であるが底部は器厚が中心に向かってうすくなる。

12：土師質土器皿。35号土坑（地下式坑）出土。内外面はナデ調整。底部には、回転糸切痕がある。大きい土器で、口径21.5cm、底径12cm。器厚もあつく、器体部では、6.5mm、底部では、9mmである。

13：青磁碗（PL.35－7）。31号土坑出土。釉は灰緑色。内底面の釉には貫入がみられる。外面は、一部高台内面まで及ぶが、削りとることはしていない。器形は、残存部が少ないので多くは不明だが、底部が厚く高台の低い、腰のはる、又は、丸い碗と思われる。14世紀末から15世紀初頭に位置ずけられると思う（上田1982）。ただし、舶載品は伝世することがあるので、これをもって、遺構の時期を決めるには注意を要する。

14：内耳土器（PL.35－5・6）。35号土坑（地下式坑）出土。器壁は、底部からほぼ直線的であり、口縁部で少し内屈する。残存する器高は、15.5cm。表面にはススが付着している。茅野市・御社宮司遺跡の内耳土器分類（小林1982）におけるⅣ期（16～17世紀）に相当する。

15：土師質土器小皿（PL.35－2）。43号土坑（地下式坑）出土。内外面はナデ調整。底部には、回転糸切痕がある。他の小皿に比べて厚みがある。

16：土師質土器皿（PL.35－1）。48号土坑の確認面出土。内外面はナデ調整。底部には、回転糸切痕がある。

17：土師質土器皿。57号土坑出土。器体部内外面はナデ調整。底部には、回転糸切痕がある。

18：内耳土器（PL.34－5）。61号土坑（地下式坑）出土。器壁はほぼ直立に底部から立上り、胴部上半で一旦くびれ再び直線的に口縁部にいたる。器高は15.8cm。土器の表面にはススが付着している。御社宮司Ⅳ期（16～17世紀）に相当すると思われる。

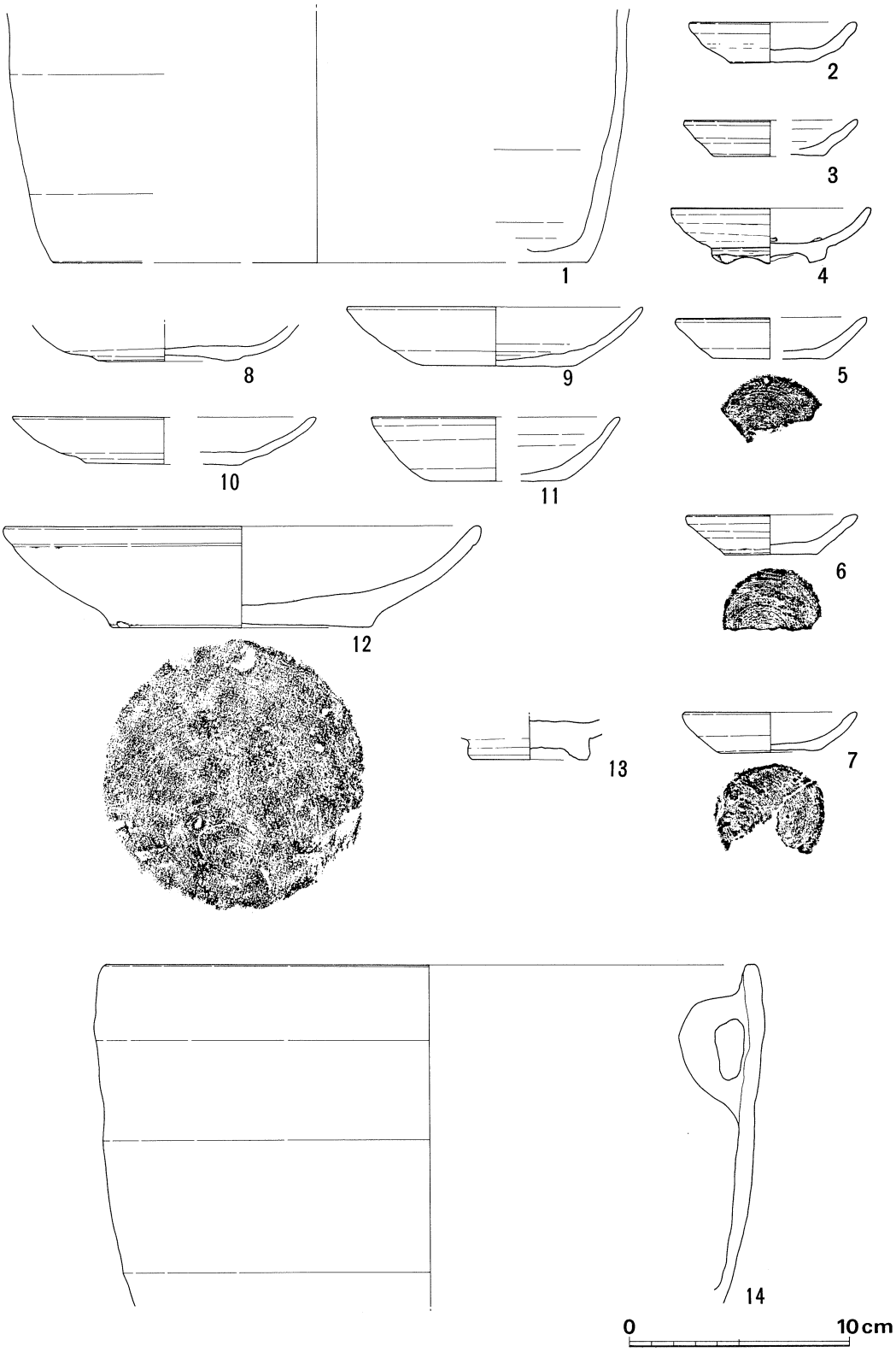



Fig. 49　中世の土器・陶磁器

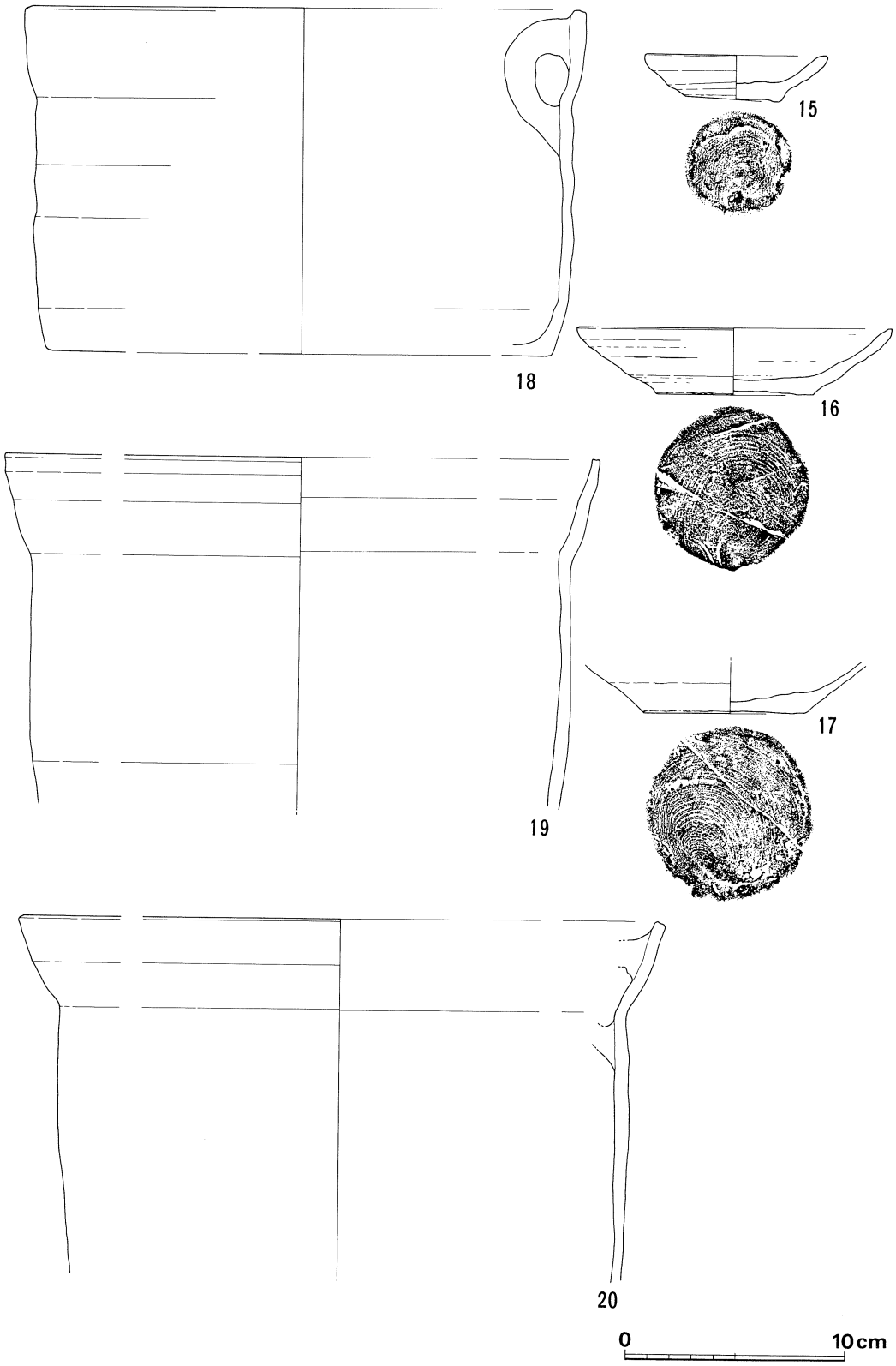



Fig. 50　中世の土器

19：内耳土器（PL.34－4）。46号土坑（地下式坑）出土。器壁はほぼ直立に底部から立上り、口縁部で「く」の字状に外反する。現存する器高は15.9cm。土器の表面にはススが付着している。御社宮司Ⅰ期（15世紀）に相当する。

20：内耳土器（PL.34－3）。3号土坑（地下式坑）出土。器形は41と同様である。現存する器高は16.4cm。御社宮司Ⅰ期（15世紀）に相当する。

PL.34－1：内耳土器。35号土坑出土。口縁部破片。

PL.34－2：内耳土器。64号土坑出土。口縁部及び底部付近の破片。

PL.35－8：白磁。42号土坑出土。小破片なので詳細は不明だが、16～17世紀のものと思われる。

PL.38－6：馬形土製品。表土層出土。頭部、脚部などを欠くが、背に鞍が乗っている様がはっきりわかる。現存値、長さ6.6cm。

以上中世の土器等についてその概要を述べたが、土器の時期については言及していないものもある。年代の明らかな陶磁器類と共伴関係をもたないので時期決定するには困難を伴うが、概ね15世紀に属するのではないかと考えている。

### 第6項　石器・石製品

中世に属する石器・石製品は18点である。その内訳は、砥石4点（流紋岩4）、石臼11点（安山岩11）、ひで鉢2点（安山岩2）、五輪塔1点（安山岩）である。主なものを、Fig.19・20とPL.37・38に示したので、これらについて若干の説明を加えたい。

10：砥石（PL.37－10）。84号土坑出土。石質；流紋岩。重さ92g。砥面は、実測図の正面、左・右側面にある。

11：砥石（PL.37－11）。表採。石質；流紋岩。重さ114g。砥面は、実測図の正面、右側面、裏面にある。

12：砥石（PL.37－12）。表採。石質；流紋岩。重さ75g。鰹節状の形態をする。表面は、滑らかな砥面だが、両側面は粗研ぎ面である。

13：砥石（PL.37－13）。表採。石質；流紋岩。重さ68g。鰹節状の形態をする。表面と裏面は滑らかな砥面で、両側面は粗研ぎ面である。

14：石臼（下石）（PL.38－3）。17号土坑出土。石質；安山岩。重さ7,250g。半欠している。石臼の目は、主溝が8本であると思われるが、副溝は一定せず現存部分には8～12本みられる。

15：石臼（上石）（PL.37－17）。表採。石質；安山岩。重さ4,500g。石臼の目は、主溝が8本だが、副溝の正確な数は、破損部分が広いので不明である。

16：石臼（上石）（PL.38－4）。表採。石質；安山岩。重さ6,000g。

17：石臼（上石）（PL.38－2）。表採。石質；安山岩。重さ2,920g。

18：ひで鉢（PL.37－16）。表採。石質；安山岩。重さ4,080g。

19：ひで鉢（PL.38－1）。61号土坑の地下室床面出土。石質；安山岩。欠損品だが現存する重さは2,880g。丸い自然石をくりぬいた様なものである。

20：五輪塔（空風輪）（PL.37－15）。表採。石質；安山岩。重さ3,500g。

以上、実測図で示したものの他に、写真で示した資料（PL.38－5）について説明する。

PL.38－5：石臼（下石）の破片。52号土坑と64号土坑出土のものが接合している。石質；安山岩直径35cm。

**第7項　古銭**（Fig.51・52・53, PL.36）

古銭の出土総数は84点である。内訳は、地下式坑出土9点、土壙墓出土61点、1号住居址覆土から1点、遺構外13点。これらの種類や、遺構ごとの数などは、該当する遺構の説明のなかで述べているので、本項では割愛したい。ここでは、84点中、52点を図示した。これらの概要については、Tab.1・2を参照していただきたい。

## 第6節　時期不明の遺構

多数の所謂ピット及び102基の土坑が時期不明の遺構とされるものである。ピットに関しては、建物跡等のものか否か判断がつかなかった。ピットについては遺構全体図にてその位置を示すに止めた。土坑は、102基のうち89基を個別に図示した。土坑の概要については、Tab.3・4・5を参照していただきたい。

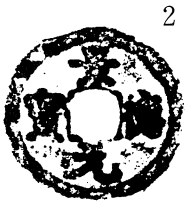
| 番号 | 名　　称 | 鋳造年 | 出土地点 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 治平元□ | 1064 | 46土坑 | |
| 2 | 景徳元□ | 1044 | 46土坑 | 地下室埋土の上層出土 |
| 3 | 洪武通寶 | 1580 | 46土坑 | 地下室埋土の上層出土 |
| 4 | 元豊通寶 | 1078 | 46土坑 | 地下室埋土の上層出土 |
| 5 | 洪武通寶 | 1368 | 46土坑 | |
| 6 | 皇宋通□ | 1039 | 25土坑 | |
| 7 | 天禧通寶 | 1017 | 41土坑 | 底部出土 |
| 8 | □平元□ | 1064 | 41土坑 | 底部出土 |
| 9 | □宋通□ | 1039 | 41土坑 | 底部出土 |
| 10 | 熙寧元□ | 1068 | 41土坑 | 底部出土 |
| 11 | 天聖元寶 | 1023 | 41土坑 | 底部出土 |
| 12 | 熙□元□ | 1068 | 53土坑 | |
| 13 | □祐□□ | | 53土坑 | |
| 14 | 熙寧元寶 | 1068 | 59土坑 | |
| 15 | 元豊通寶 | 1078 | 66土坑 | |
| 16 | 洪武通寶 | 1368 | 66土坑 | |
| 17 | 皇宋通□ | 1039 | 66土坑 | |
| 18 | 元祐通寶 | 1086 | 66土坑 | |
| 19 | 永楽通寶 | 1408 | 66土坑 | |
| 20 | 元□□□ | 1086 | 68土坑 | |
| 21 | 大観通□ | 1107 | 70土坑 | |
| 22 | 開元通寶 | 621 | 70土坑 | |
| 23 | □祐元□ | | 70土坑 | |
| 24 | 元豊通寶 | 1078 | 70土坑 | |
| 25 | 元豊□□ | 1078 | 109土坑 | |
| 26 | 元□通寶 | 1086 | 109土坑 | |
| 27 | 景徳元寶 | 1044 | 109土坑 | |
| 28 | 永楽通寶 | 1408 | 109土坑 | |
| 29 | 永楽通寶 | 1408 | 113土坑 | |
| 30 | 大中通寶 | 1361 | 113土坑 | |
| 31 | 永□通寶 | 1408 | 113土坑 | |
| 32 | 景定元寶 | 1260 | 113土坑 | |

Tab. 1　古銭（1）

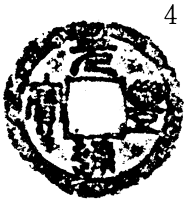
| 番号 | 名　　称 | 鋳造年 | 出土地点 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|
| 33 | 永楽通寶 | 1408 | 131土坑 | |
| 34 | 開元通寶 | 621 | 131土坑 | |
| 35 | 元豊□□ | 1078 | 131土坑 | |
| 36 | 皇□□□ | | 131土坑 | |
| 37 | 元祐通寶 | 1086 | 131土坑 | |
| 38 | 元豊通寶 | 1078 | 131土坑 | |
| 39 | 元□□寶 | 1086 | 135土坑 | |
| 40 | □平元□ | 1064 | 135土坑 | |
| 41 | □平元□ | 1064 | 135土坑 | |
| 42 | 永楽通寶 | 1408 | 135土坑 | |
| 43 | 祥符元□ | 1008 | 139土坑 | |
| 44 | 紹聖元寶 | 1094 | 8土坑 | |
| 45 | 開元通寶 | 621 | 8土坑 | |
| 46 | □祐通□ | 1056 | F-8grid | |
| 47 | 乾元重□ | 759 | F-8grid | |
| 48 | □□元寶 | 1068 | F-8grid | |
| 49 | 熙寧元□ | 1068 | F-8grid | |
| 50 | 元豊通寶 | 1078 | 表採 | |
| 51 | 開元通寶 | 621 | 表採 | |
| 52 | 菊5銭白銅貨 | | 表土 | 緑青著しく年号不明 |

Tab. 2　古銭（2）

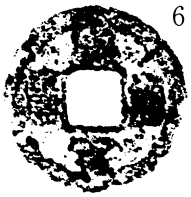
1
治平元□


2
景德元□

3
洪武通寶

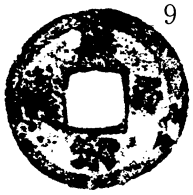

4
元豐通寶

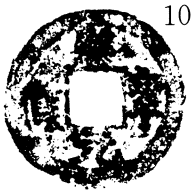
5
洪武通寶

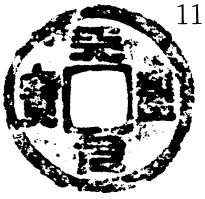

6
皇宋通□

7
天禧通寶

8
□平元□

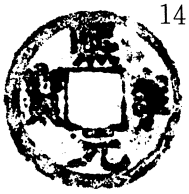

9
□宋通□

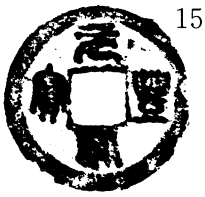

10
熙寧元□


11
天聖元寶

12
熙□元□

13
□祐□□


14
熙寧元寶


15
元豐通寶

16
洪武通寶

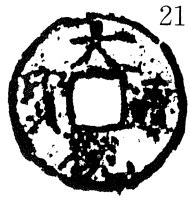
17
皇宋通□

18
元祐通寶

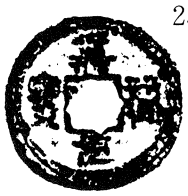
19
永樂通寶

20
元□□□

Fig. 51　古銭（1）S＝1/1


21
大観通□

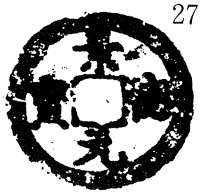
22
開元通寶

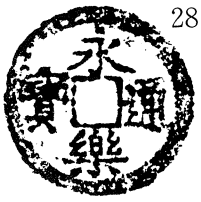

23
□祐元□

24
元豊通寶

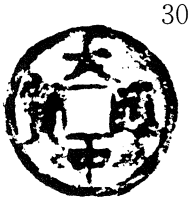
25
元豊□□

26
元□通寶

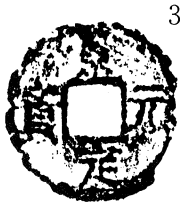

27
景徳元寶


28
永楽通寶

29
永楽通寶

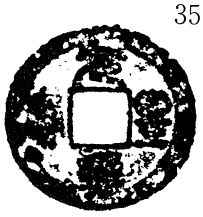

30
大中通寶

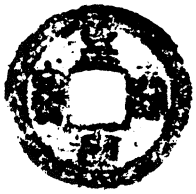
31
永□通寶


32
景定元寶

33
永楽通寶

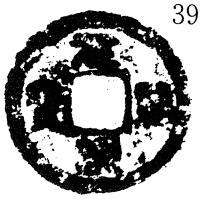
34
開元通寶


35
元豊□□


36
皇□□□

37
元祐通寶

38
元豊通寶


39
元□□寶

40
□平元□

Fig. 52　古銭（2）S＝1/1

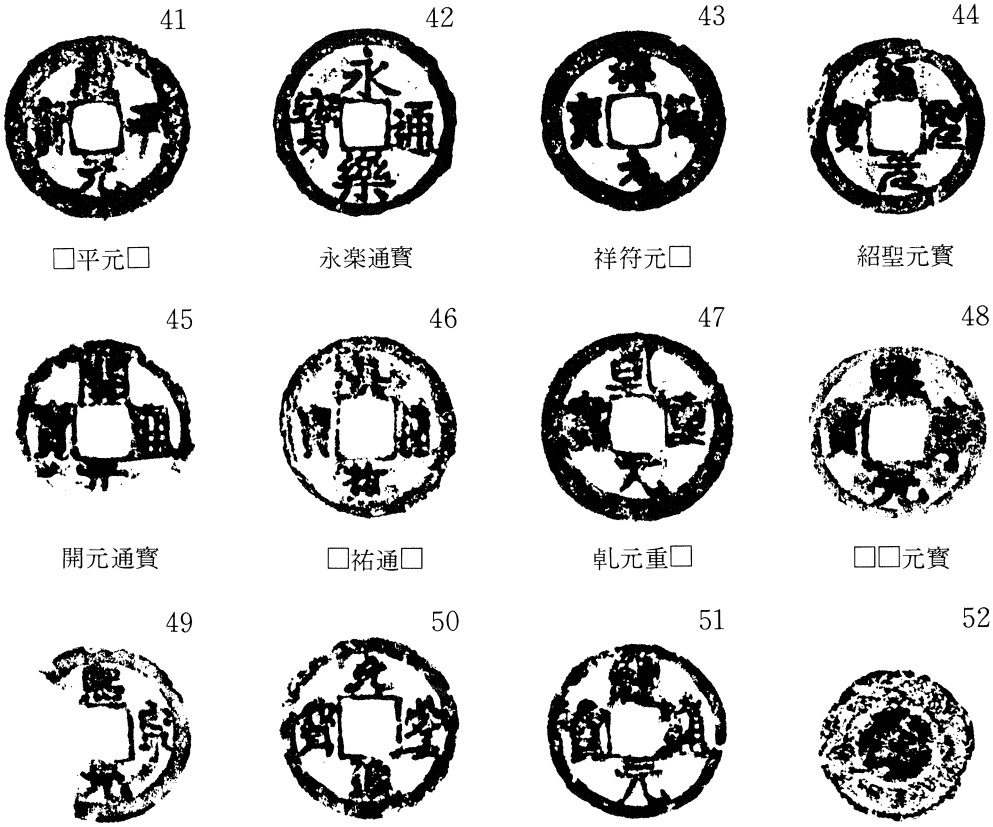



Fig. 53　古銭（３）S＝1/1

| 番号 | 形　態 | 規　　模 | | | 出土遺物 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 10 | 略　　円 | 直径147 | | 深さ80 | | |
| 12 | 楕　　円 | 長径114 | 短径94 | 深さ58 | | |
| 13 | 方　　形 | 長辺128 | 短辺100 | 深さ52 | | |
| 14 | 略　　円 | 直径160 | | 深さ57 | | |
| 15 | 円 | 直径115 | | 深さ23 | | |
| 16 | 楕　　円 | 長径168 | 短径130 | 深さ55 | | |
| 19 | 略　　円 | 直径136 | | 深さ87 | 縄文土器片 | |
| 20 | 略　　円 | 直径115 | | 深さ43 | | |
| 21 | 方　　形 | 長辺96 | 短辺74 | 深さ80 | | |
| 22 | 略　　円 | 直径117 | | 深さ32 | | |
| 23 | 方　　形 | 長辺80 | 短辺60 | 深さ21 | | |
| 24 | 隅円方形 | 長辺124 | 短辺96 | 深さ19 | | |
| 27 | 不整方形 | 長辺170 | 短辺150 | 深さ50 | | |
| 28 | 不整方形 | 長辺187 | 短辺153 | 深さ45 | | |
| 30 | 楕　　円 | 長径90 | 短径56 | 深さ22 | | |
| 31 | 隅円方形 | 長辺73 | 短辺54 | 深さ20 | | |
| 32 | 楕　　円 | 長径86 | 短径62 | 深さ17 | | |
| 33 | 円 | 直径25 | | 深さ24 | | |
| 34 | 楕　　円 | 長径90 | 短径61 | 深さ55 | | |
| 37 | 略　　円 | 直径72 | | 深さ70 | | |
| 40 | 楕　　円 | 長径85 | 短径70 | 深さ34 | | |
| 42 | 楕　　円 | 長径60 | 短径46 | 深さ15 | | |
| 50 | 不整方形 | 長辺200 | 短辺135 | 深さ95 | | |
| 51 | 円 | 直径94 | | 深さ32 | | |
| 54 | 略　　円 | 直径83 | | 深さ15 | | |
| 55 | 楕　　円 | 長径134 | 短径100 | 深さ25 | | |
| 56 | 不 整 形 | 長径160 | 短径115 | 深さ35 | | |
| 58 | 方　　形 | 長辺150 | 短辺84 | 深さ37 | | |
| 62 | 略　　円 | 直径30 | | 深さ29 | 炭化種子（モモ） | |
| 63 | 方　　形 | 長辺140 | 短辺103 | 深さ27 | | |
| 67 | 略　　円 | 直径120 | | 深さ55 | | |
| 71 | 不整円形 | 直径115 | | 深さ20 | | |
| 72 | 略　　円 | 直径104 | | 深さ22 | | |
| 73 | 楕　　円 | 長径114 | 短径81 | 深さ51 | | |

Tab. 3　土坑表（1）　　（単位 cm）

| 番号 | 形　態 | 規　　模 | | | 出土遺物 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 74 | 方　　形 | 長辺96 | 短辺77 | 深さ23 | | |
| 75 | 楕　　円 | 長径95 | 短径78 | 深さ38 | | |
| 76 | 略　　円 | 直径102 | | 深さ36 | 土器片 | |
| 77 | 不整方形 | 長辺110 | 短辺60 | 深さ24 | | |
| 78 | 不整方形 | 長辺90 | 短辺78 | 深さ33 | | |
| 79 | 方　　形 | 長辺80 | 短辺60 | 深さ28 | | |
| 80 | 不整方形 | 長辺99 | 短辺87 | 深さ31 | | |
| 81 | 方　　形 | 長辺105 | 短辺88 | 深さ56 | | |
| 82 | 略　　円 | 直径89 | | 深さ35 | | |
| 83 | 方　　形 | 長辺100 | 短辺66 | 深さ13 | | |
| 84 | 円 | 直径24 | | 深さ17 | 砥石 | |
| 85 | 円 | 直径33 | | 深さ51 | 土器片 | |
| 89 | 隅円方形 | 長辺88 | 短辺66 | 深さ49 | | |
| 90 | 略　　円 | 直径121 | | 深さ59 | | |
| 92 | 略　　円 | 長径95 | 短径91 | 深さ46 | | |
| 94 | 不整円形 | 直径117 | | 深さ22 | | |
| 95 | 方　　形 | 長辺85 | 短辺65 | 深さ11 | 土器片 | |
| 96 | 円 | 直径26 | | 深さ38 | 土器片 | |
| 97 | 円 | 直径24 | | 深さ20 | 土器片 | |
| 98 | 円 | 直径32 | | 深さ42 | フレイク | |
| 99 | 方　　形 | 長辺160 | 短辺120 | 深さ38 | 土器片 | |
| 100 | 略　　円 | 長径70 | 短径60 | 深さ34 | | |
| 101 | 方　　形 | 長辺206 | 短辺130 | 深さ19 | | |
| 102 | 不　　明 | | | 深さ5 | | 65号土坑と重複 |
| 103 | 楕　　円 | 長径86 | 短径58 | 深さ40 | | |
| 104 | 楕　　円 | 長径102 | 短径75 | 深さ37 | | |
| 105 | 隅円方形 | 長辺96 | 短辺73 | 深さ45 | | |
| 108 | 円 | 直径25 | | 深さ37 | フレイク | |
| 110 | 略　　円 | 直径20 | | 深さ14 | 土器片 | |
| 111 | 方　　形 | 長辺92 | 短辺63 | 深さ29 | | |
| 114 | 略　　円 | 直径120 | | 深さ33 | | |
| 116 | 略　　円 | 直径230 | | 深さ99 | | |
| 118 | 不　　明 | | | 深さ23 | | |
| 119 | 略　　円 | 直径76 | | 深さ48 | | |

Tab. 4　土坑表（2）　　（単位 cm）

| 番号 | 形　態 | 規　　模 | | | 出土遺物 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 120 | 不整円形 | 直径73 | | 深さ52 | | |
| 121 | 不　　明 | | | 深さ50 | 土器片 | |
| 122 | 方　　形 | 長径92 | 短径60 | 深さ33 | | |
| 123 | 円　　形 | 直径47 | | 深さ44 | 土器片 | |
| 125 | 不　　明 | | | 深さ12 | | 126号土坑と重複 |
| 126 | 不　　明 | | | 深さ10 | | 125号土坑と重複 |
| 127 | 不 整 形 | 長径90 | 短径70 | 深さ38 | | |
| 128 | 円 | 直径72 | | 深さ10 | | |
| 129 | 不整円形 | 長径125 | 短径81 | 深さ34 | | 1号住居址内 |
| 130 | 不整方形 | 長辺120 | 短辺100 | 深さ21 | | |
| 132 | 略　　円 | 直径30 | | 深さ43 | 土器片、炭 | |
| 133 | 略　　円 | 直径170 | | 深さ85 | | |
| 134 | 略　　円 | 直径157 | | 深さ44 | | |
| 136 | 方　　形 | 長辺55 | 短辺48 | 深さ17 | | |
| 137 | 不　　明 | | | 深さ49 | 土器片 | |
| 140 | 略　　円 | 直径170 | | 深さ44 | | |
| 141 | 楕　　円 | 長径125 | 短径100 | 深さ29 | | |
| 142 | 方　　形 | 長辺132 | 短辺110 | 深さ48 | | |
| 143 | 略　　円 | 直径134 | | 深さ33 | | |
| 144 | 略　　円 | 直径246 | | 深さ40 | | |
| 145 | 不整方形 | 長辺365 | 短辺125 | 深さ57 | | |
| 146 | 不　　明 | | | 深さ8 | | |
| 151 | 方　　形 | 長辺94 | 短辺70 | 深さ25 | 土器片 | |
| 157 | 方　　形 | 長辺80 | 短辺64 | 深さ74 | | |
| 158 | 略　　円 | 直径148 | | 深さ40 | 土器片 | |
| 159 | 方　　形 | 長辺228 | 短辺190 | 深さ105 | 木炭 | |
| 160 | 楕　　円 | 長径60 | 短径45 | 深さ33 | 土器片 | |
| 161 | 方　　形 | 長辺110 | 短辺90 | 深さ28 | | |
| 162 | 楕　　円 | 長径92 | 短径64 | 深さ14 | | |
| 163 | 不 整 形 | 長径88 | 短径80 | 深さ22 | | |
| 164 | 不整方形 | 長辺162 | 短辺115 | 深さ37 | | |
| 165 | 略　　円 | 直径92 | | 深さ44 | | |
| 167 | 方　　形 | 長辺116 | 短辺74 | 深さ22 | | |
| 170 | 不整方形 | 長辺50 | 短辺48 | 深さ27 | 土器片 | |

Tab. 5　土坑表（3）　　（単位 cm）

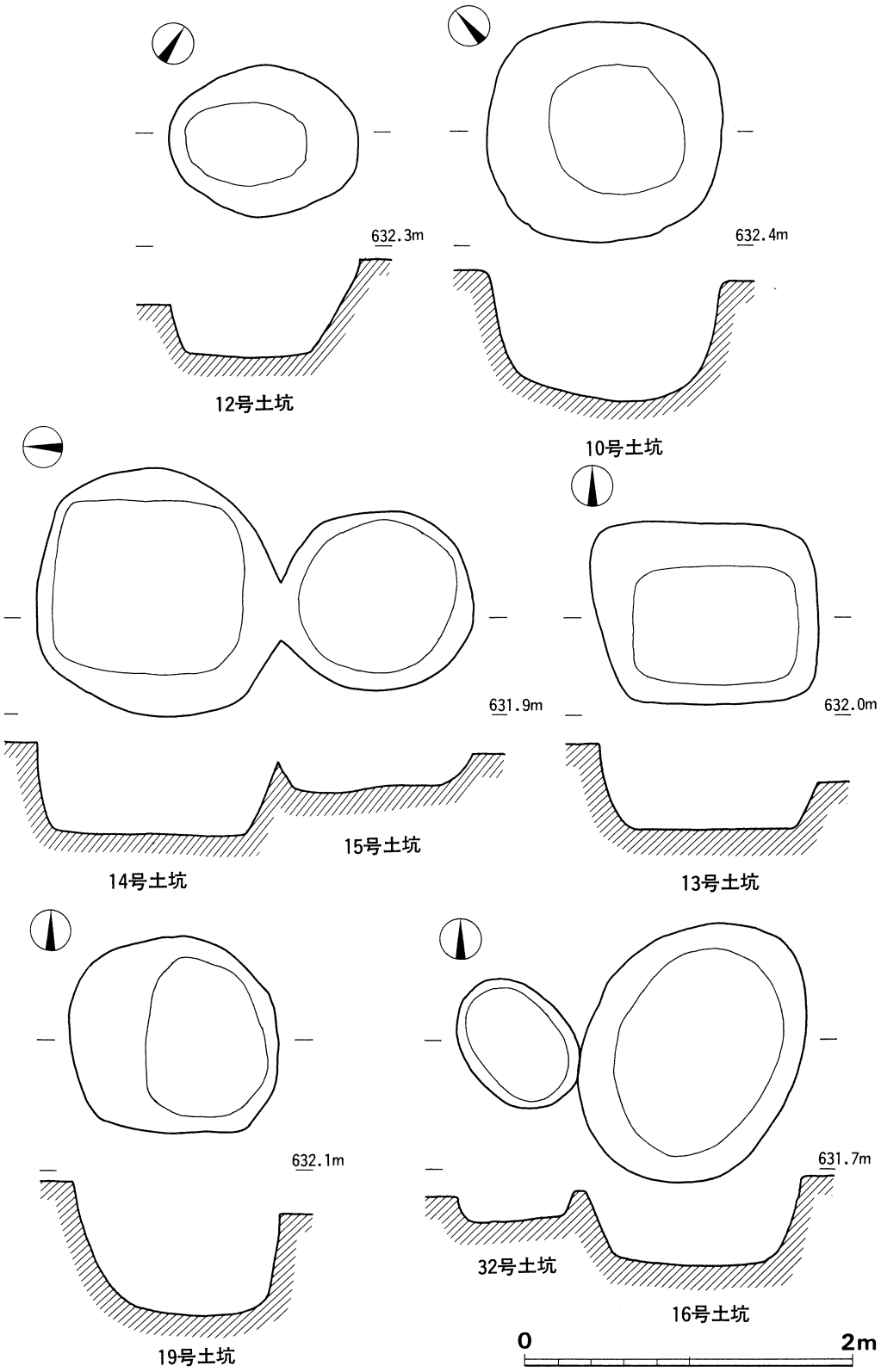

632.3m
12号土坑
632.4m
10号土坑
631.9m
15号土坑
14号土坑
632.0m
13号土坑
632.1m
19号土坑
631.7m
32号土坑
16号土坑
0
2m

Fig. 54　土坑（1）

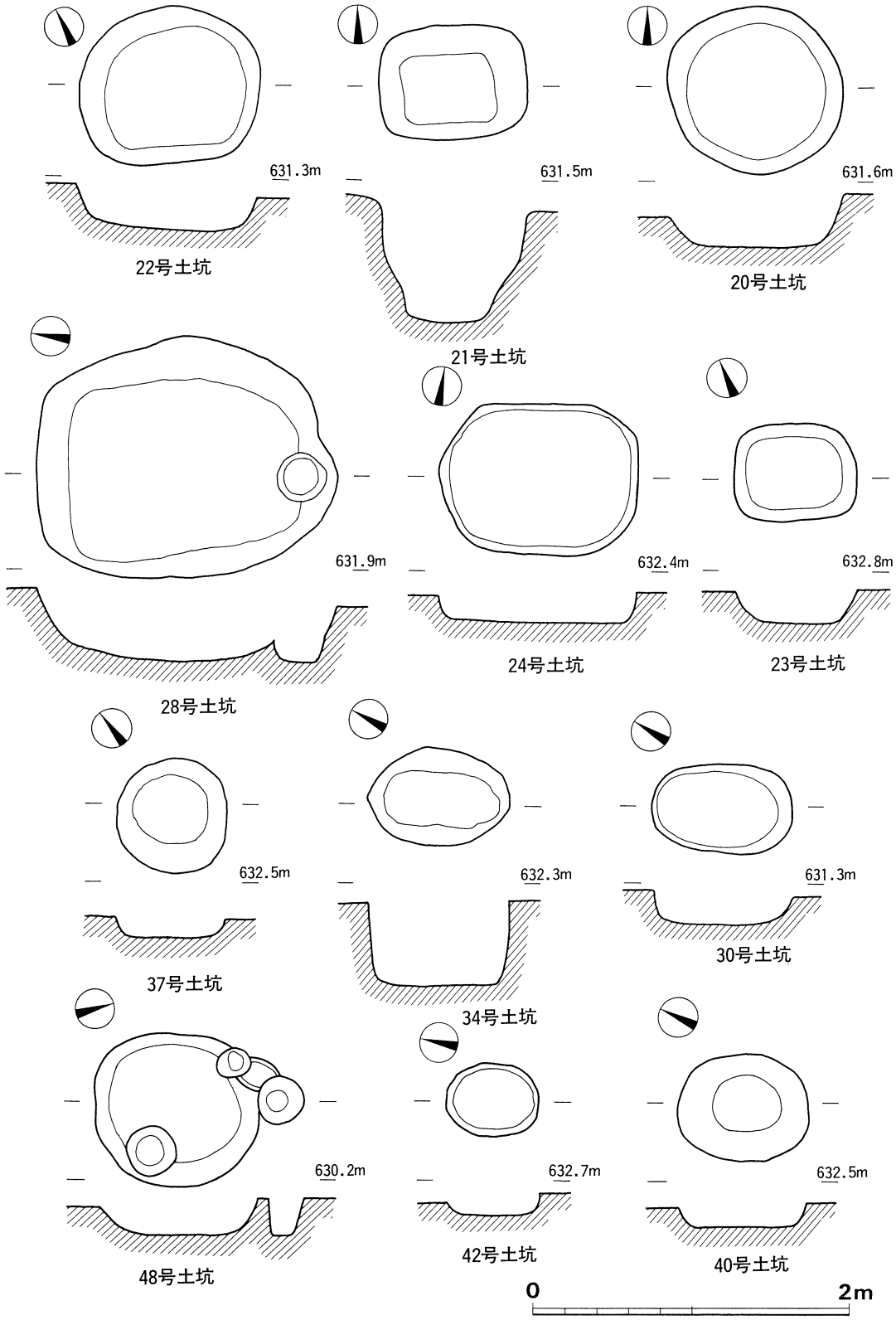

631.3m
22号土坑
631.5m
21号土坑
631.6m
20号土坑
631.9m
28号土坑
632.4m
24号土坑
632.8m
23号土坑
632.5m
37号土坑
632.3m
34号土坑
631.3m
30号土坑
630.2m
48号土坑
632.7m
42号土坑
632.5m
40号土坑
0
2m

Fig. 55　土坑（2）

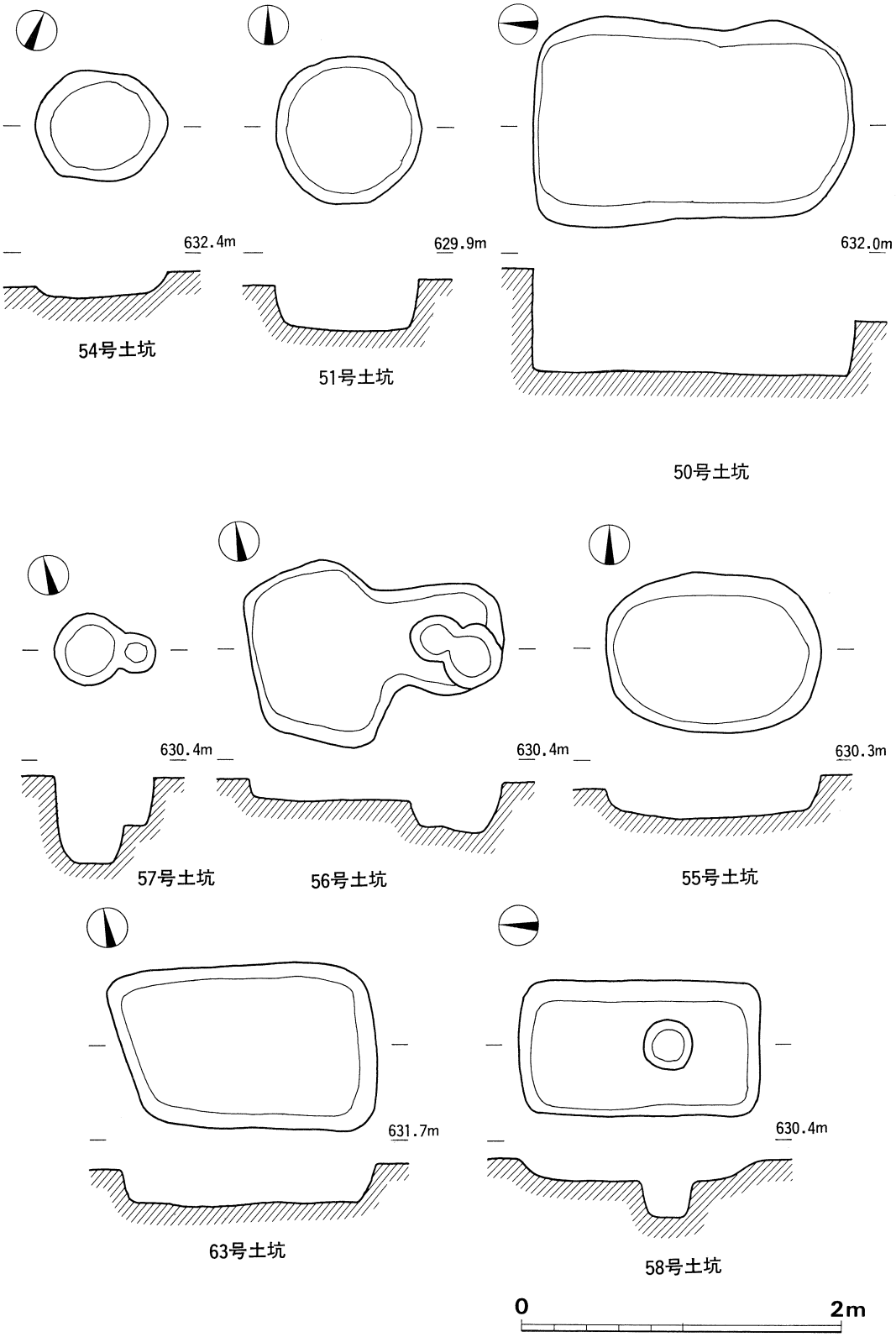

632.4m
54号土坑
629.9m
51号土坑
632.0m
50号土坑
630.4m
57号土坑
630.4m
56号土坑
630.3m
55号土坑
631.7m
63号土坑
630.4m
58号土坑
0
2m

Fig. 56　土坑（3）

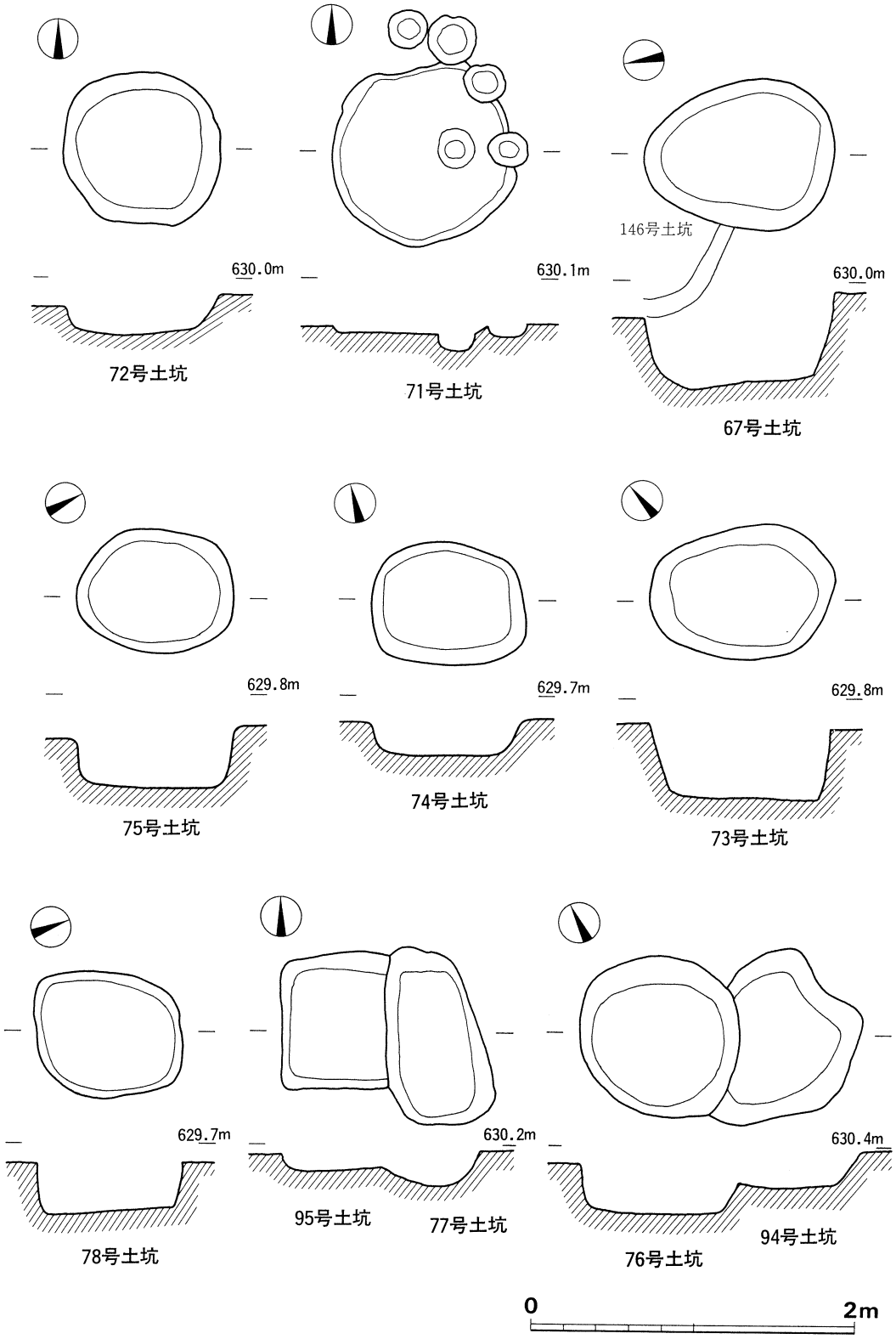

630.0m
72号土坑
630.1m
71号土坑
146号土坑
630.0m
67号土坑
629.8m
75号土坑
629.7m
74号土坑
629.8m
73号土坑
629.7m
78号土坑
95号土坑
77号土坑
630.2m
630.4m
94号土坑
76号土坑
0
2m

Fig. 57　土坑（4）

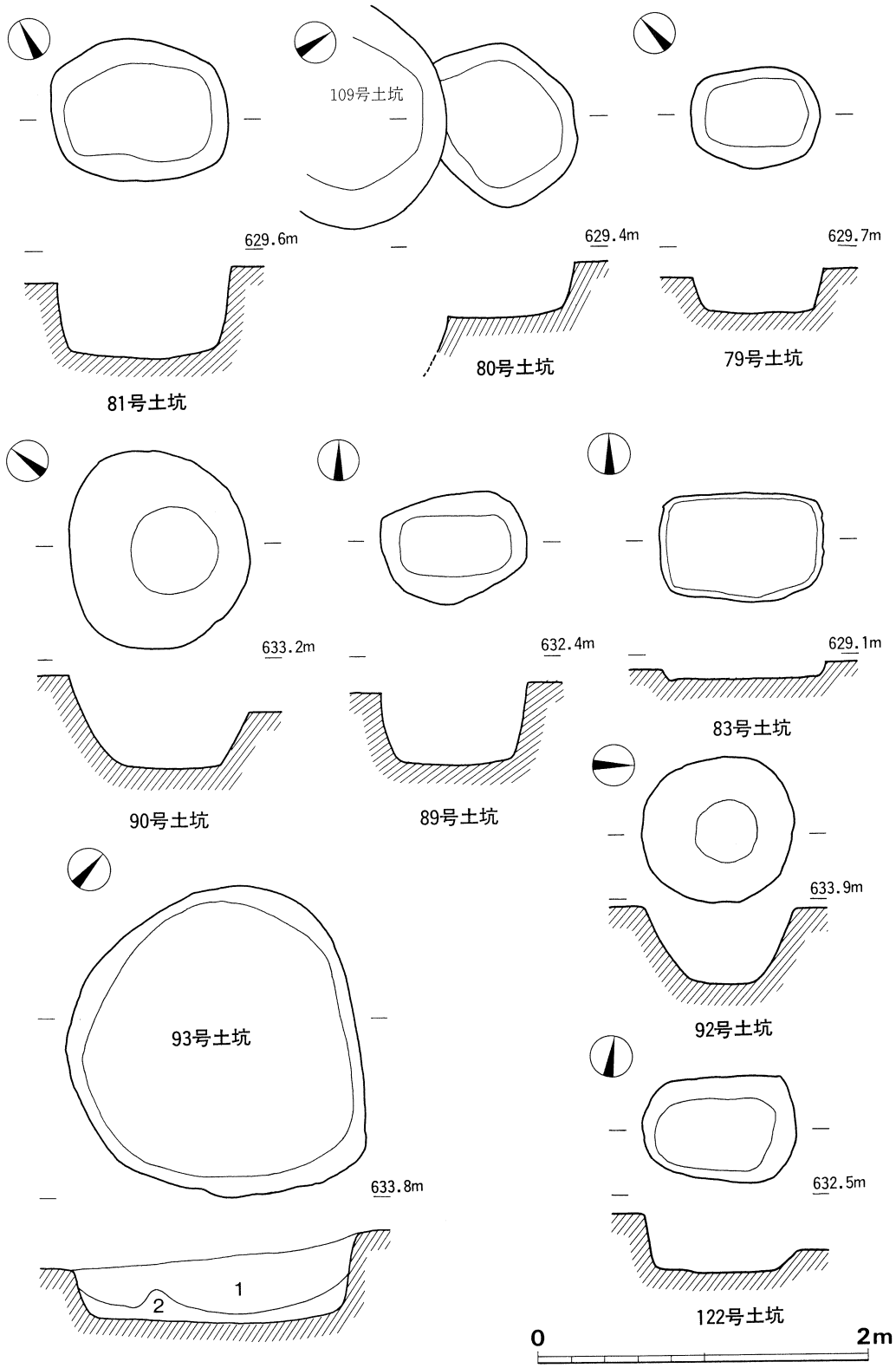

109号土坑
629.6m
629.4m
629.7m
81号土坑
80号土坑
79号土坑
633.2m
632.4m
629.1m
90号土坑
89号土坑
83号土坑
633.9m
92号土坑
93号土坑
633.8m
1
2
632.5m
122号土坑
0
2m

Fig. 58　土坑（5）

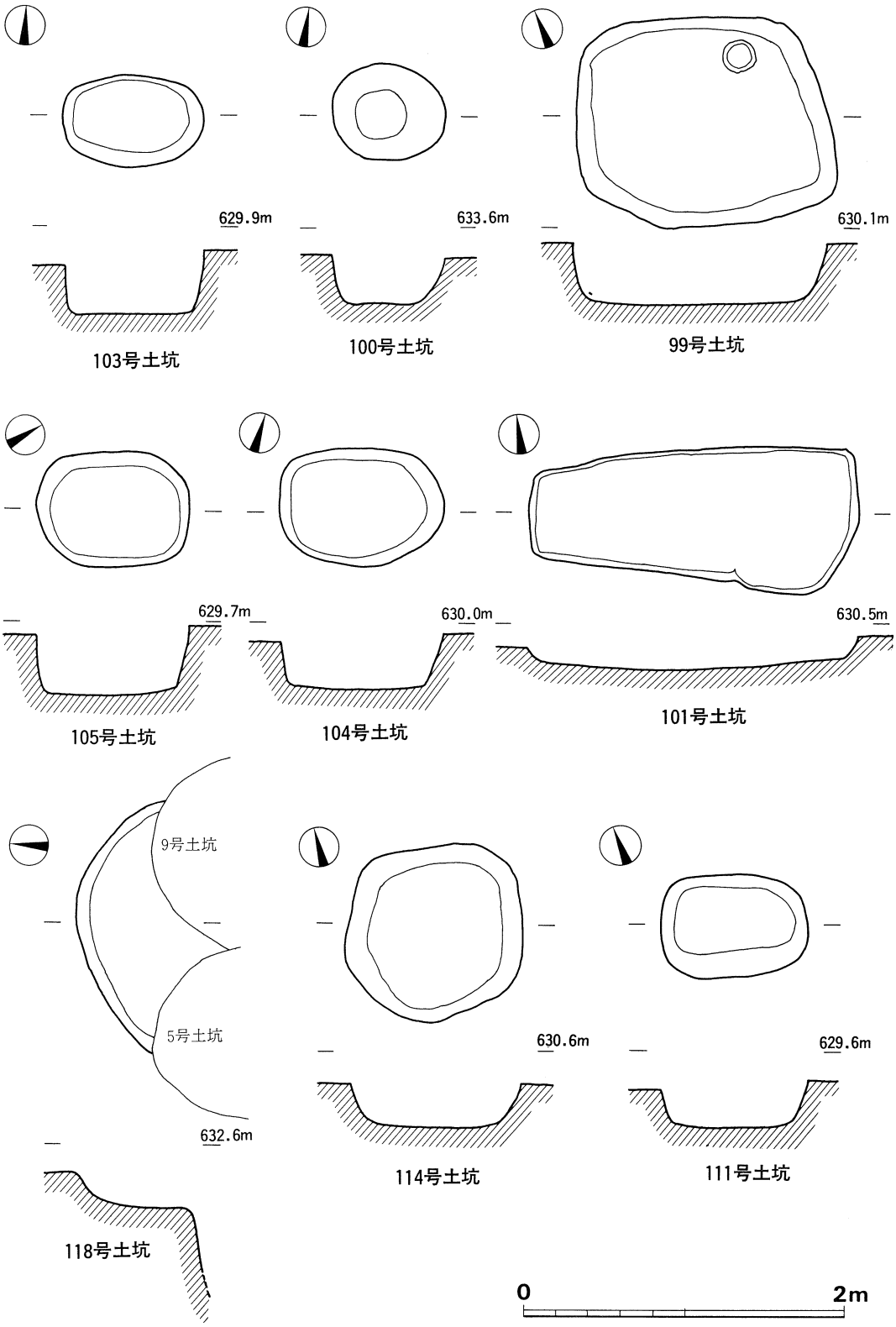

629.9m
103号土坑
633.6m
100号土坑
630.1m
99号土坑
629.7m
105号土坑
630.0m
104号土坑
630.5m
101号土坑
9号土坑
5号土坑
632.6m
118号土坑
630.6m
114号土坑
629.6m
111号土坑
0
2m

Fig. 59　土坑（6）

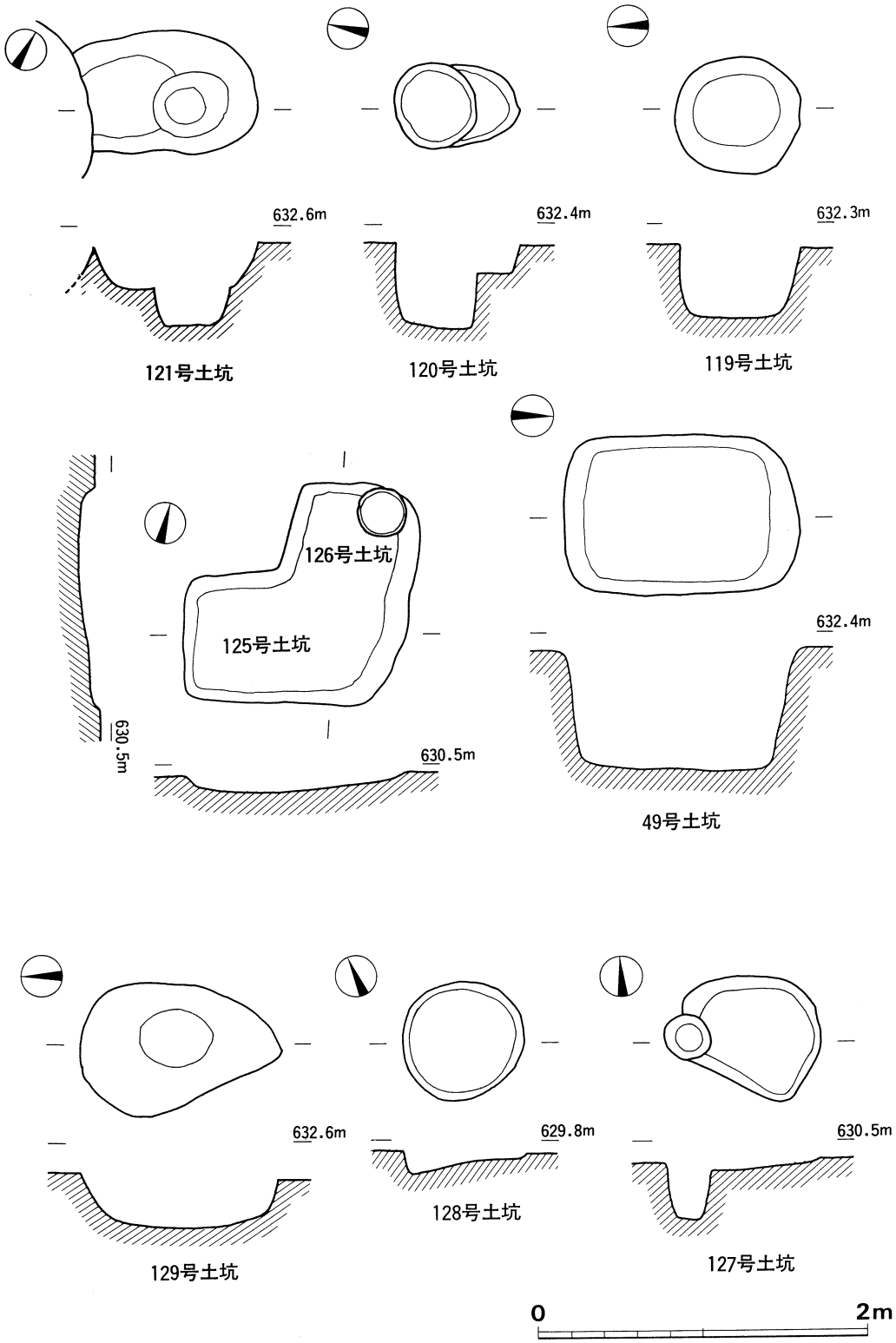

632.6m
121号土坑
632.4m
120号土坑
632.3m
119号土坑
126号土坑
125号土坑
630.5m
630.5m
632.4m
49号土坑
632.6m
129号土坑
629.8m
128号土坑
630.5m
127号土坑
0
2m

Fig. 60　土坑（7）

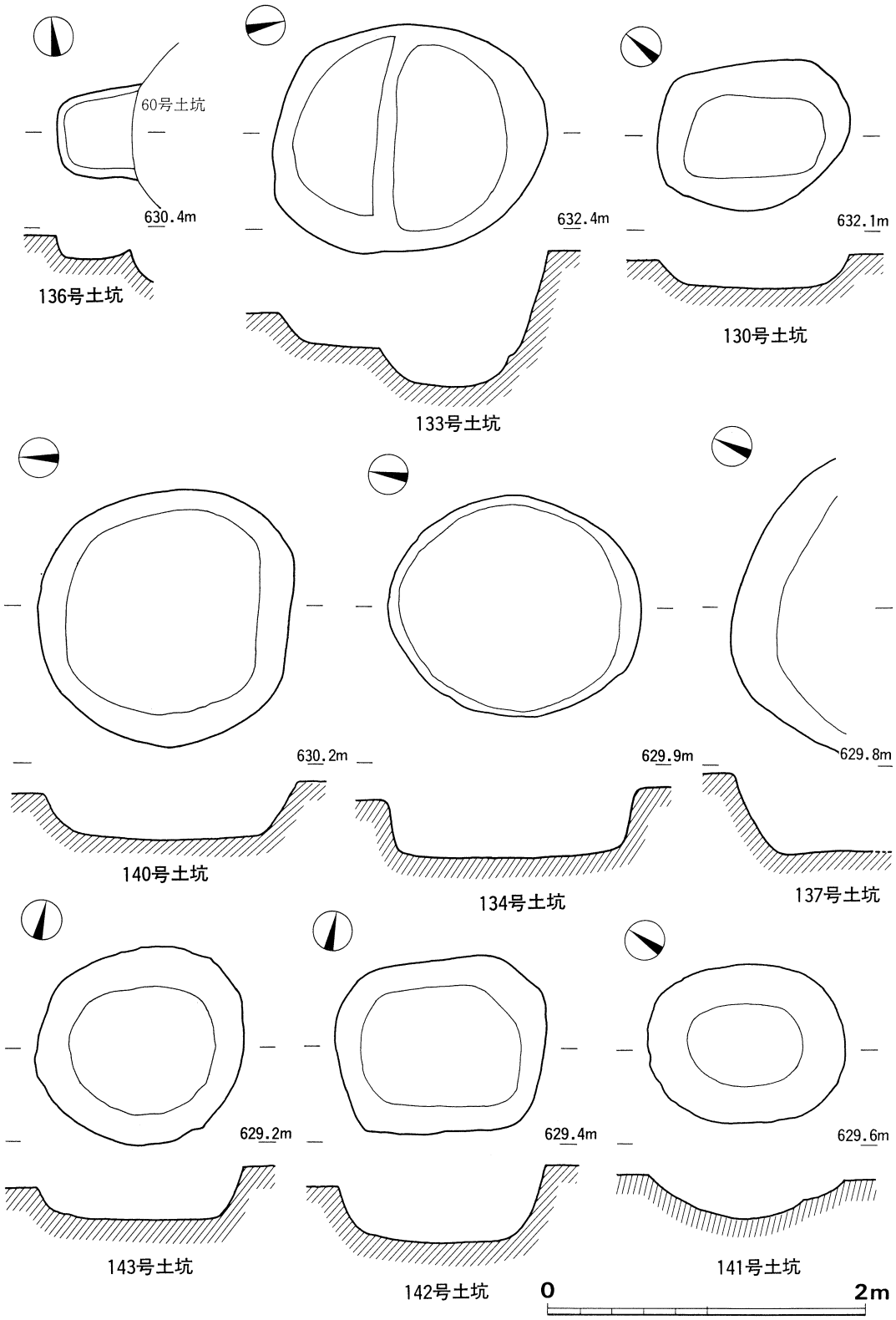

60号土坑
630.4m
136号土坑
632.4m
133号土坑
632.1m
130号土坑
630.2m
140号土坑
629.9m
134号土坑
629.8m
137号土坑
629.2m
143号土坑
629.4m
142号土坑
629.6m
141号土坑
0
2m

Fig. 61　土坑（8）

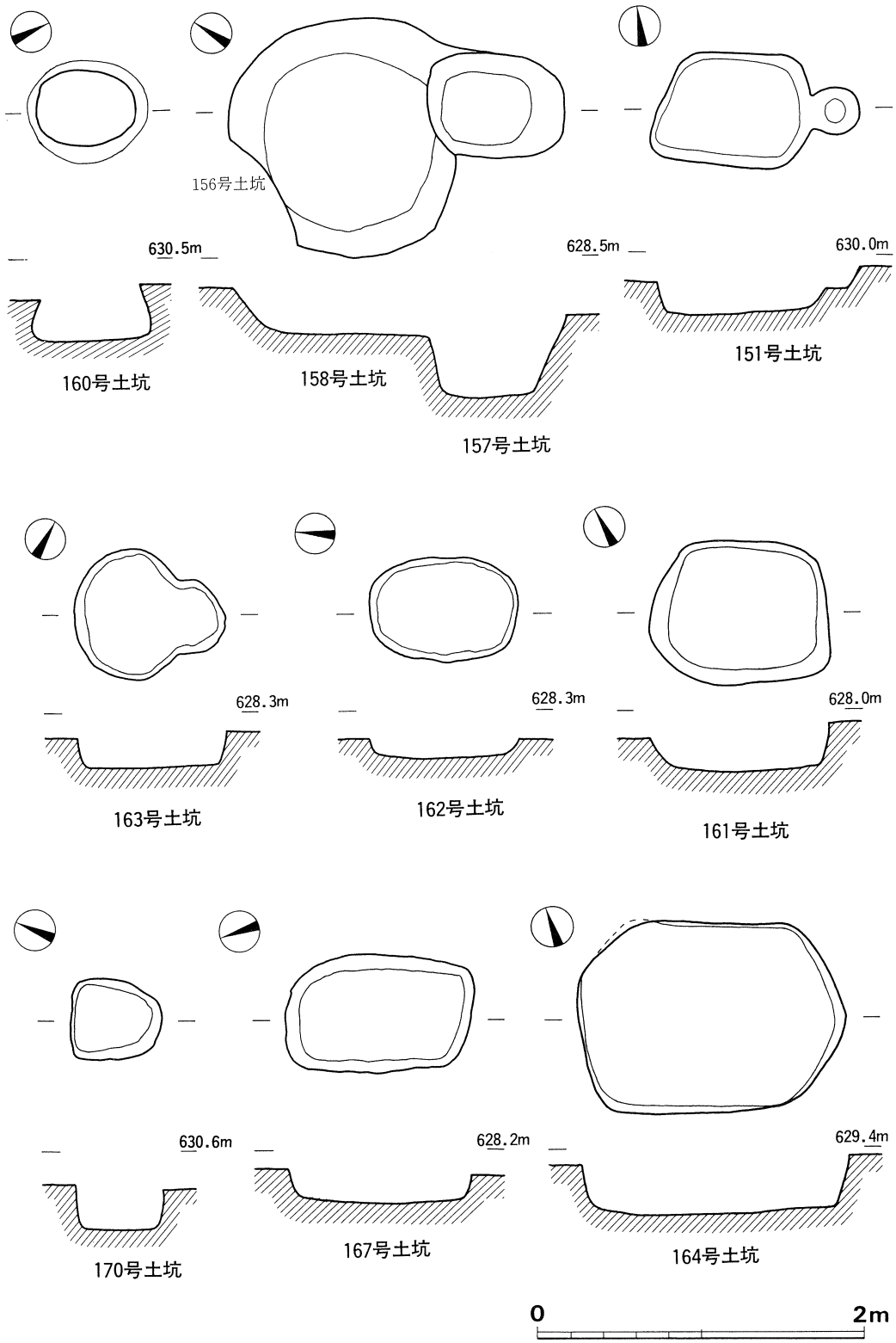

156号土坑
630.5m
628.5m
630.0m
160号土坑
158号土坑
151号土坑
157号土坑
628.3m
628.3m
628.0m
163号土坑
162号土坑
161号土坑
630.6m
628.2m
629.4m
170号土坑
167号土坑
164号土坑
0
2m

Fig. 62　土坑（9）

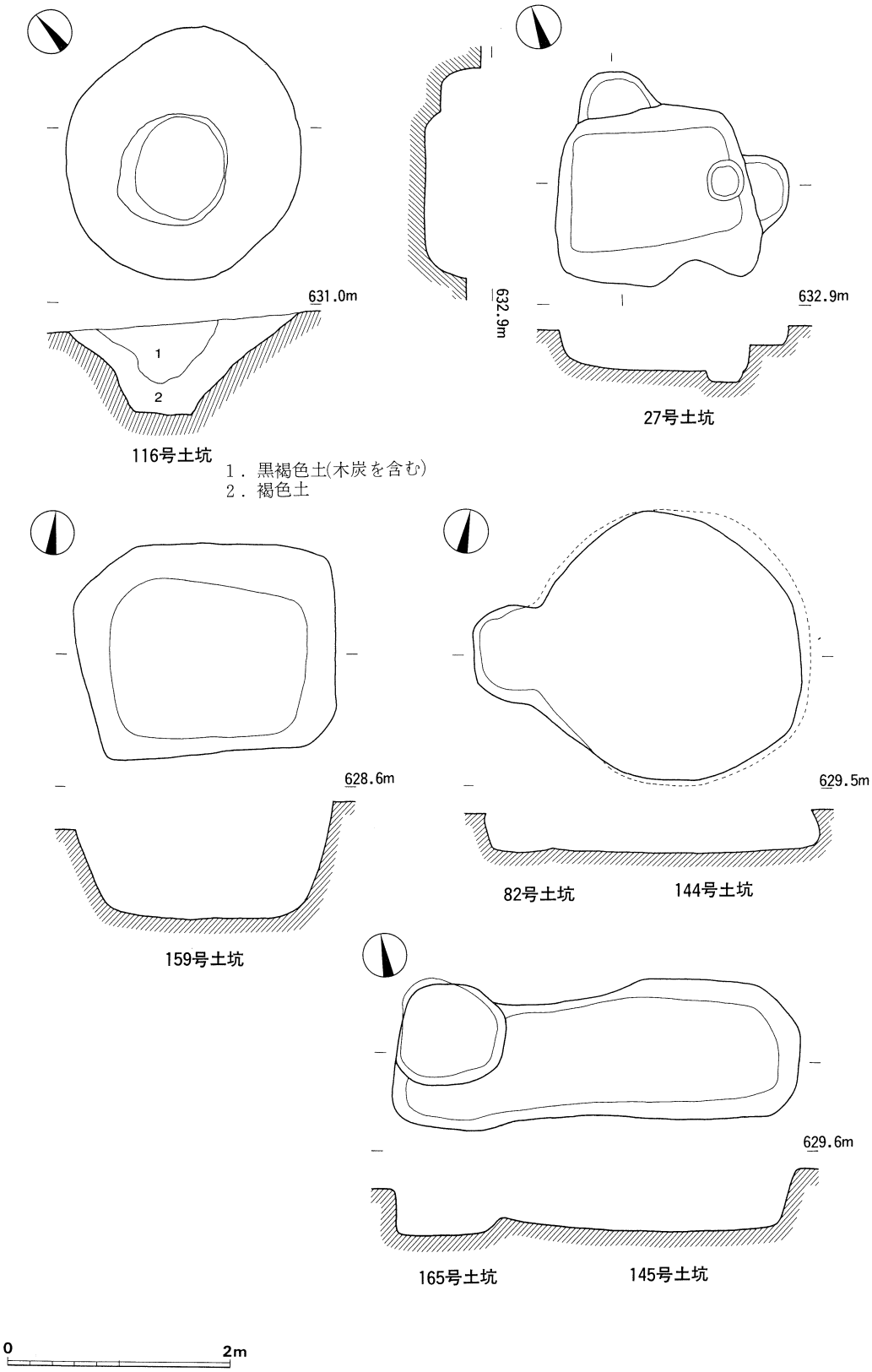

631.0m
1
2
116号土坑
1．黒褐色土(木炭を含む)
2．褐色土
632.9m
632.9m
27号土坑
628.6m
159号土坑
629.5m
82号土坑
144号土坑
629.6m
165号土坑
145号土坑
0
2m

Fig. 63　土坑（10）

# 第7節　まとめ

1.土壙墓の主軸方向について

14基の土壙墓のうち主軸が明確な11基について Fig.65に図示した。北－南をしめすもの6基、北北西－南南東をしめすもの3基。これらは明らかに「北」を意識したものと考えられる。残り2基はそれぞれ、東北東－西南西、北東－南西をしめす。

2.地下式坑について

a.時期

時期がわかる地下式坑出土遺物は少ない。それらをまとめ遺構の時期を求めると以下のようになる（遺構の性格上、時期は中世に限定した）。

3号：内耳土器（15世紀）……15世紀

6号：土師質土器小皿（15世紀）土師質土器皿（15世紀）……15世紀

35号：土師質土器皿（15世紀）内耳土器（16～17世紀）……15・16世紀

43号：土師質土器小皿（15世紀）……15世紀

46号：内耳土器（15世紀）……15世紀

52号：土師質土器小皿（15世紀）……15世紀

60号：土師質土器皿（15世紀）……15世紀

61号：内耳土器（16～17世紀）……16世紀

149号：白磁皿（15世紀）……15世紀

150号：土師質土器皿（15世紀）……15世紀

しかし、出土遺物が少ないこと、伝世するものがあることなどを考慮に入れると、求められた時期に若干の時間幅があるものと考えられる。その他、出土遺物のない地下式坑については、中世後期のものと考えている。

b.分布と形態について

45基の地下式坑は、東西75m、南北25mの範囲内に分布し、全体で1つのまとまりとなる。このような細長い分布のあり方は、地理的条件による。つまり、南西向き緩斜面上にある、東西に延びた微高地の南側に地下式坑を築いたためである。

個々の形態の分布をみてみると、地下式坑はおおまかに、A：地下室の短辺側に竪坑があるもの（1・7・87号など、25例）、B：地下室の長辺側に竪坑があるもの（8例）、の2つに分類できる。B（69・138・149・150・152・153・168号）が西側に集中する傾向がある。形態と時期については、不確定なところが多いので言及をさけたい。

また、Fig.65に主軸の方向を図示した（スクリーントーンは、概ね北を示すもの）が、土壙墓

と異なり統一性がないといえる。

c.地下室掘削後の廃土について

天井が崩落した地下式坑の埋土中には、灰白色粘土粒子とＰｍ－１の粒子が混在していた。このような埋土のありかたは、地下室掘削後の廃土を地下室上方の地表面に置いたと考えると説明がつく。地下式坑の説明の項で述べたように、地下室の床面は基本層序Ｖ層の灰白色粘土層中にあった。当然、地下室掘削後の廃土には、灰白色粘土と上層のＰｍ－１が混じる。このような廃土が天井崩落に伴い地下室内に入ってきたと考えられるのである（Fig.64参照）。

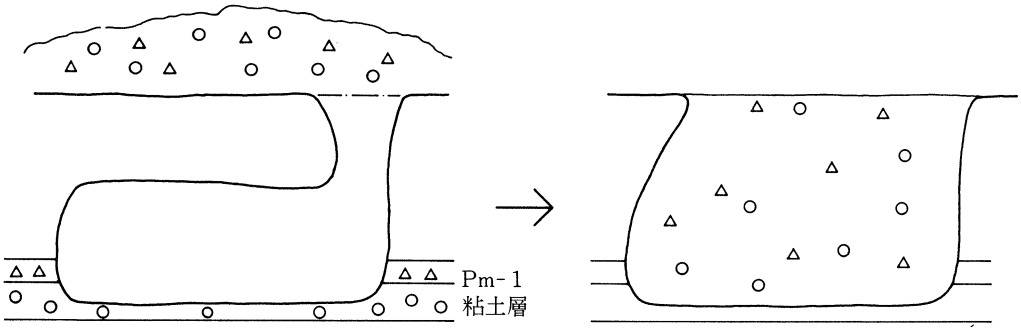



**Fig. 64　地下式坑の埋まり方模式図**（右：天井崩落後）

## 参考文献


浅野晴樹　1988「関東における中世在地産土器について」『研究紀要』第４号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』NO.2

大森隆志　1989『踊石遺跡・薬師堂遺跡・白山Ｉ遺跡』明野村教育委員会

小林秀夫　1982「長野県における内耳土器の編年と問題」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－茅野市その５－昭和52・53年度』長野県教育委員会

坂本美夫　1977「土師質土器の分類」『(伝）岩崎館跡発掘調査報告書』山梨県教育委員会

坂本美夫　1983「山梨県における15世紀以降の土師質土器編年」『甲斐考古』20の１　山梨県考古学会

坂本美夫・末木　健・堀内　真　1983「集落址出土土器の編年と背景　III　甲斐地域」『奈良・平安時代土器の諸問題』神奈川考古第14号

中山誠二　1985「甲斐における弥生文化の成立」『研究紀要２』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

三輪茂雄　1987『粉の文化史』新潮社

森田　勉　1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』NO.2

八巻與志夫　1988『金生遺跡Ｉ（中世編)』山梨県教育委員会

Fig. 65　地下式坑・土壌墓主軸方向

# 付編　中村道祖神遺跡の砂粒組成・重鉱物組成

会田　信行

## 1.はじめに

茅ヶ岳西麓には塩川沿いに3段の明瞭な河岸段丘が発達している。中村道祖神遺跡はこのうち小池平面（比高60m）と呼ばれる中位段丘面上に位置している。小池平面は層厚1～2 mの小池平段丘礫層（八ヶ岳団体研究グループ、1988）とその上位のローム層からなり、そのローム層には御岳Pm-1A軽石層が含まれるとされている。今回、礫層より上位の土層（厚さ約2.4m）について、その砂粒組成と重鉱物組成を求めたので、その結果を報告する。

## 2.土層の層序

Fig.67に本遺跡の土層断面図を示す。これは発掘担当者が作成したものである。色調・構成物質等からⅠ層からⅦ層までに区分される。各土層は次のように説明されている。

Ⅰ：7.5YR4/6　褐色ローム（Ⅱ、Ⅲよりも柔らかい）

Ⅱ：10YR4/6　褐色ハードローム

Ⅲ：10YR5/6　黄褐色ハードローム

Ⅳ：7.5YR5/8　明褐色パミス（しまりなく、柔らかい）

Ⅴ：2.5YR7/1　灰白色粘土層

Ⅵ-a：5Y5/1　灰色粘土層（鉄分が酸化した部分）

Ⅵ-b：5Y5/1　灰色粘土層

Ⅶ：礫層

Ⅶ層の礫層は茅ヶ岳西麓の小池平段丘礫層に、またⅣ層のパミス（軽石）層は御岳火山起源のPm-1Aに対比されるものと思われる。

## 3.採取試料と分析方法

分析用試料としてⅠ層（試料番号1～7）、Ⅱ層（試料番号8～10）、Ⅲ層（試料番号11～16）Ⅳ層（試料番号17～19）、Ⅴ層（試料番号20～21）、Ⅵ層（試料番号22）から計22個を採取した（Fig.67）。

採取した試料は水洗いし、粘土分を除去した後、乾燥器（35℃）で乾燥させる。乾燥後の残渣を100メッシュ（0.15㎜）と200メッシュ（0.074㎜）のフルイを用いて篩分する。このうち0.074～0.15㎜の砂粒をカナダバルサムを用いて、スライドガラスに封入する。

スライドガラスに封入した砂粒を、偏光顕微鏡を用いて砂粒1粒ずつ鑑定する。その際メカニカルステージを用いて、等間隔線上の砂粒のみを対象とした。数える量は、重鉱物が200粒以上に

なるようにしたかったが、約半数が100粒台であった。特に試料番号15～22の試料では63～158粒と少なかった。

偏光顕微鏡はニコン（株）のOPTIPHOTO-POLを使用し、主に10×10倍で検鏡した。

4．分析結果

Fig.66に分析結果を示した。以下に項目ごとに特徴を述べる。

（1）砂粒組成

砂粒の鑑定数は試料により差はあるが、黄褐色の風化粒子を除いてNo.13の1340個（最多）からNo.16の336個（最小）であった。数えた砂粒を重鉱物、軽鉱物（無色鉱物）、火山ガラス、岩片の4種に分け、百分率（粒数%）で示した。

Ⅰ～Ⅲ層のローム層では、①全体的に下位の層準ほど重鉱物の含む割合が小さくなること、②岩片はⅠ層に多く含まれること、③火山ガラスを特に多く含む層準はなく、全体にわずかに含む、といった傾向が認められる。

Ⅳ～Ⅵ層では各土層単位で特徴が現れている。

以下、土層ごとに説明する。

No.22：Ⅵ層の粘土層である。重鉱物29%、軽鉱物65%、火山ガラス1.5%、岩片4%である。

No.20～21：Ⅴ層の粘土層である。2試料とも含まれる割合はほぼ同じで、重鉱物10.5%、軽鉱物82～83%、火山ガラス2%、岩片5%である。

No.17～19：Ⅳ層の軽石層である。重鉱物8～13%、軽鉱物72～76%、火山ガラス4～12%、岩片7～9%である。火山ガラスはほとんどがHタイプ（吉川、1976）である。

No.11～16：Ⅲ層のローム層である。重鉱物15～36%、軽鉱物58～79%、火山ガラス0.3～1.6%（Hタイプが主であるが、他の形態を示すものも目立つ）、岩片3～5%（No.16は0%）である。

No.8～9：Ⅱ層のローム層である。重鉱物32～41%、軽鉱物53～60%、火山ガラス0.8～1.6%、岩片3～8%である。

No.1～7：Ⅰ層のローム層である。重鉱物27～48%、軽鉱物36～56%、火山ガラス0.3～1.3%、岩片8～21%である。岩片は白色のものが多く含まれる。

（2）重鉱物組成

砂粒組成で示した重鉱物について、カンラン石、シソ輝石、普通輝石、酸化角閃石、普通角閃石、不透明鉱物、黒雲母、ジルコン、その他（不明鉱物を含む）の9種類に分け、百分率（粒数%）を求めた。

重鉱物組成上の特徴から、ローム層（No.1～16）、軽石層・灰白色粘土層（No.17～21）、灰色粘土層（No.22）の3つに分けられそうである。

No.1～16：不透明鉱物が最も多く含まれ、49%（No.5）～77%（No.14）を占める。残りがシソ輝石＞普通角閃石＞酸化角閃石＞普通輝石である。普通角閃石＋酸化角閃石で見ると、9

～20%になり、層準による違いは認められない。シソ輝石、普通輝石はⅠ層に特に多く含まれている。カンラン石はⅠ層の上部でわずかに含まれる。この部分のシソ輝石は風化されたものが多い。黒雲母はすべての試料に含まれていたが、試料処理の過程で水に洗い流されやすく、統計上表現されないものもある。

その他の鉱物はほとんどが赤色～暗赤色の鉱物である。また、ジルコンがNo.4，7，8，9，13，14，16で認められた。No.16の試料にはNo.17の軽石が少量含まれており、そのため黒雲母とジルコンが多くみられた。

No.17～21：普通角閃石、不透明鉱物、黒雲母の3種類で特徴づけられる。他にジルコンが最大4.3%含まれている。この重鉱物の組み合わせから、Ⅳ層の軽石層は御岳火山起源のPm-1A軽石層と判断される。またⅤ層の灰白色粘土層は組成上Pm-1Aと同じであることから、Pm-1Aに伴って形成されたもの（粘土化した火山灰）と考えられる。

No.22：酸化角閃石（37%）、普通角閃石（29%）、不透明鉱物（28%）の3種類で94%を占める。他にシソ輝石と普通輝石を含み、黒雲母は認められない。

5.他の遺跡との比較

筆者が同じ方法で分析した遺跡に白山Ⅰ遺跡（会田、1989）、永井原Ⅱ遺跡（会田、1991年刊行予定）がある。白山Ⅰ遺跡は本遺跡の南西約900m離れた地点にあり、しかも同じ地形面上に立地している。違いは標高が50mほど本遺跡のほうが高い。そこでまず白山Ⅰ遺跡の土層断面図と対比を試みた。

白山Ⅰ遺跡のⅢ～Ⅴ層が本遺跡のⅠ層に、ⅥがⅢ層のNo.4～16に、Ⅶ層がⅥ層に（ともに灰色粘土層）、それぞれ対比できる（Fig.68）。したがって本遺跡のⅡ層～Ⅲ層上部（No.8～13）とⅣ～Ⅴ層のPm-1A軽石層は白山Ⅰ遺跡には分布していない。このことと、白山Ⅰ遺跡の断面図でⅤ層とⅥ層の境が大きな凹凸で示されていることから、白山Ⅰ遺跡のⅤ層とⅥ層は不整合関係にあるといえる。これは白山Ⅰ遺跡では本遺跡のⅡ層～Ⅲ層上部のロ-ム層が侵食されていることを意味している。したがって本遺跡のⅠ層のローム層とⅡ～Ⅲ層のローム層は区別して考えたほうがよい。仮にそれぞれ上部ローム層、中部ローム層と命名すると、これはまさに関東ローム層の中の立川ローム層と武蔵野ローム層の関係に似ている。

永井原Ⅱ遺跡のローム層は2、3、4層に3分されているが、2、3層は上部ローム層に対比されるのは確実である。永井原Ⅱ遺跡の近くでPm-1A軽石層を確認しているので、4層はおそらく中部ローム層に対比されると考えられる。ただし組成上で本遺跡との対比に問題が残る。今後の検討課題としたい。

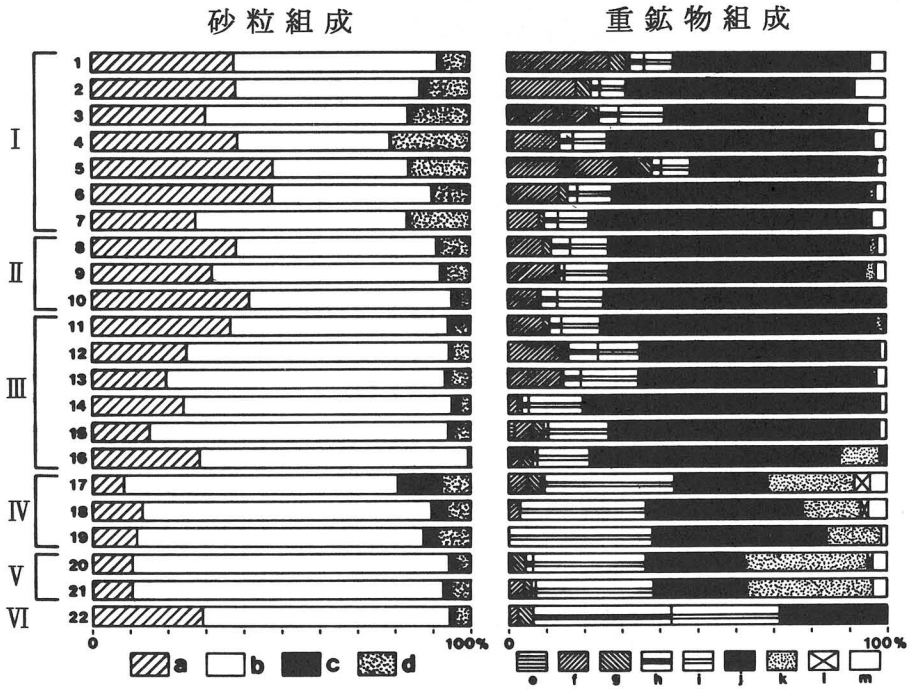
# 文　献

会田信行（1989）白山Ⅰ遺跡の砂粒組成・重鉱物組成、「踊石遺跡・薬師堂遺跡・白山Ⅰ遺跡」P.46～50.

会田信行（1991年刊行予定）永井原Ⅱ遺跡の砂粒組成・重鉱物組成

八ヶ岳団体グループ（1988）八ヶ岳山麓の上部更新統、「八ヶ岳山麓の第四系（地団研専報34）」P.91～109.

吉川周作（1976）大阪層群の火山灰層について、地質学雑誌82巻8号、P479～515.




a：重鉱物　b：軽鉱物　c：火山ガラス　d：岩片　e：カンラン石　f：シソ輝石　g：普通輝石
h：酸化角閃石　i：普通角閃石　j：不透明鉱物　k：黒雲母　l：ジルコン　m：その他

Fig. 66　分析試料の砂粒組成と重鉱物組成

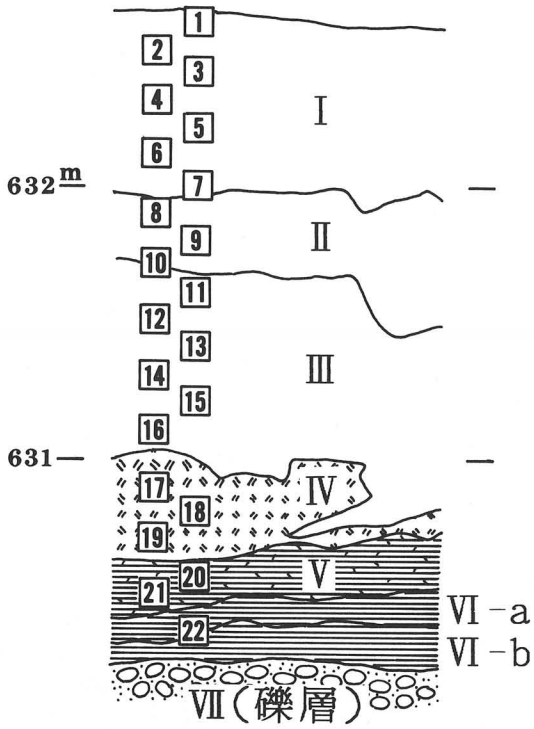



Fig. 67　分析試料採取位置

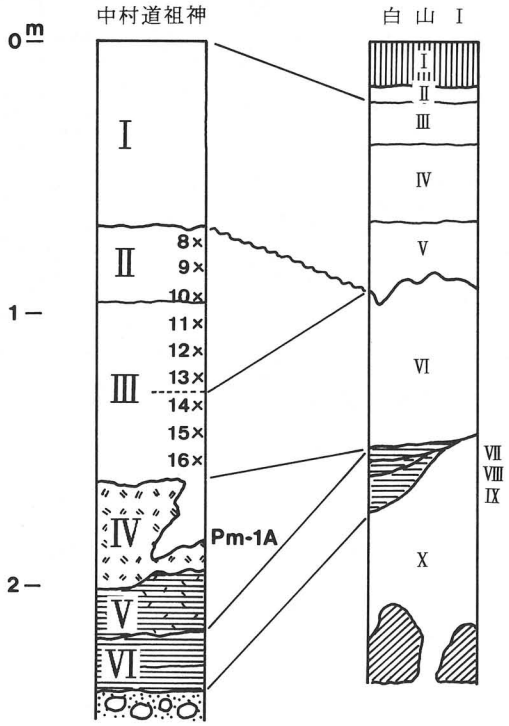
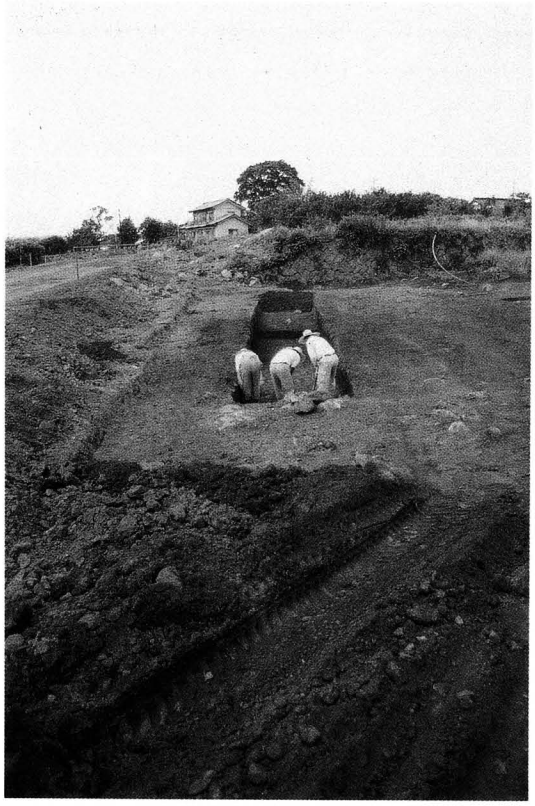


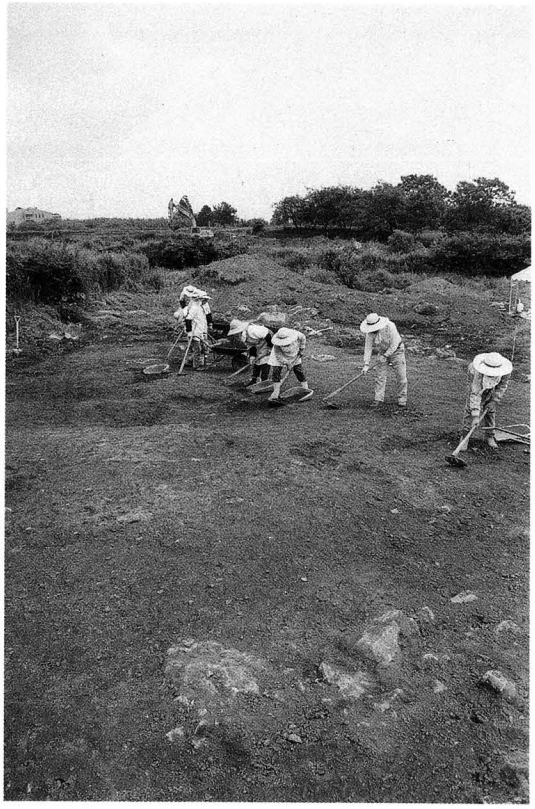

Fig. 68　中村道祖神遺跡と白山 I 遺跡の対比

# 写 真 図 版

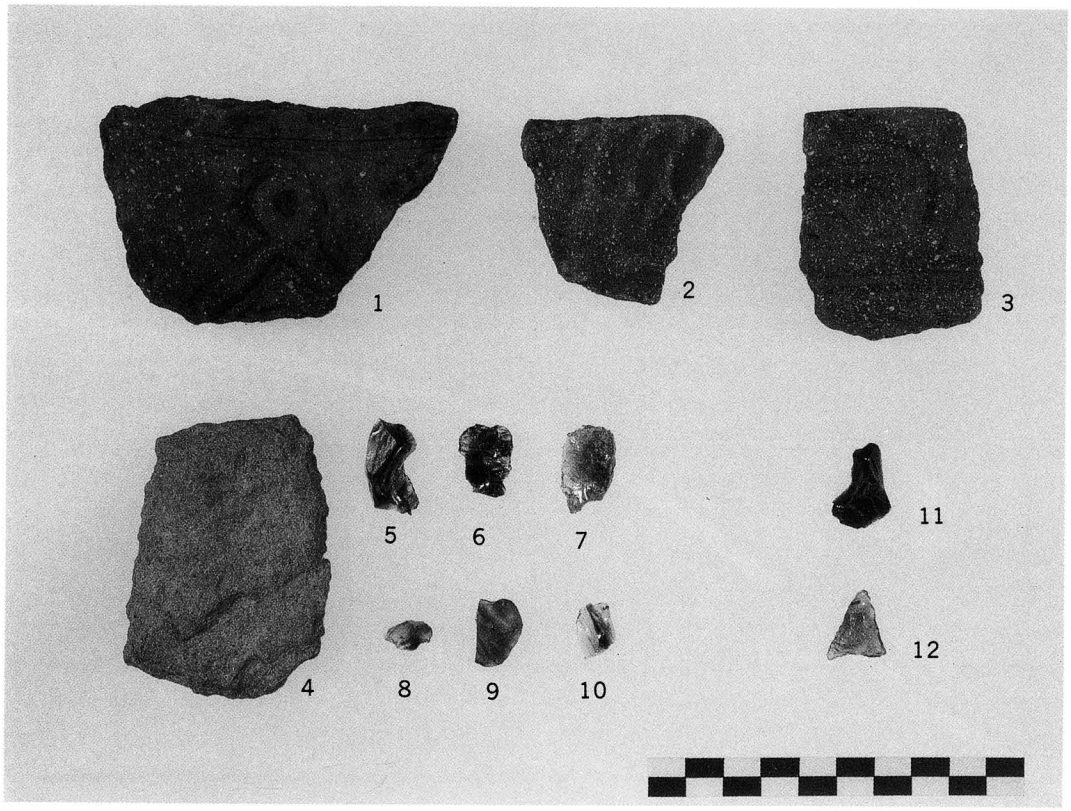
遺跡の位置（1：千野木Ⅰ、2：千野木Ⅱ）



調査風景（千野木Ⅰ）



調査風景（千野木Ⅱ）

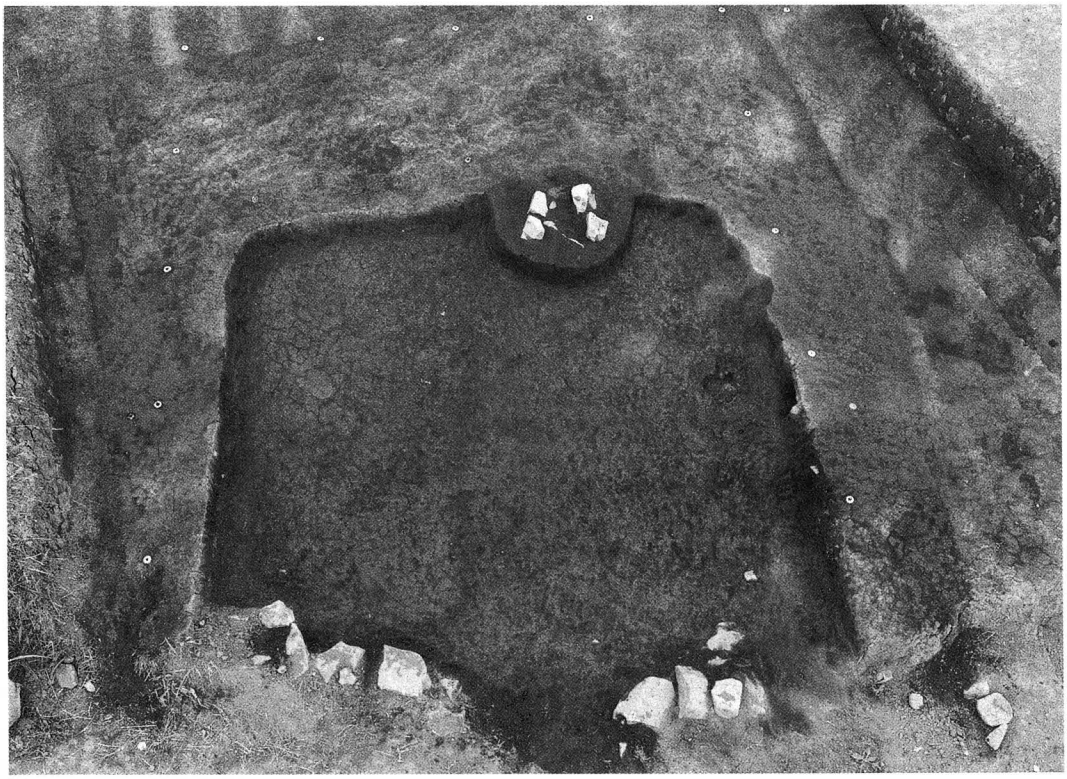



千野木Ⅰ・千野木Ⅱ遺跡出土遺物

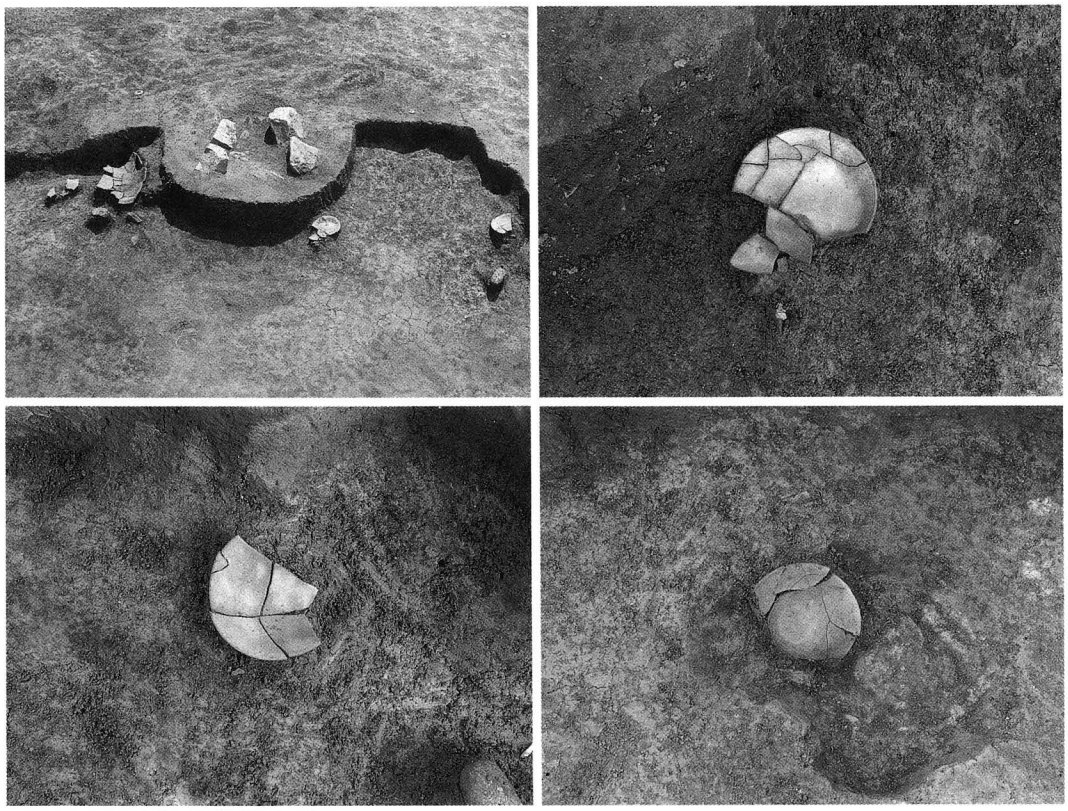
**遺跡の位置**（1：池の下、2：踊石II、3：中村道祖神）

**遺跡の遠景**（1：池の下・中村道祖神　2：踊石II）

**池の下遺跡調査風景**



1号住居址



遺物出土状況

Fig. 8－7

Fig. 8－6

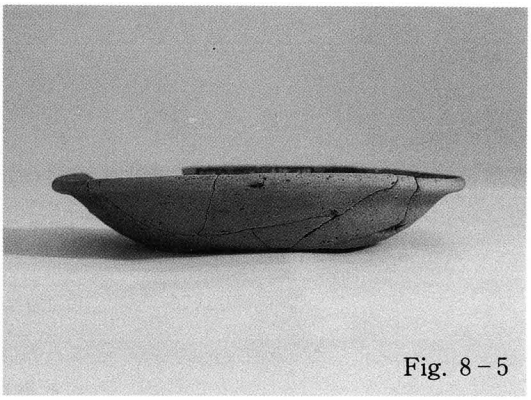
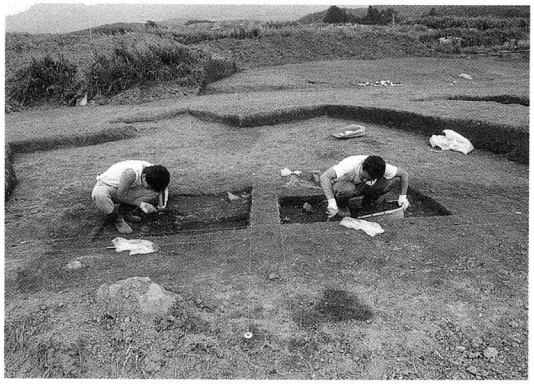
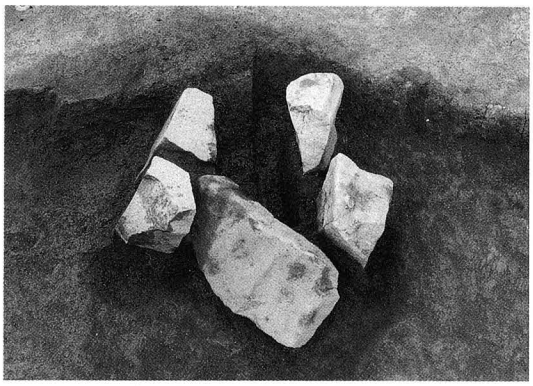


Fig. 8－5

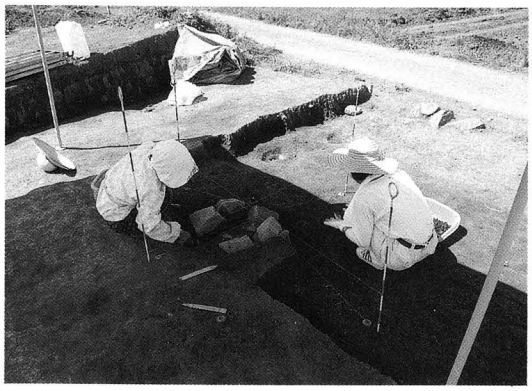
遺物出土状況と出土土器



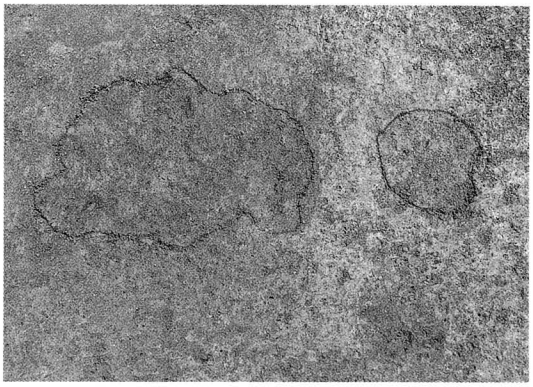
調査風景



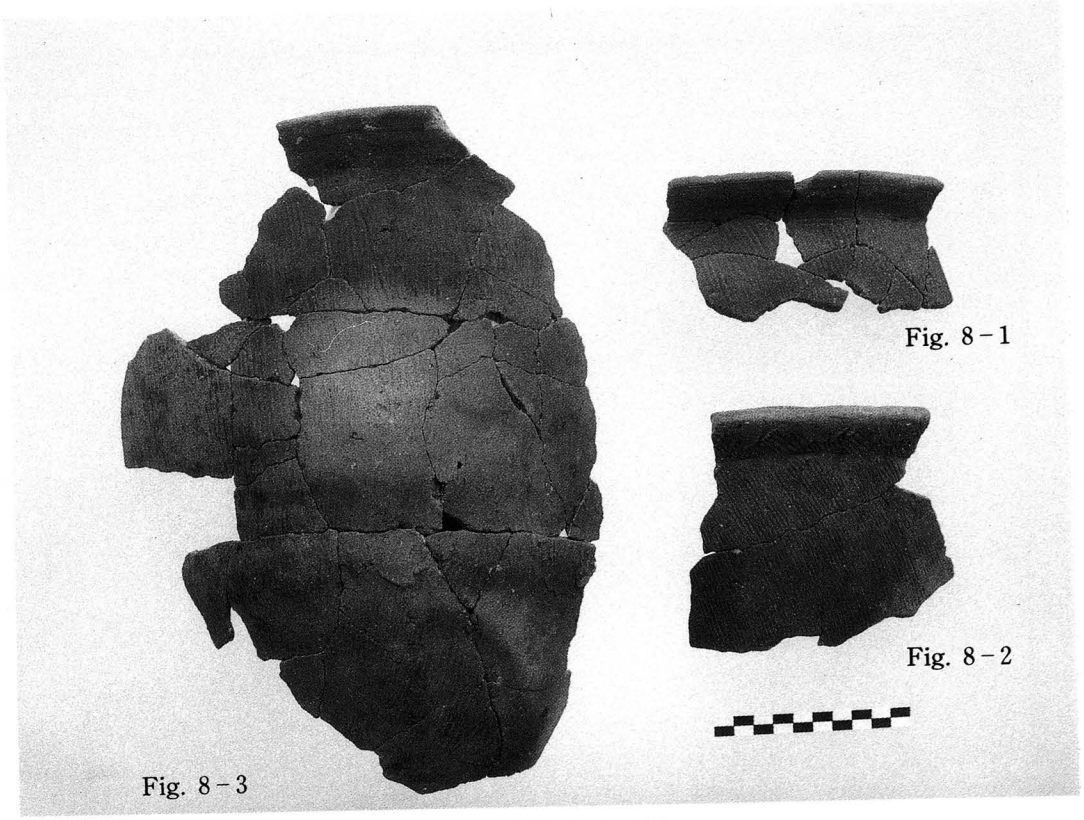
1号住居址カマド石組



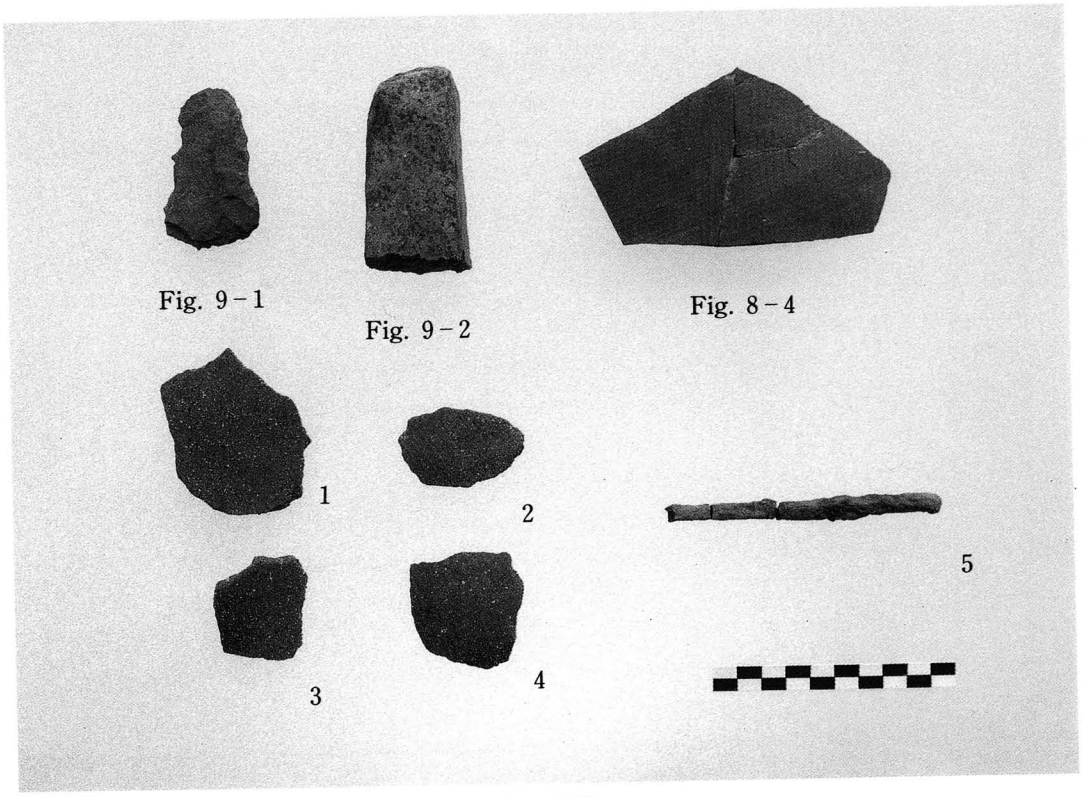
調査風景



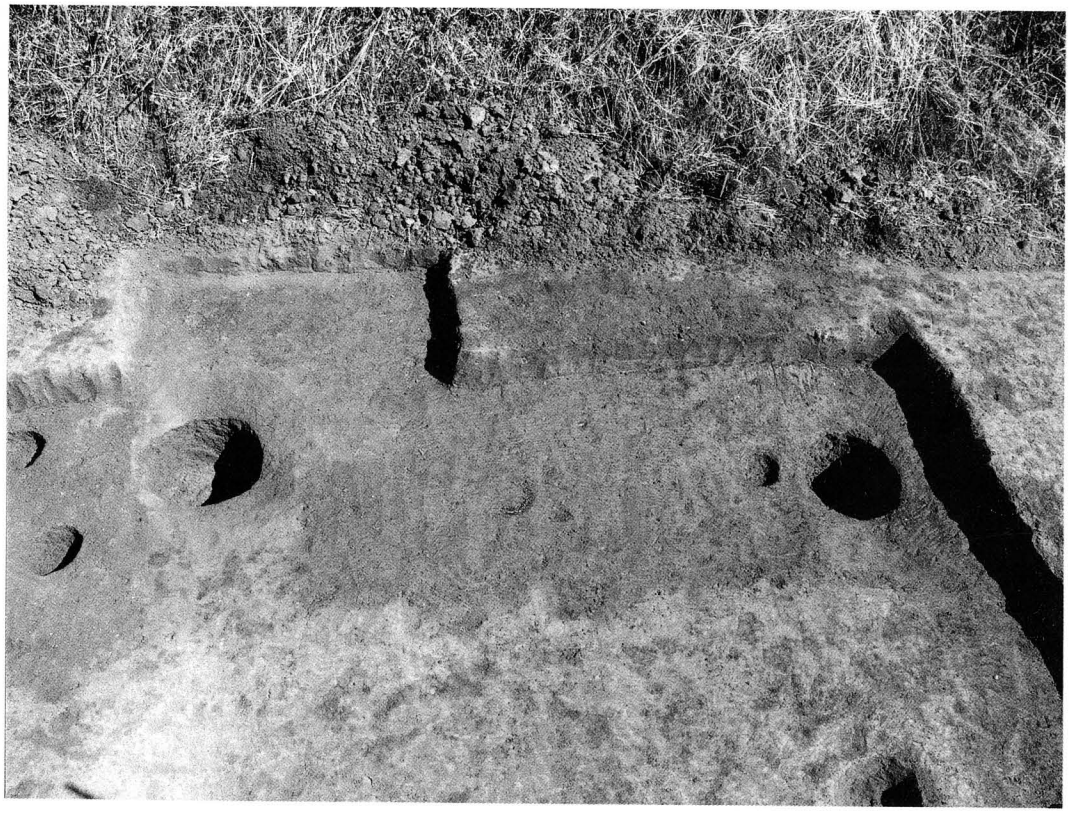
1号焼土



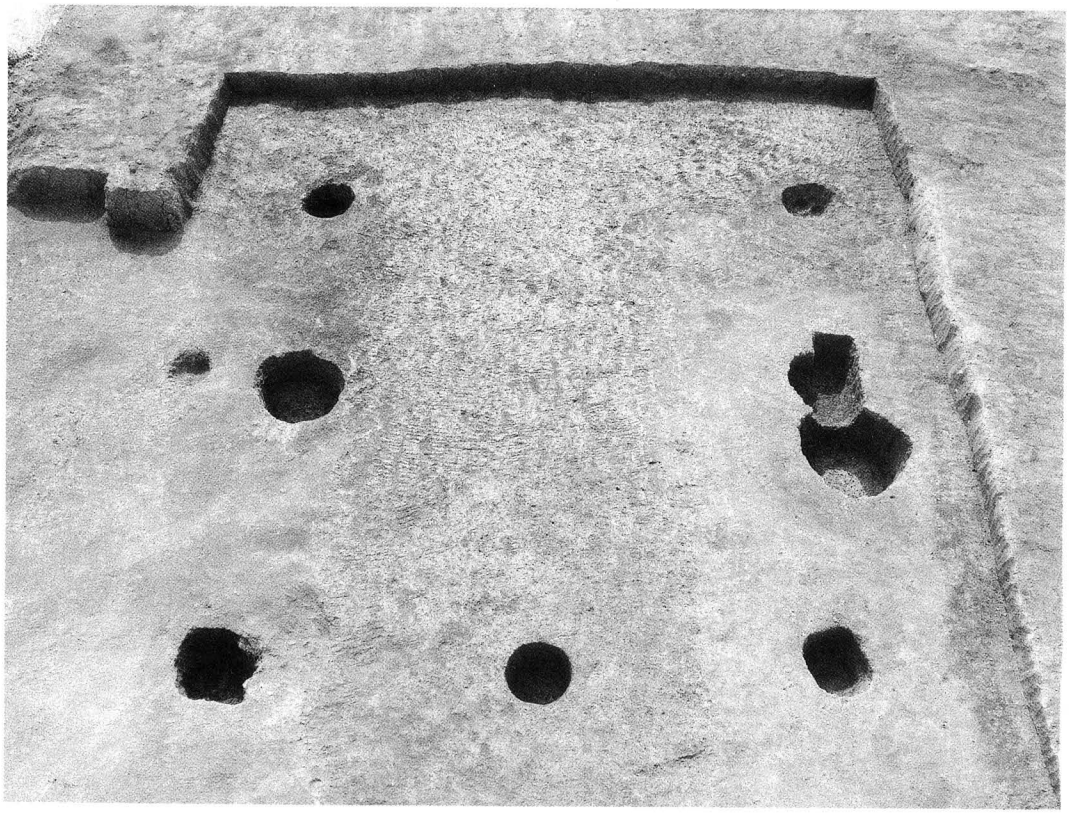

1号住居址出土土器




出土遺物



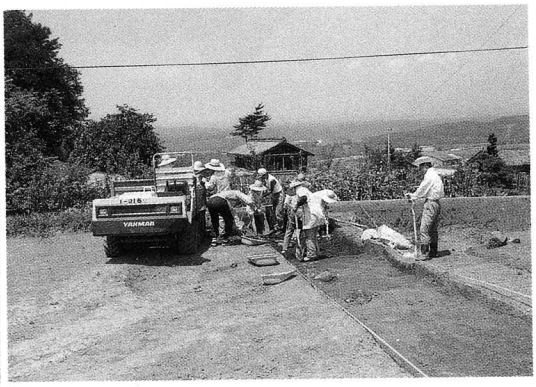
掘立柱建物跡（上部）



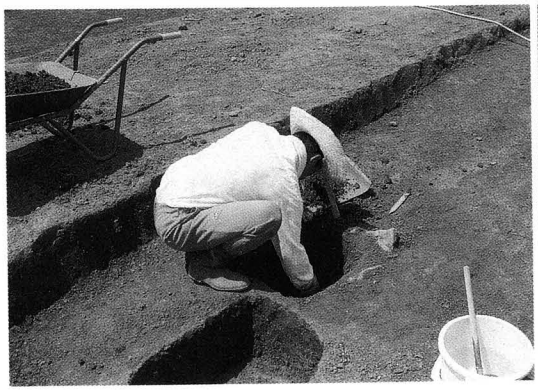
掘立柱建物跡（下部）

1(下)・2(上)号土壙墓

2号土壙墓古銭出土状況

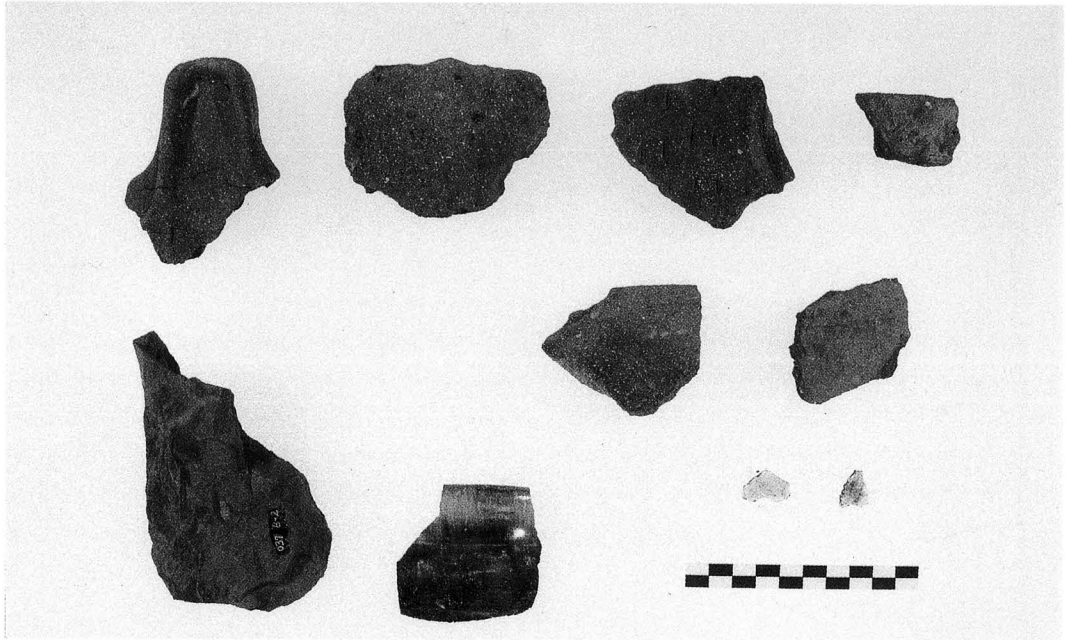


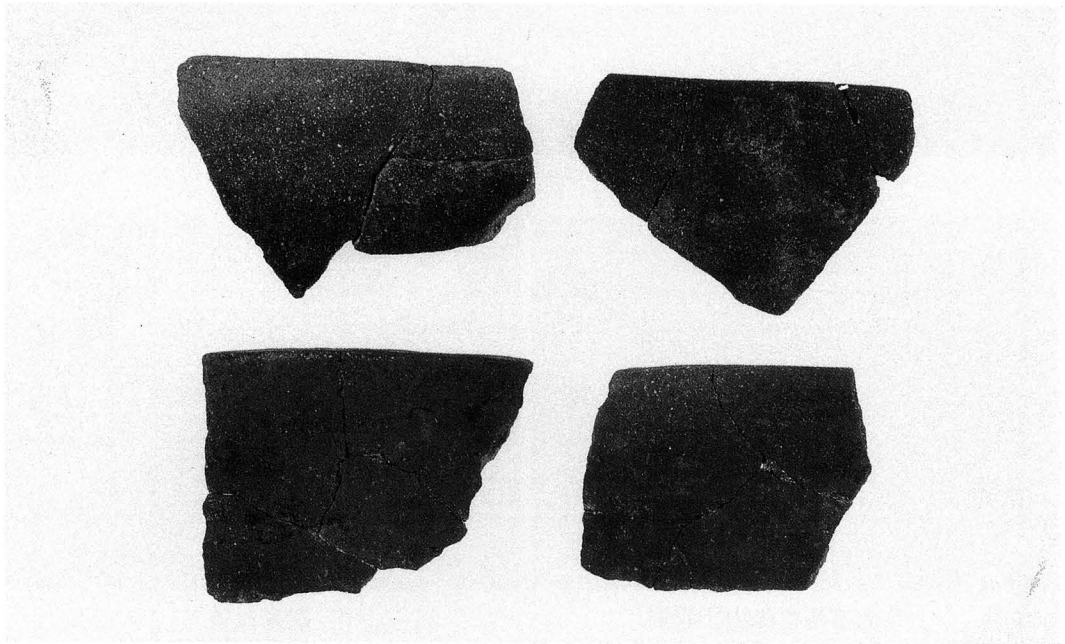

調査風景

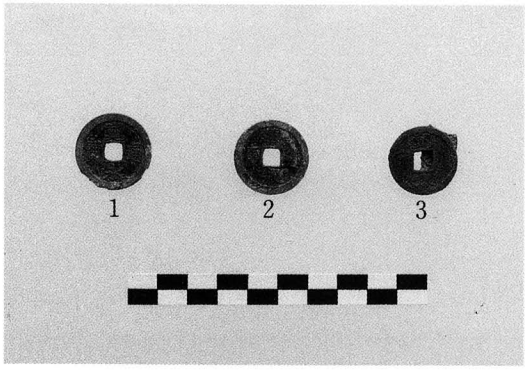


調査風景

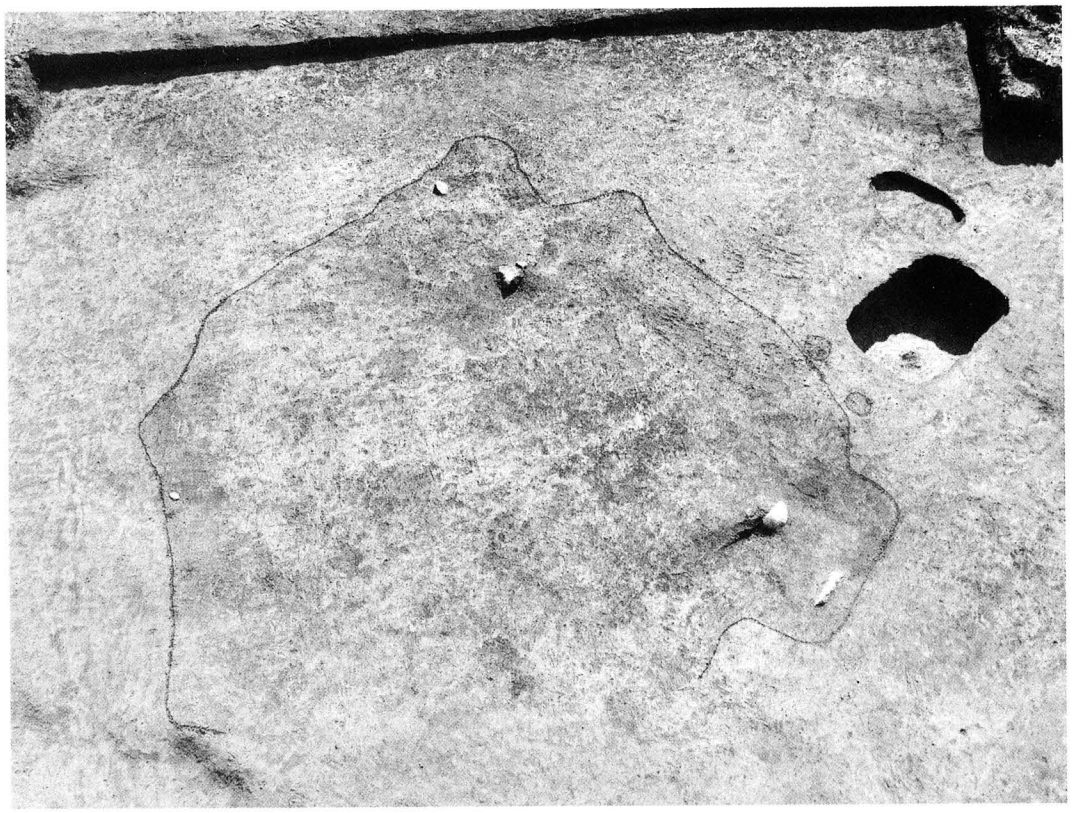
調査風景（実測）



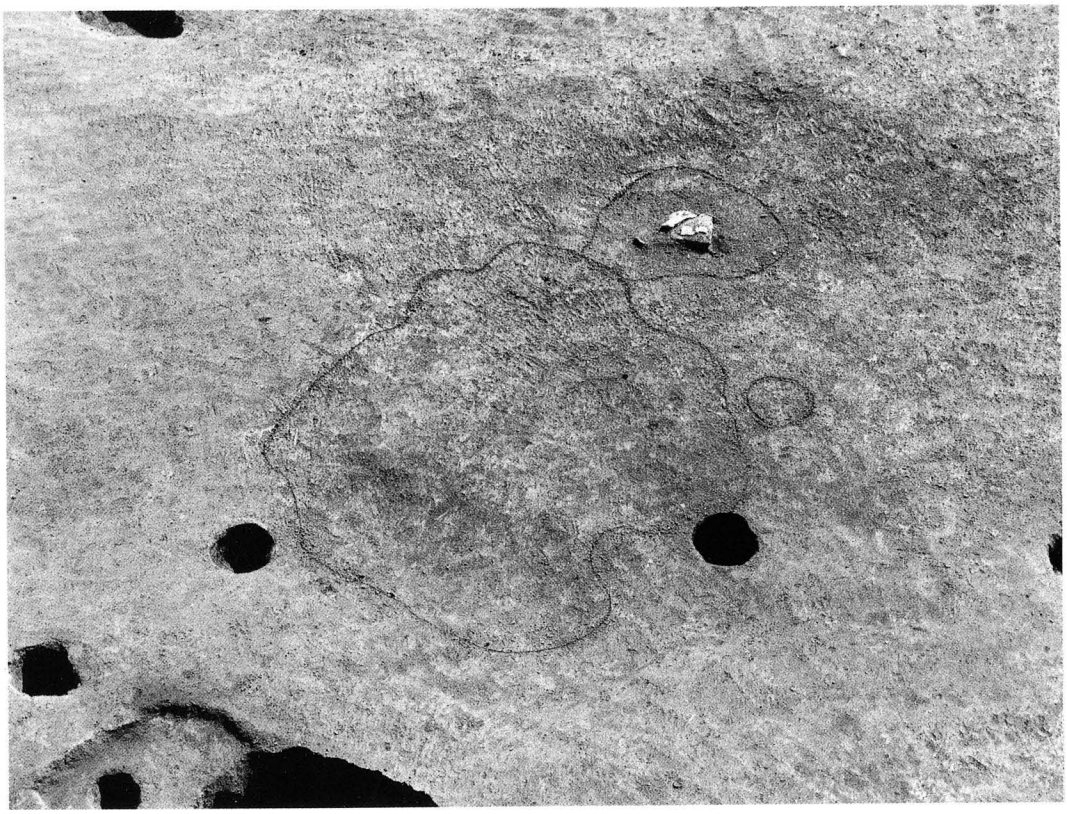




踊石II遺跡出土遺物



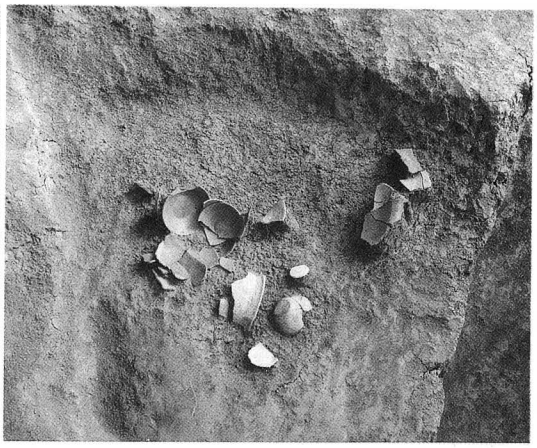
1号住居址



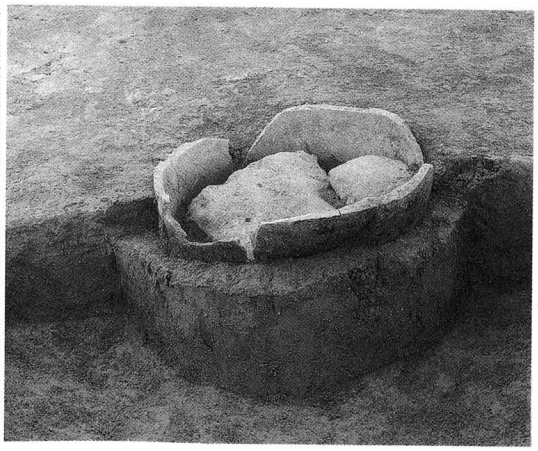
2号住居址

3号住居址カマド付近

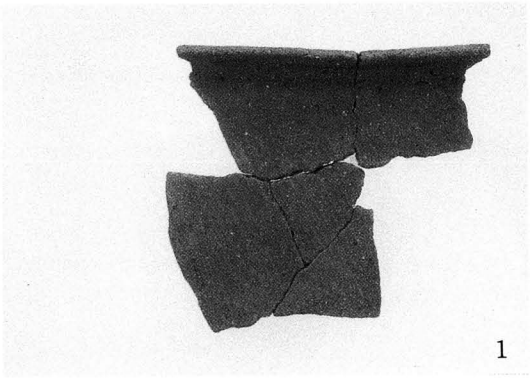
1号埋設土器

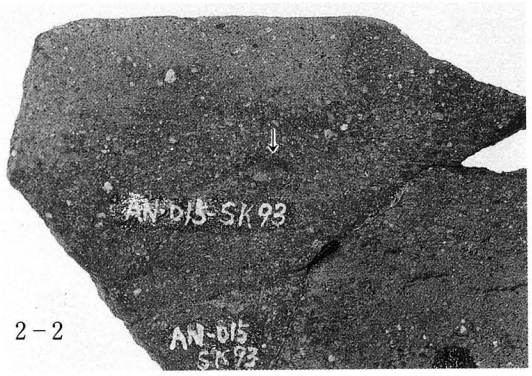


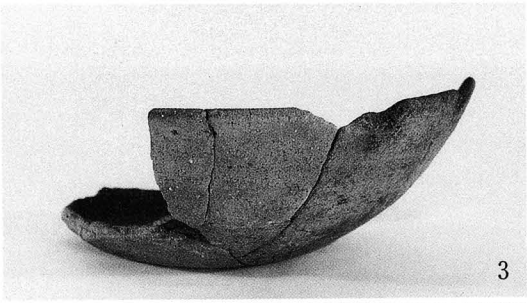
3号住居址土器出土状況

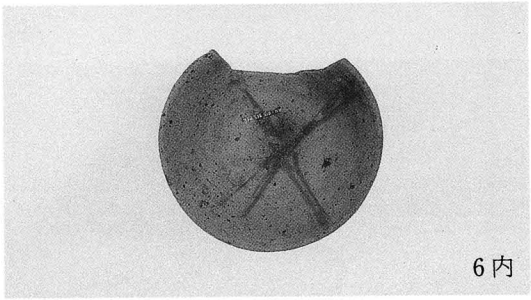


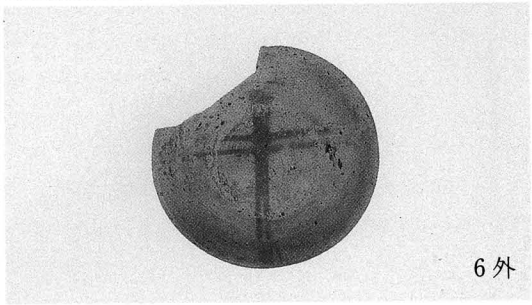
1号埋設土器内礫



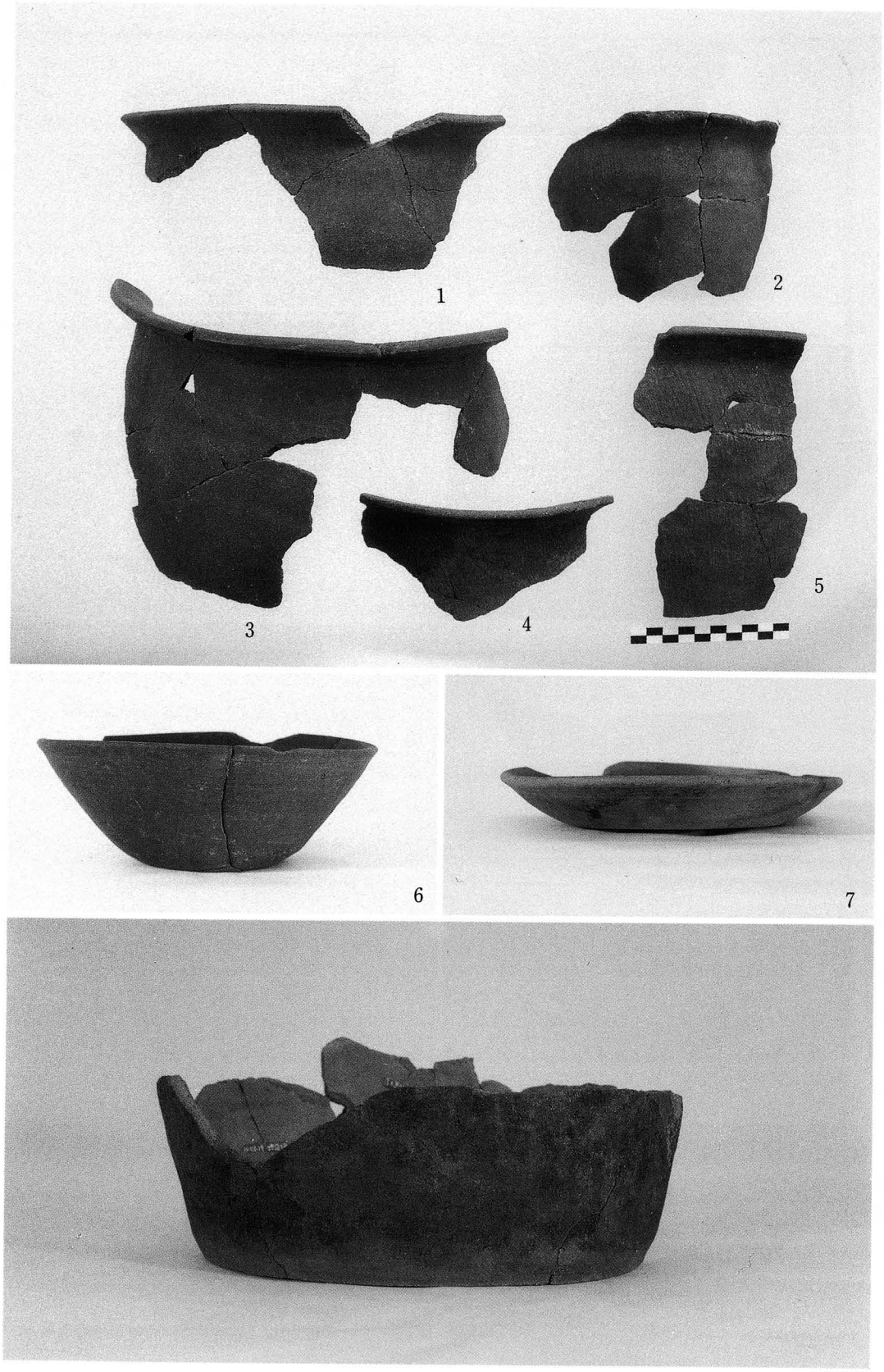


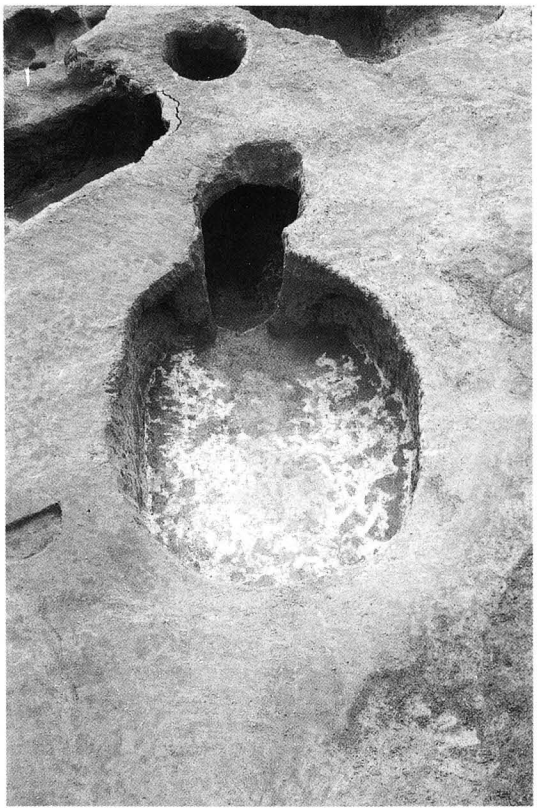





93号土坑、１・２・３号住居址出土遺物




3号住居址出土遺物・1号埋設土器（下）



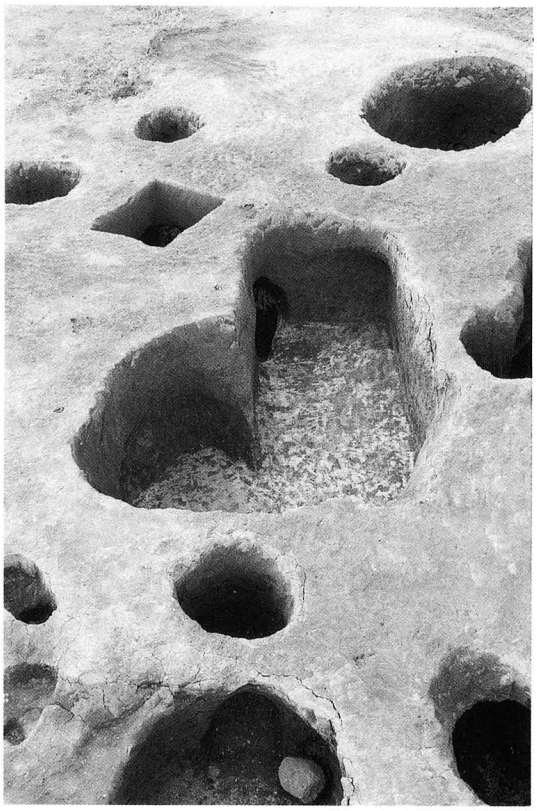
1号土坑

1号土坑炭化物出土状況

2号土坑

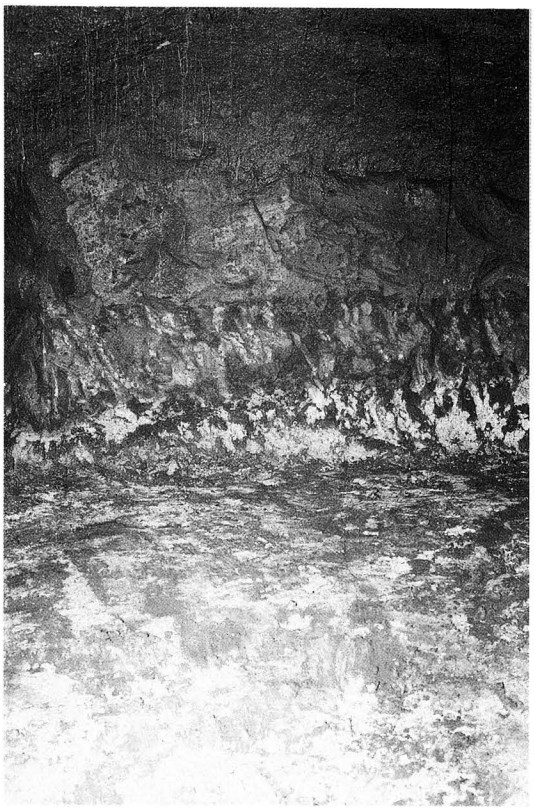
3号土坑

4号土坑



6（右）・18（左）号土坑

5号土坑竪坑入口（下）



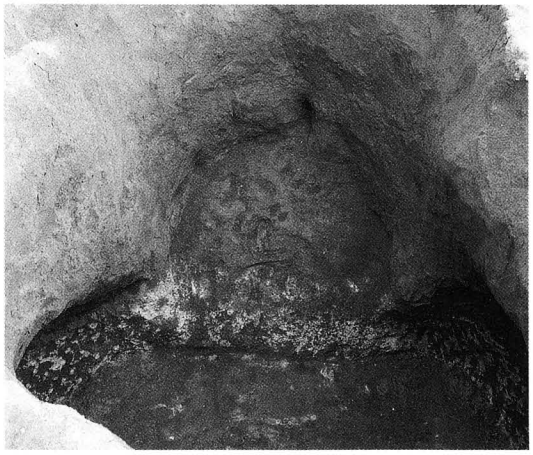
5号土坑地下室内部

7号土坑

9号土坑

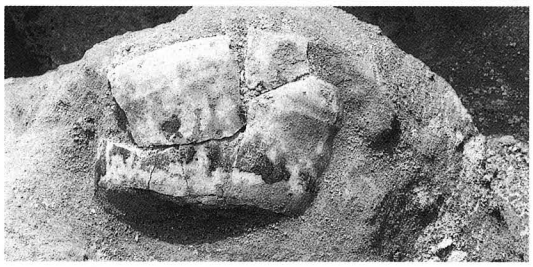
9号土坑内部

11号土坑



11号土坑 坑床

17号土坑



35号土坑・土器出土状況（下）

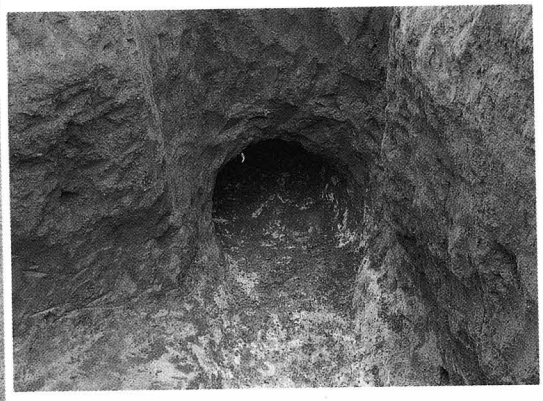
26号土坑

26号土坑内部土坑

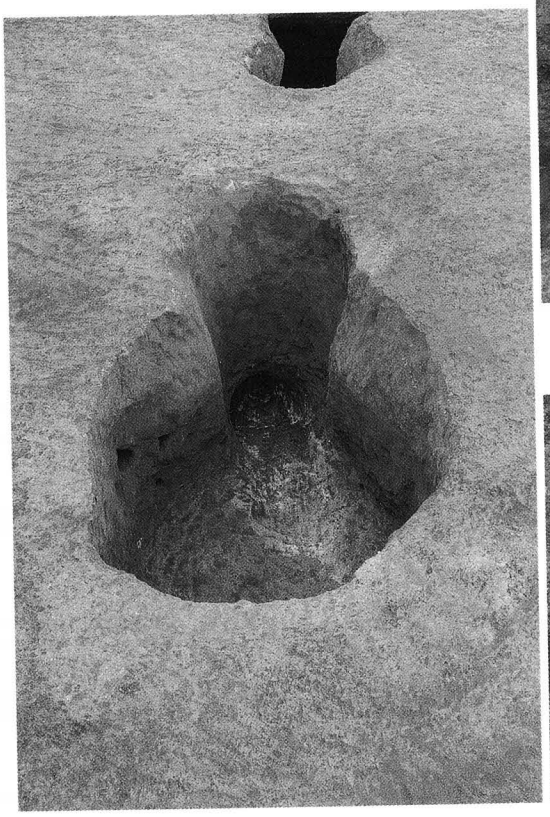
26号土坑工具痕

36号土坑

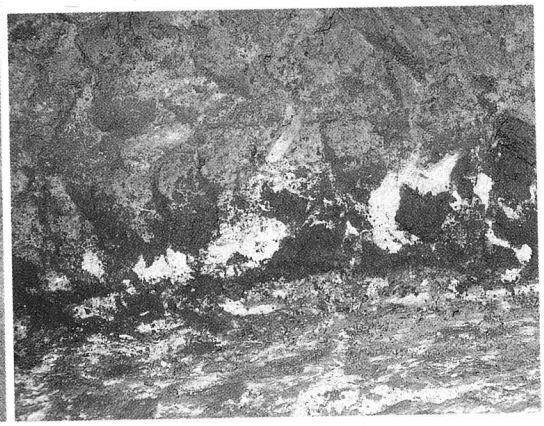
43号土坑



39号土坑第２室入口



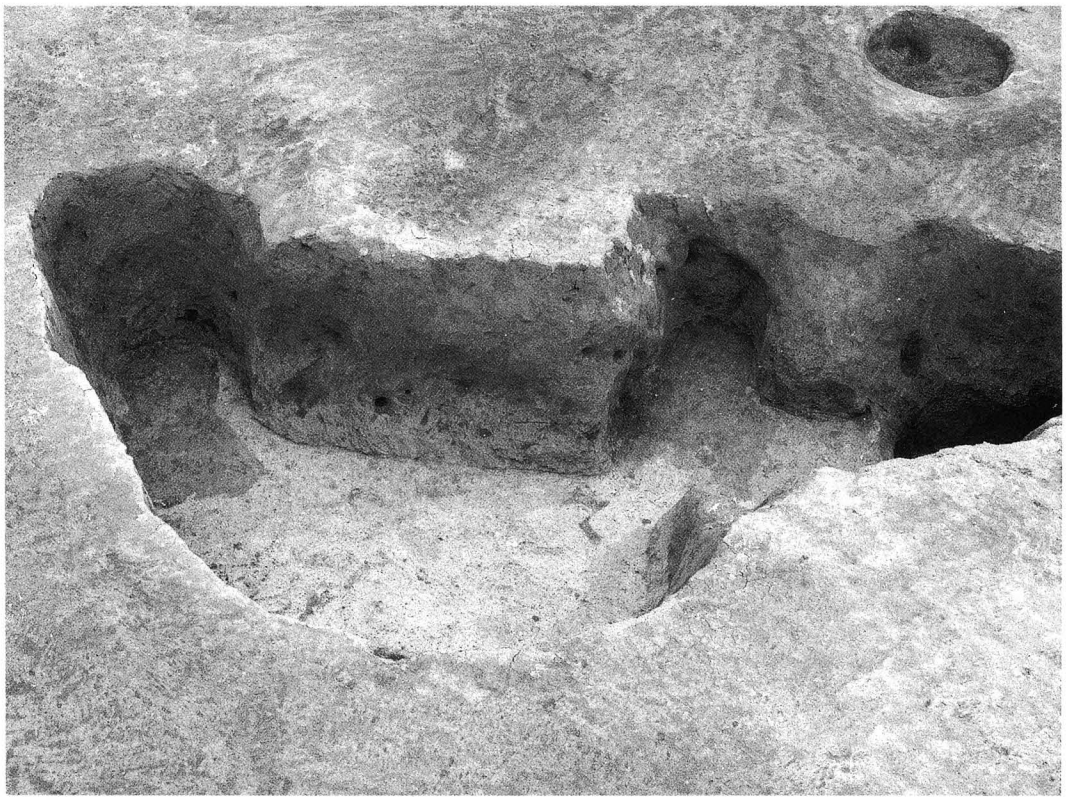
39号土坑



39号土坑第２室内部

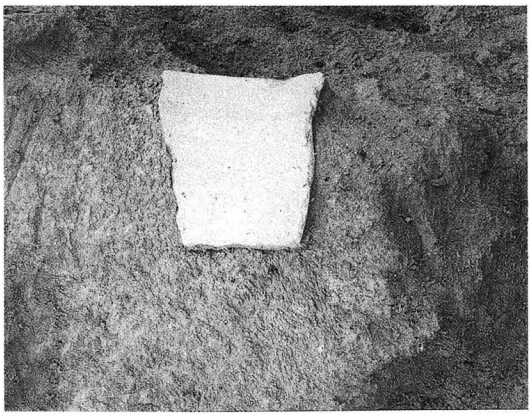
44・52・65・106号土坑（南東から）

44・52・65・106号土坑（南西から）



46号土坑

46号土坑炭化物出土状況

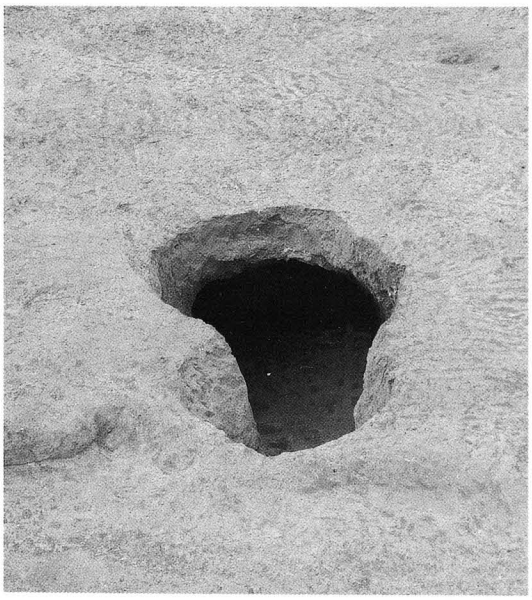


46号土坑内耳土器出土状況

46号土坑古銭出土状況

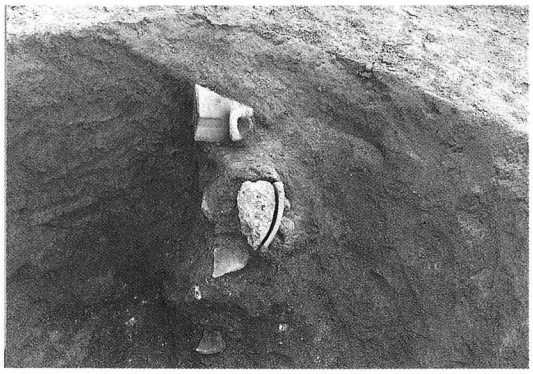
45号土坑

60号土坑竪坑入口



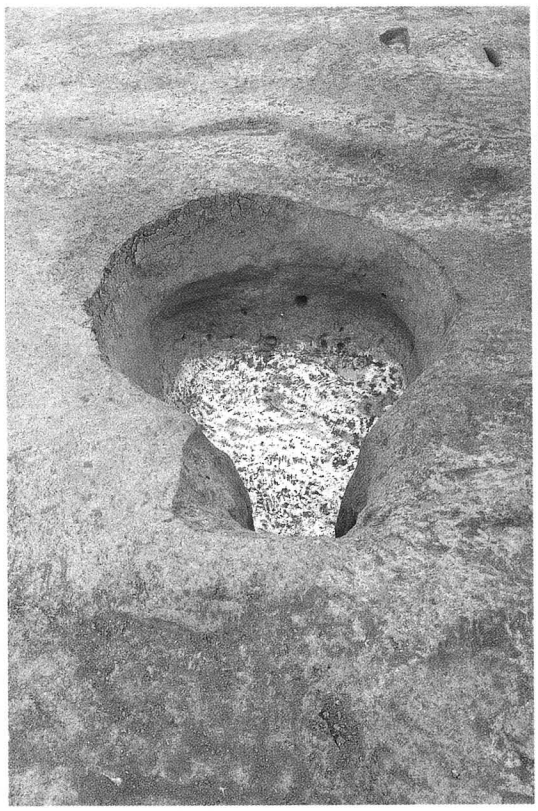
61号土坑

60 号土坑地下室内部

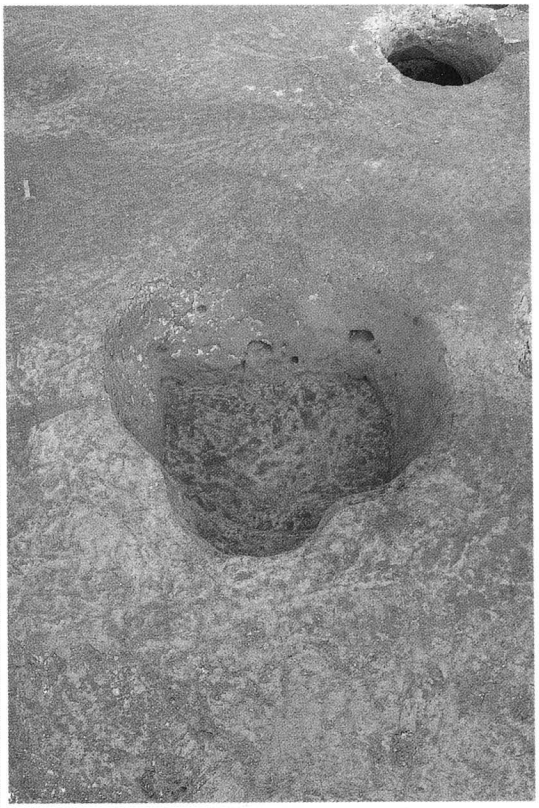


61号土坑土器出土状況

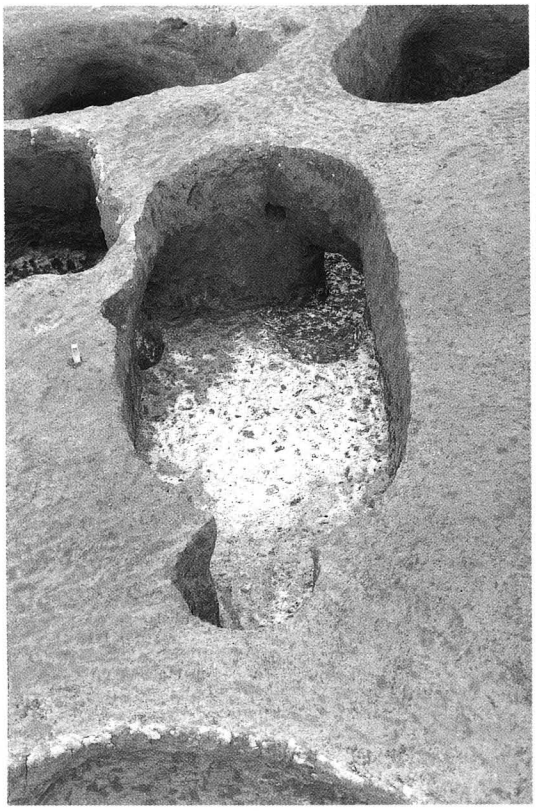
61号土坑ひで鉢（下）出土状況



64号土坑



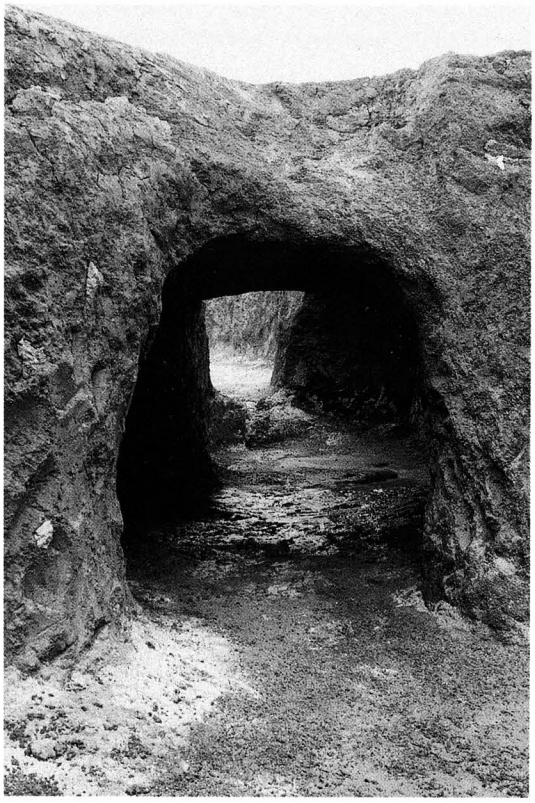
69号土坑



87号土坑

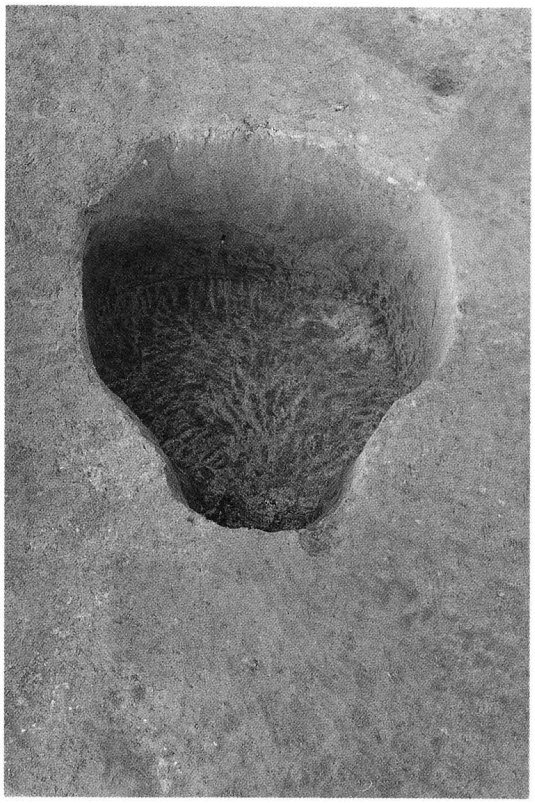
88号土坑

91号土坑



107号土坑

117号土坑



138号土坑

155・147・166号土坑（上から）

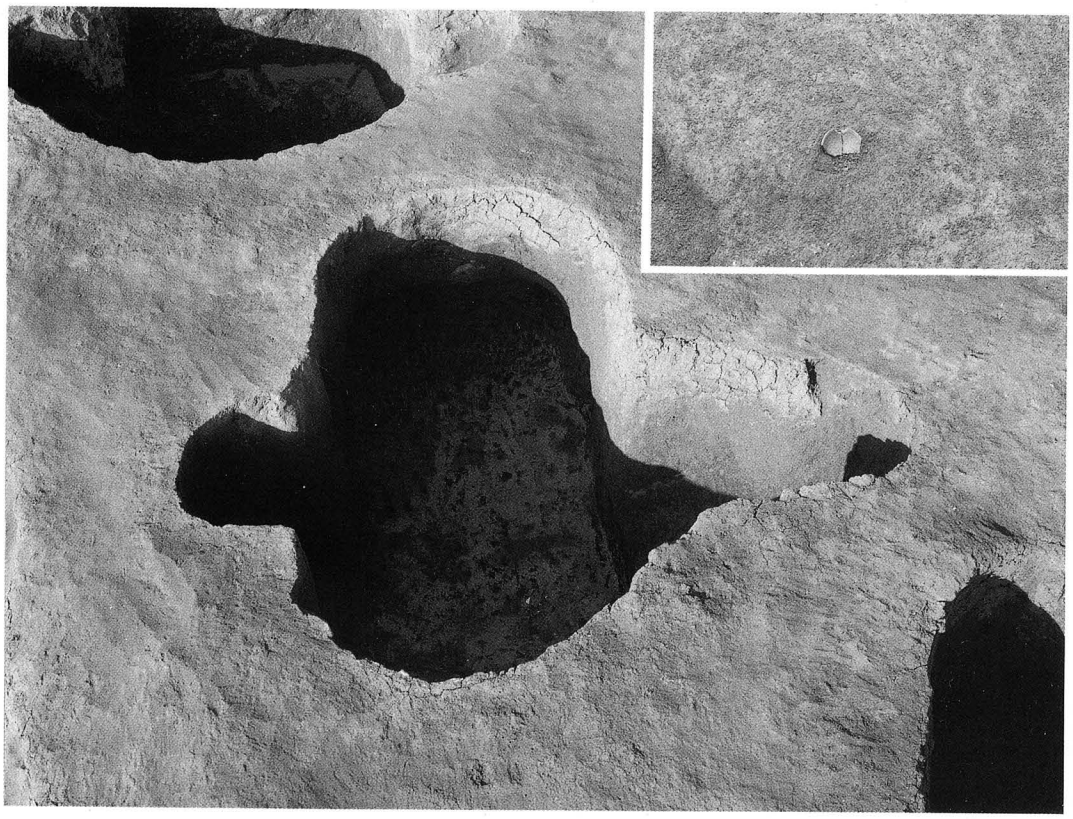
166・147・155号土坑（上から）

147号土坑炭化物出土状況

148号土坑

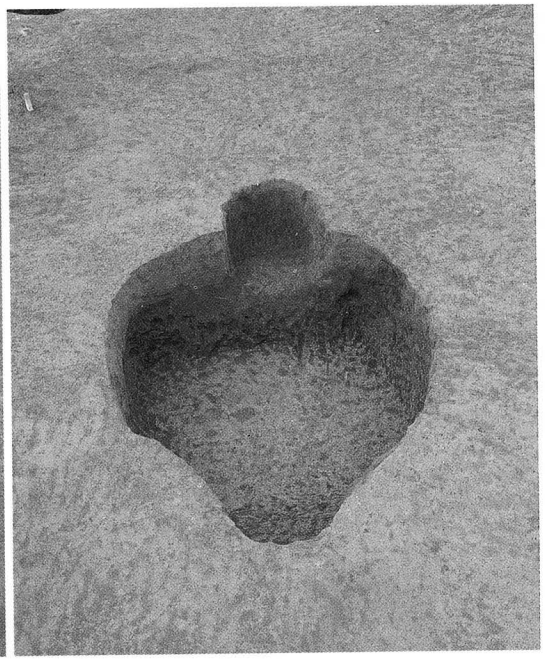
149号土坑

149号土坑遺物出土状況

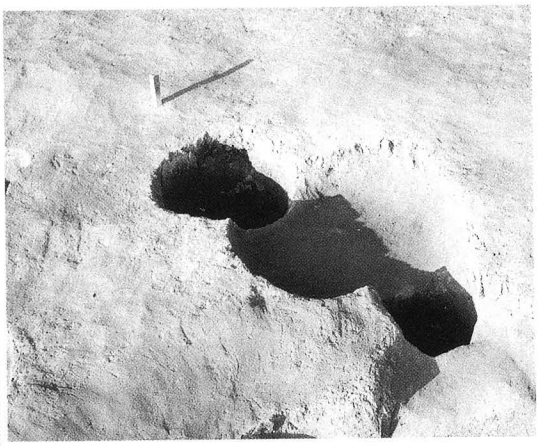


150号土坑・土器出土状況（上）

152号土坑

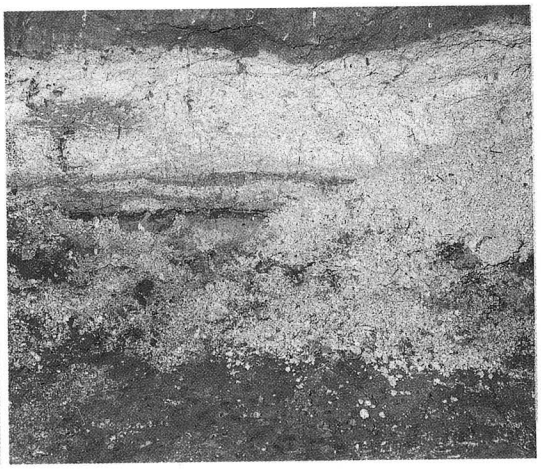


153号土坑



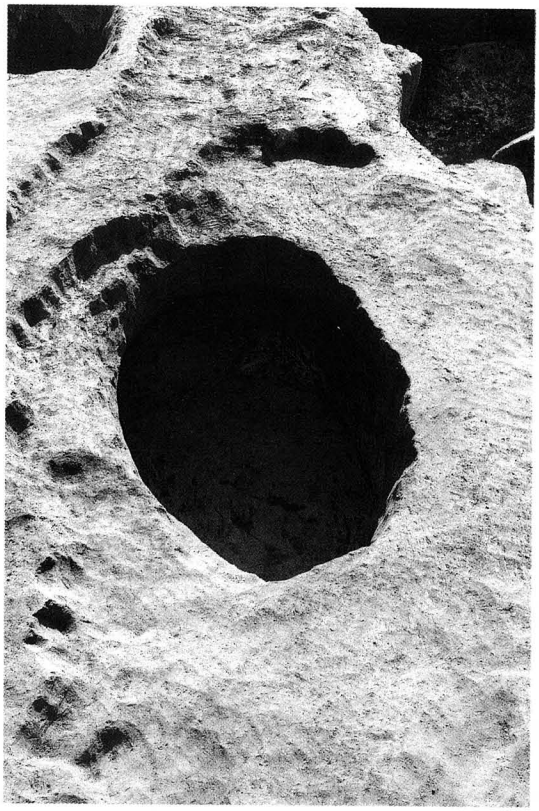
156 号土坑竪坑入口(上)

154号土坑・古銭出土状況（上）



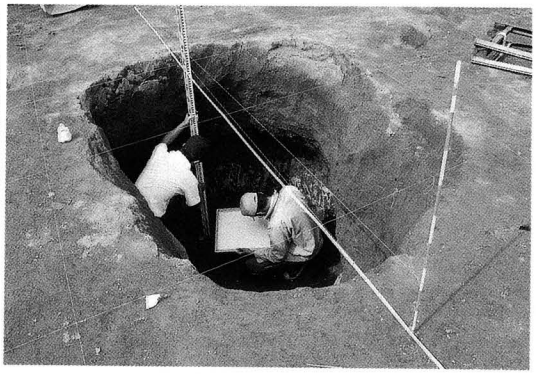
156号土坑地下室内部

168号土坑



169号土坑

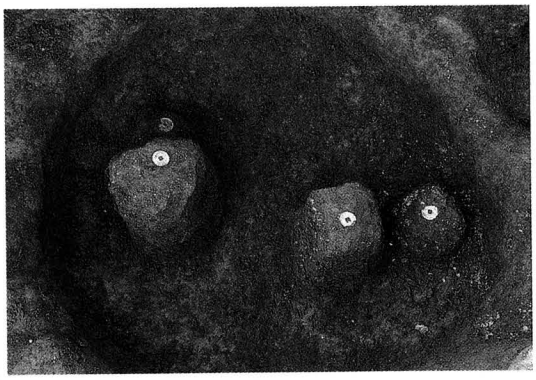
171号土坑



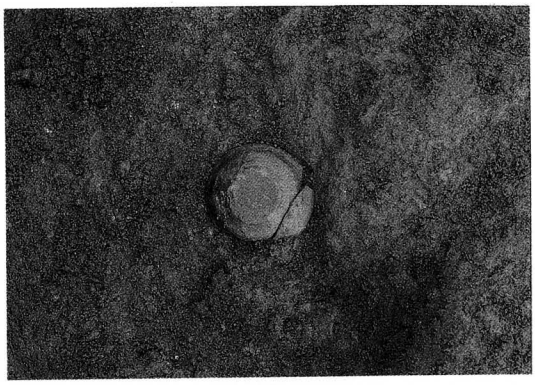
調査風景（実測）

調査風景

8号土坑

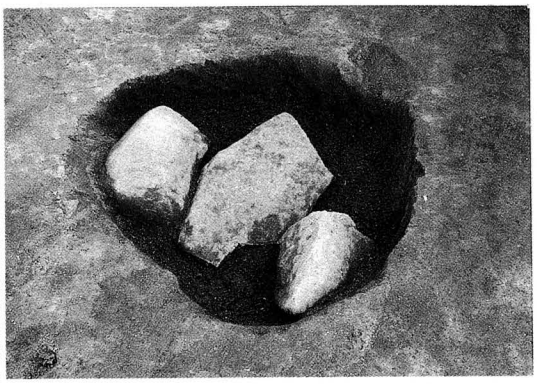


8号土坑古銭出土状況



8号土坑土器出土状況

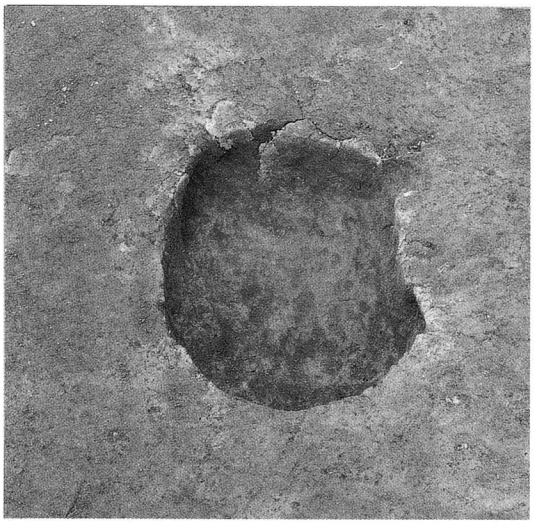
25（小）・113（大）号土坑



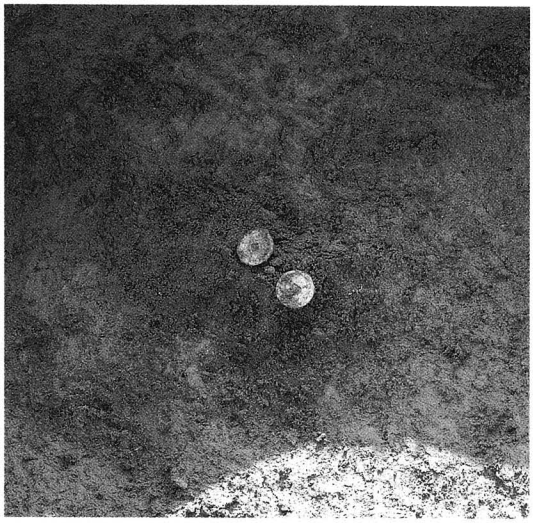
25号土坑礫出土状況

25号土坑古銭出土状況

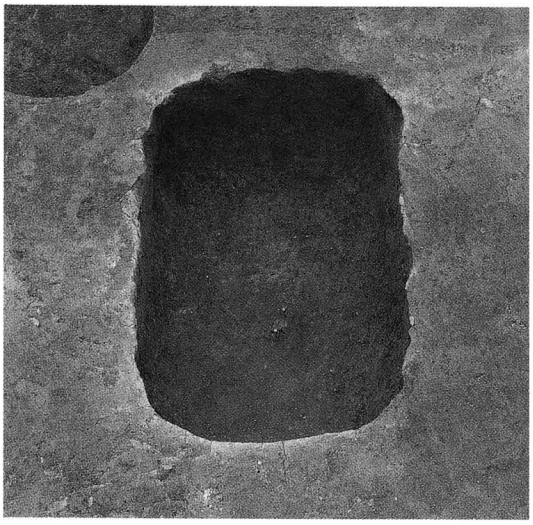
113号土坑古銭出土状況



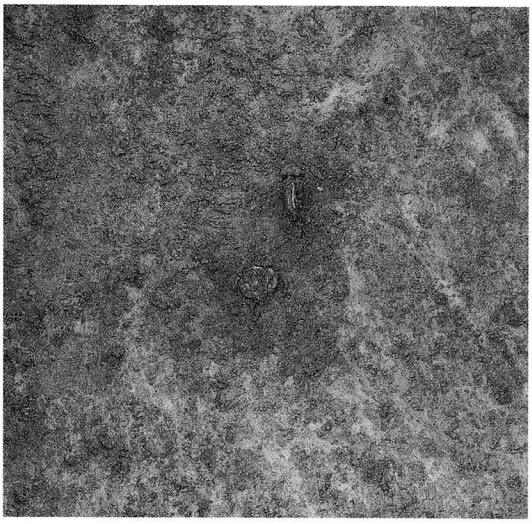
29号土坑



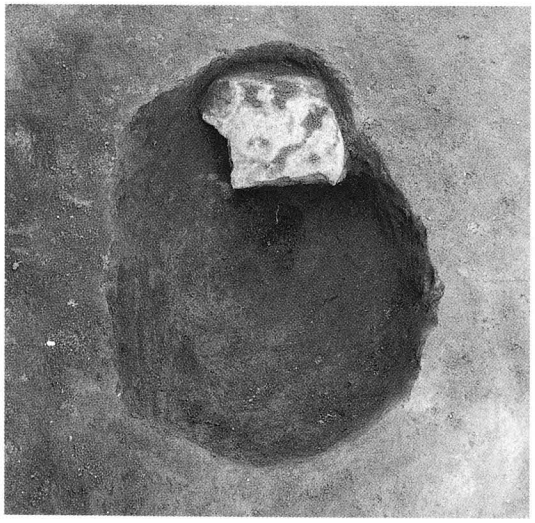
29号土坑古銭出土状況



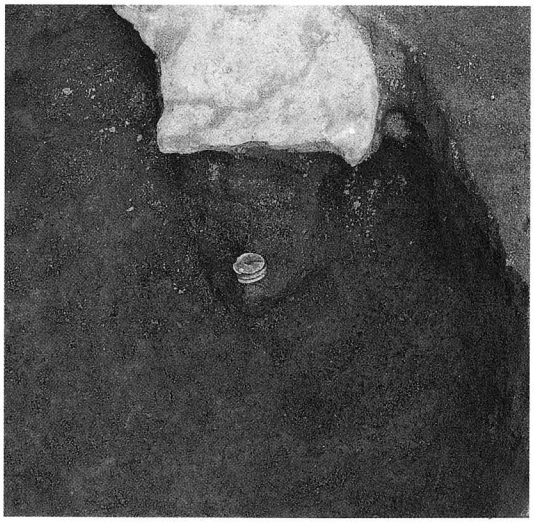
41号土坑



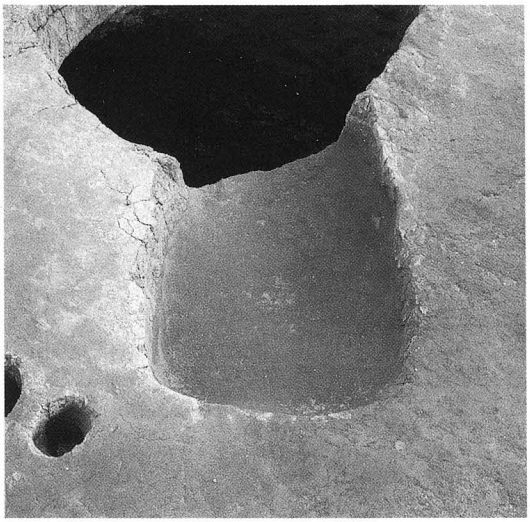
41号土坑古銭出土状況



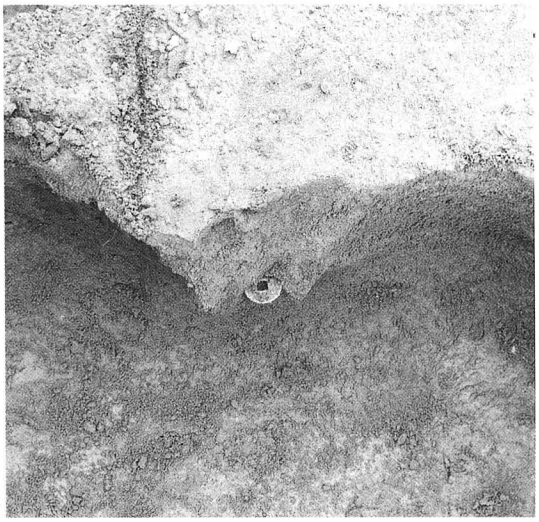
53号土坑



53号土坑古銭出土状況

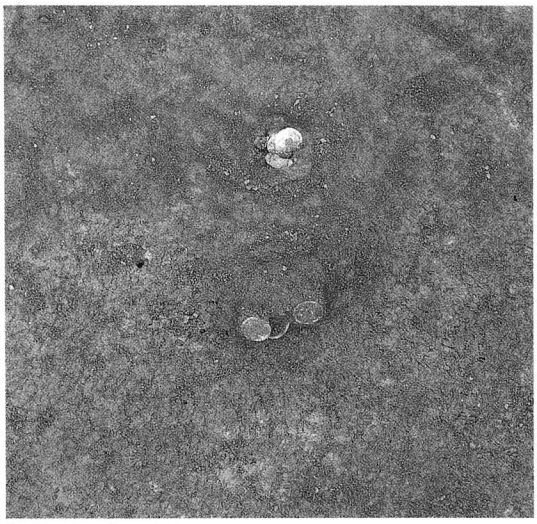


59号土坑

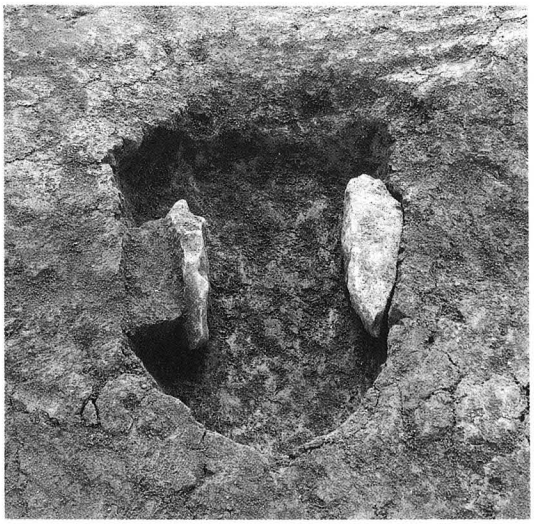


59号土坑古銭出土状況

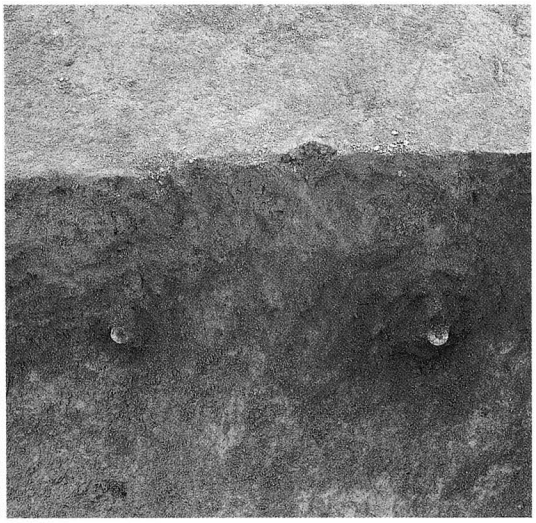
66（下）・68（上）号土坑



66号土坑古銭出土状況

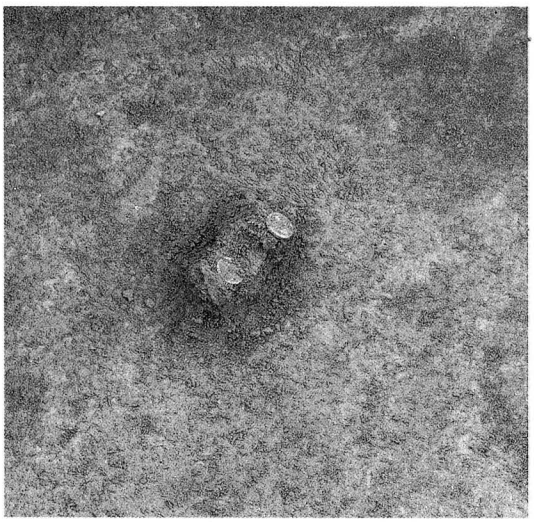


139号土坑

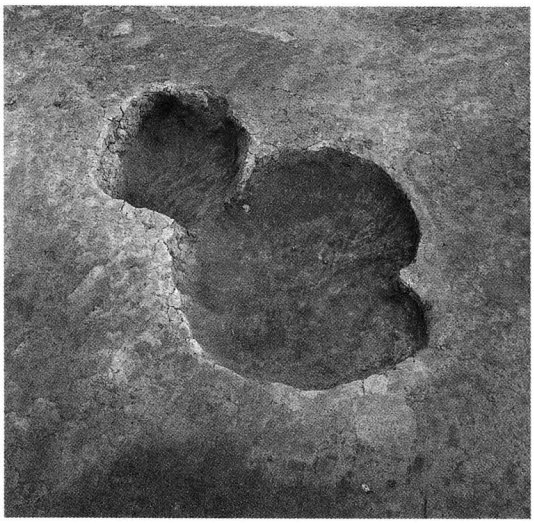


68号土坑古銭出土状況

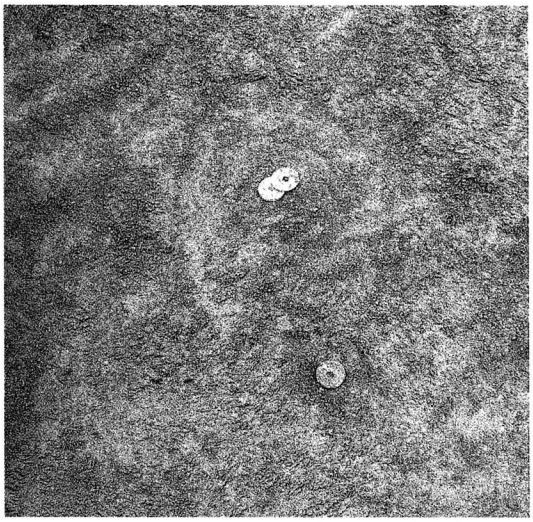
70号土坑



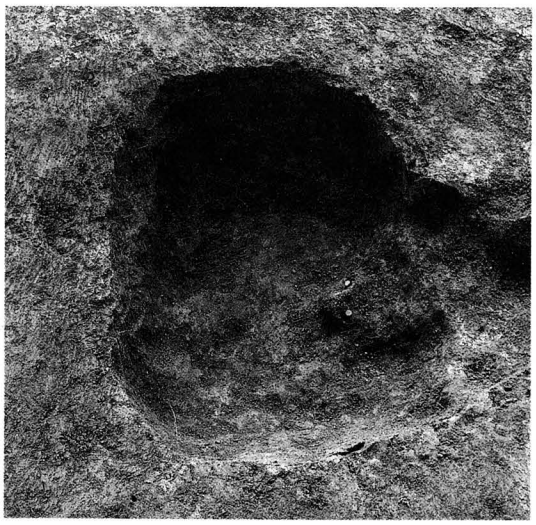
70号土坑古銭出土状況



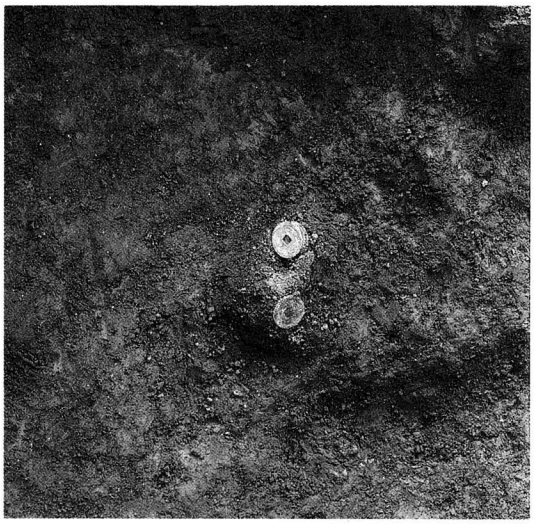
109号土坑（下）



109号土坑古銭出土状況



131号土坑



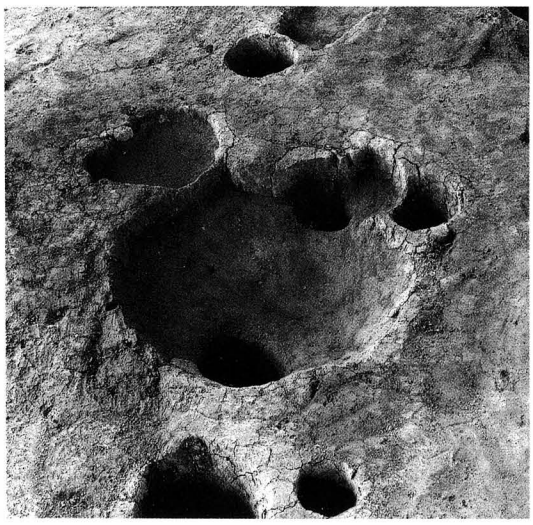
131号土坑古銭出土状況

135号土坑

135号土坑古銭出土状況

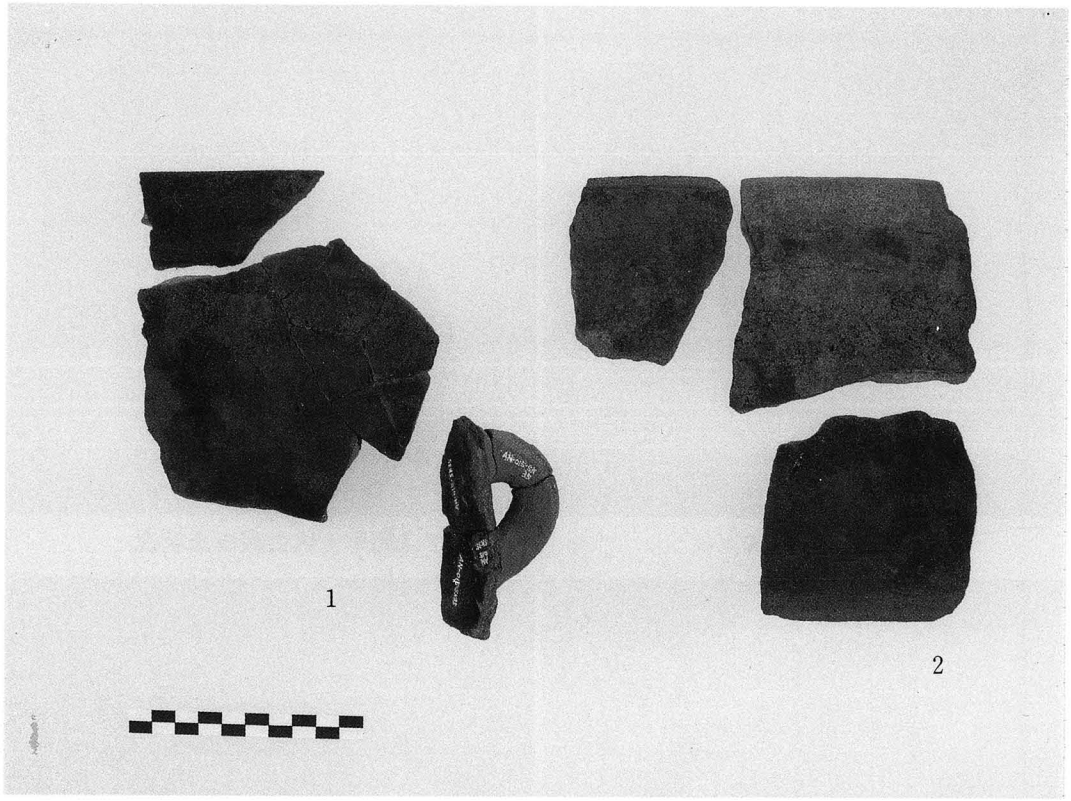
93号土坑

93号土坑土器出土状況

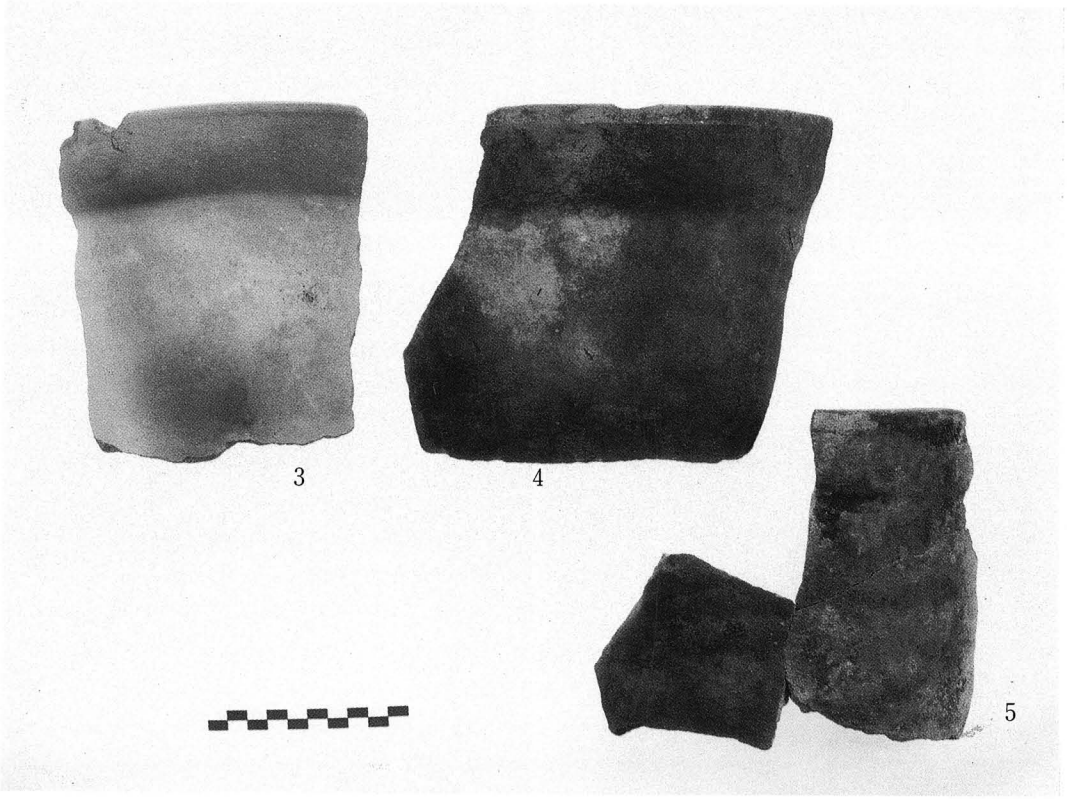


48号土坑

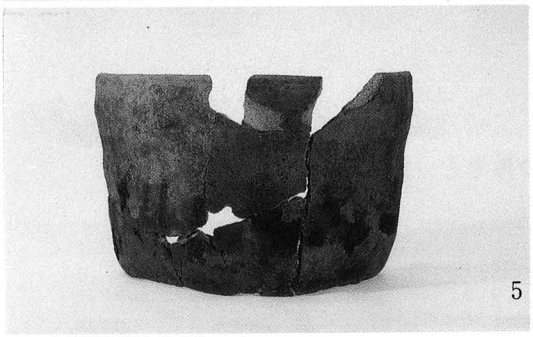
48号土坑土器出土状況

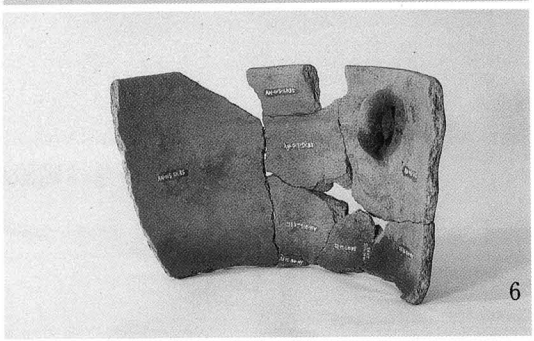


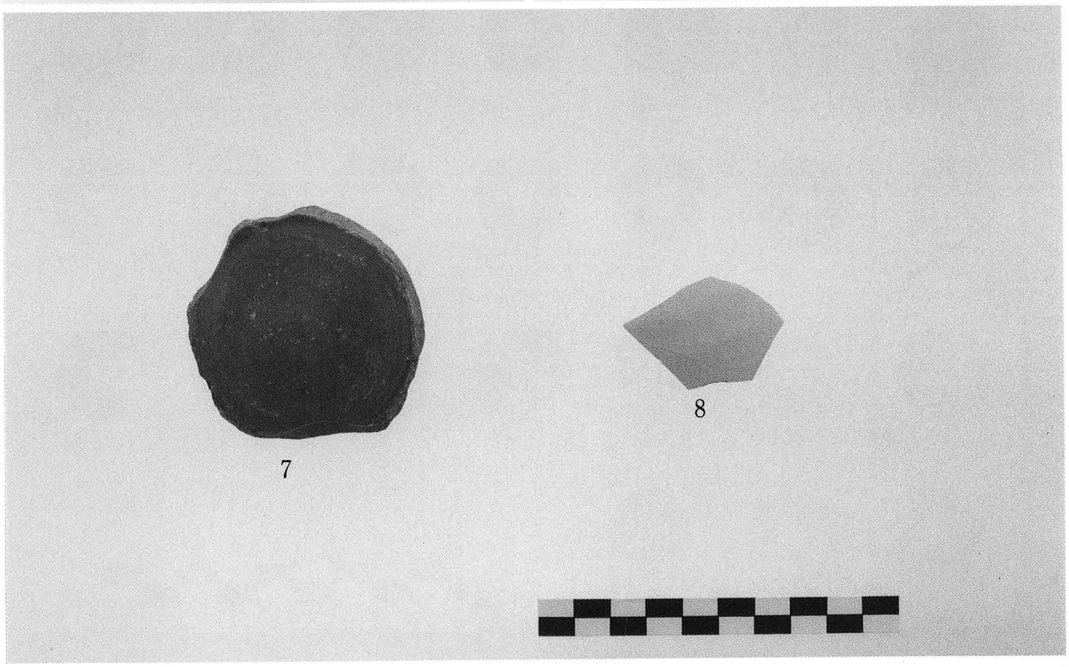

地下式坑出土土器



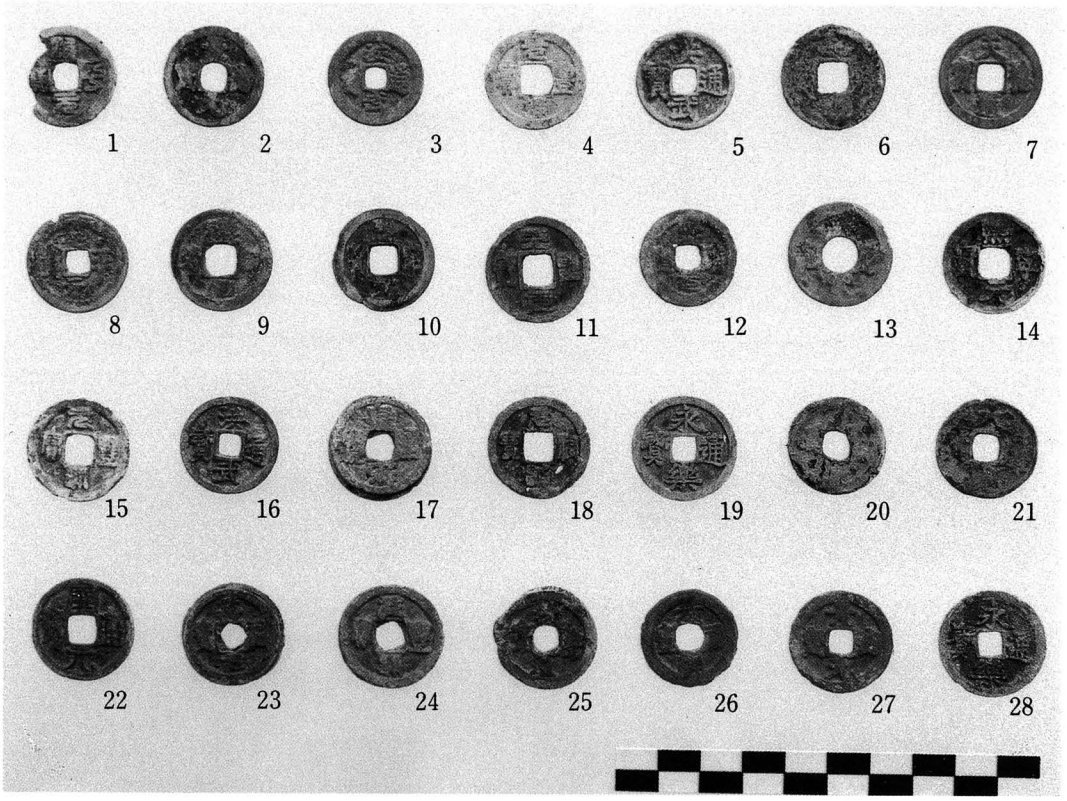

地下式坑出土土器



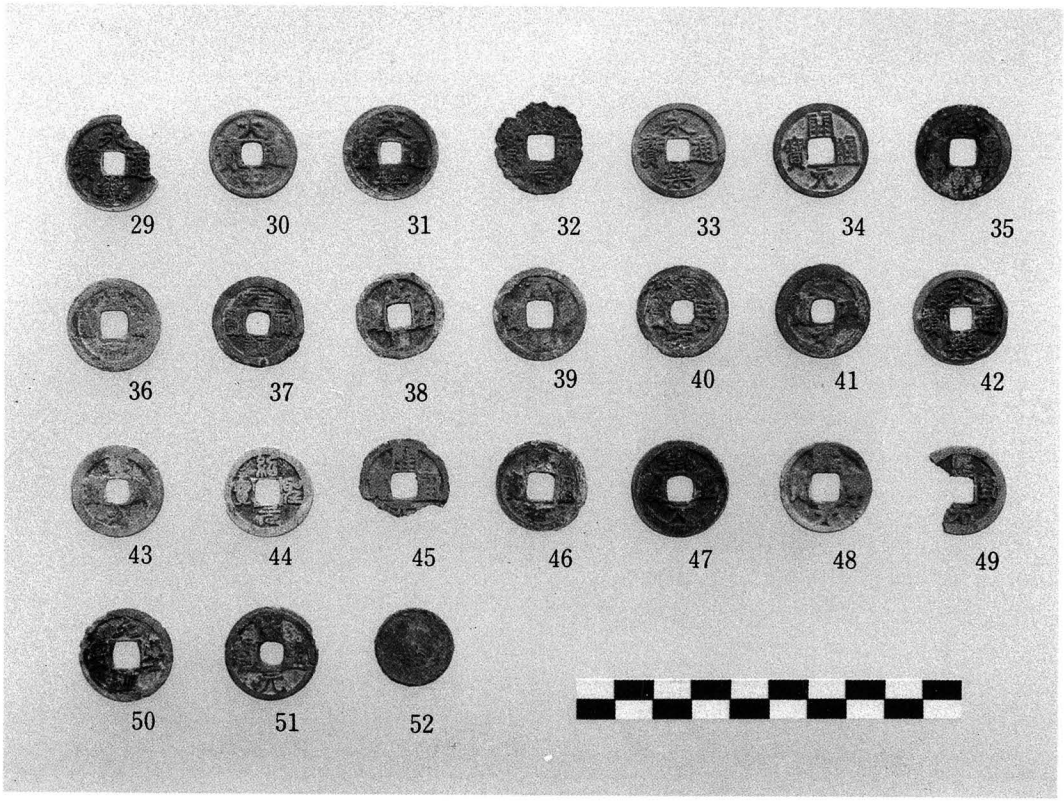



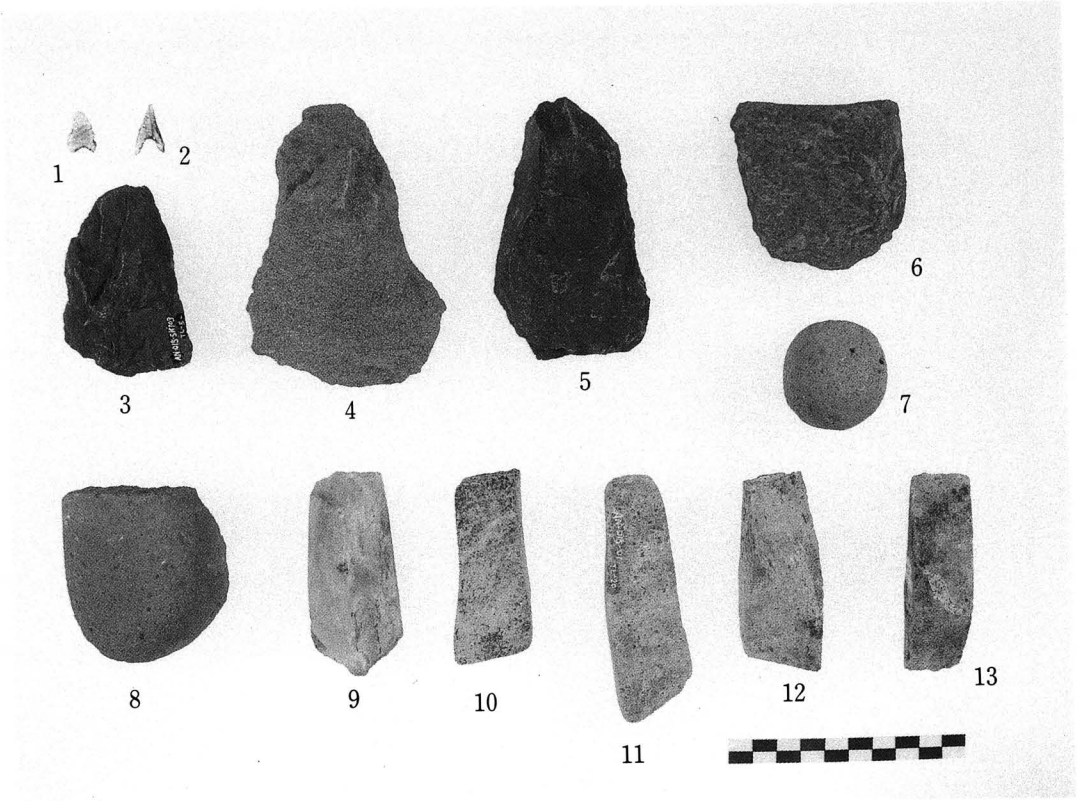

地下式坑・土壙墓・土坑出土遺物



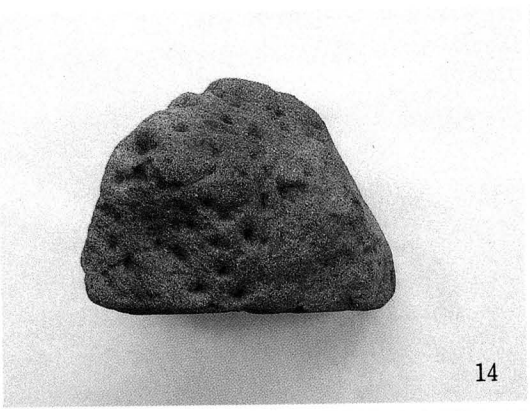

**古銭**（番号は図版の番号と一致する）

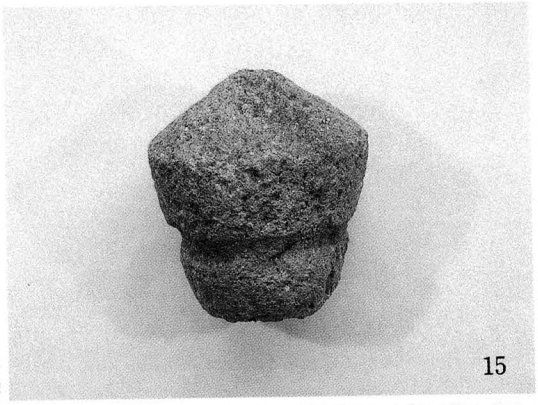



**古銭**（番号は図版の番号と一致する）

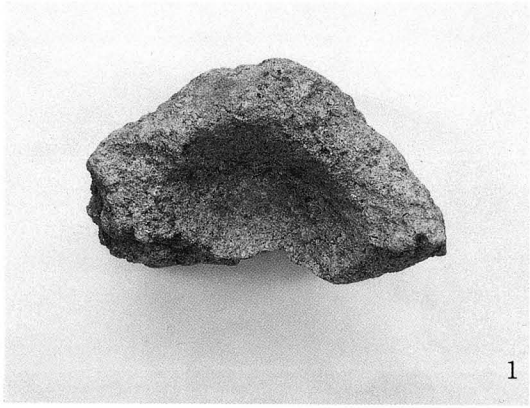


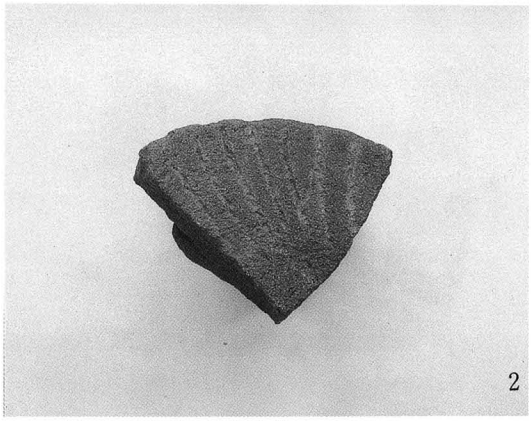

石器・石製品

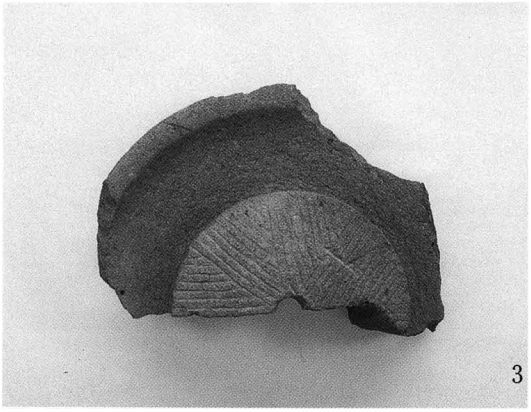


石製品

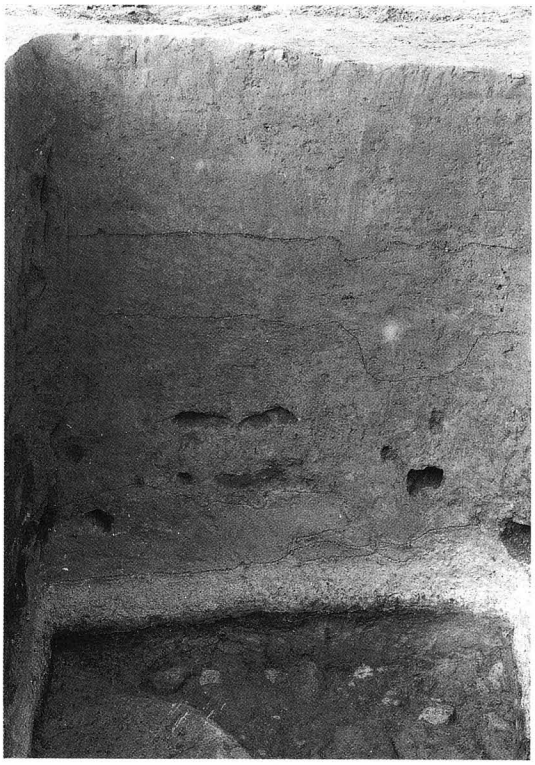


石製品（1～5）

土製品（馬）



深掘りセクション

遺跡全景（東から）

遺跡全景（東から）

明野村文化財調査報告　5

# 千野木Ⅰ・Ⅱ遺跡・池の下遺跡
# 踊石Ⅱ遺跡・中村道祖神遺跡

1990.3.31発行

発　行　明野村教育委員会
印　刷　株式会社サンニチ印刷